梶原南遺跡発掘調査報告書

昭和６３年３月

梶 原 遺 跡 調 査 会

正　誤　表

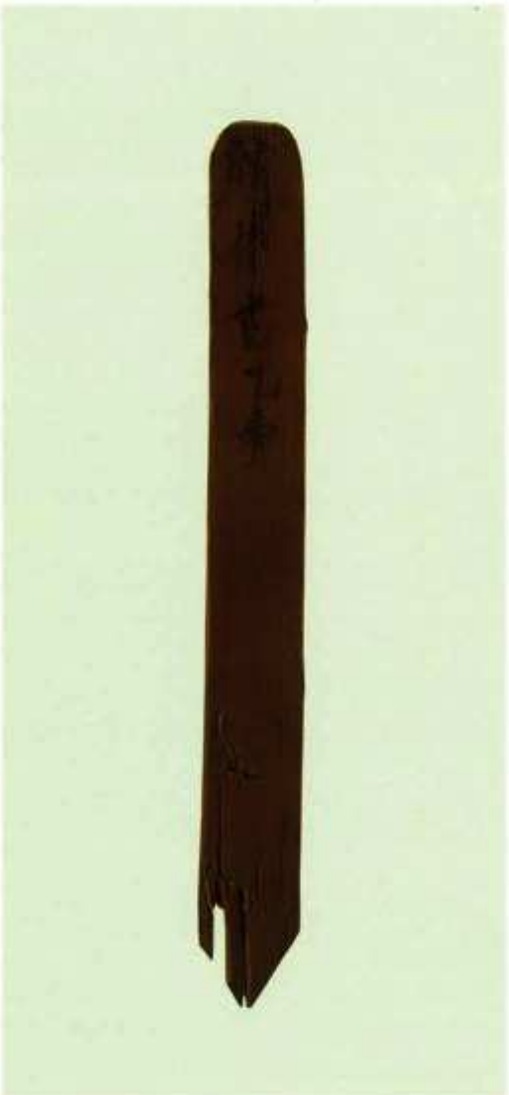
頁	行	誤	正
図版目次	PLATE 12	b. 住居跡1（南側から）	b. 住居跡1（西側から）
37	36	第6表である。	表－7である。
45	表－9	高槻市の古代掘立柱建物の規模	高槻市の古代掘立柱建物規模
PLATE 12		b. 住居跡1（南側から）	b. 住居跡1（西側から）
PLATE 13		b. 土　壙1（西側から）	b. 土　壙2（西側から）
PLATE 63		14. ス　ギ（柾目）	15. ヒノキ（木口）
〃		15. ヒノキ（木口）	17. サカキ（木口）
〃		16. ヒノキ（柾目）	14. ス　ギ（柾目）
〃		17. サカキ（木口）	16. ヒノキ（柾目）

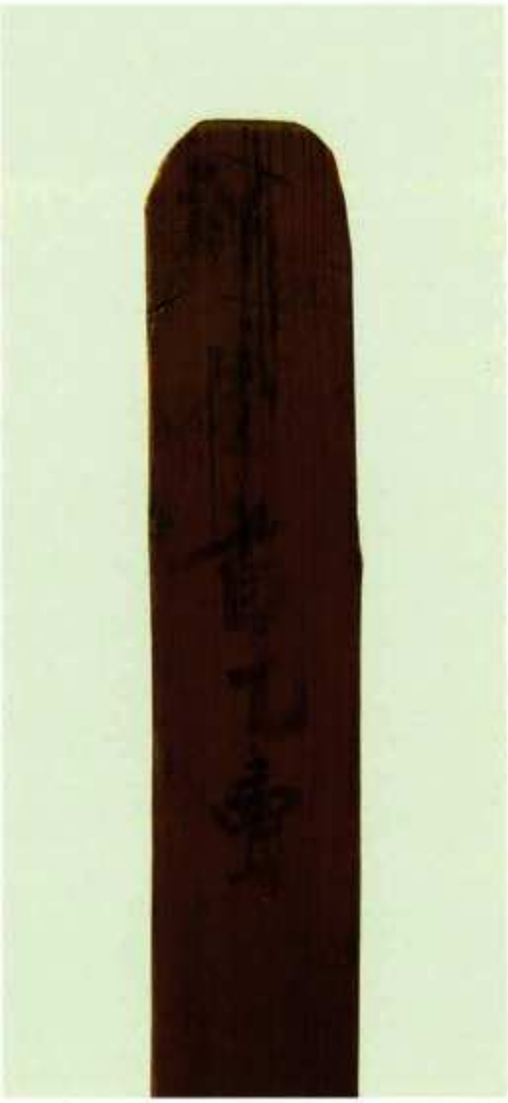
梶原南遺跡発掘調査報告書

昭和６３年３月

梶 原 遺 跡 調 査 会

1．梶原南遺跡遠景





2．木　　簡

序　　文

梶原南遺跡は、北は北摂山塊をひかえ南は淀川をのぞむ、要衝の地にあります。正倉院文書に梶原寺の名を残すことからも知られるように、かつて梶原、上牧の一帯は平城、平安の都から西国へむかう古代交通の要地として大いに繁栄したものと思われます。しかしこれまで、この地域では遺跡の調査や研究は梶原寺と上牧遺跡以外おこなわれておらず、とくに奈良・平安時代の様相はほとんど把握されておりません。

このようななか、梶原遺跡調査会では、昭和58・60・62年度の3次にわたり、府営上牧住宅の建替工事にさきだって発掘調査をおこない、奈良時代の集落遺跡として梶原南遺跡を位置付けうる資料を得ることができました。なかでも第3次調査では井戸をともなう建物群を確認し、集落の実態に迫るてがかりを得ました。また出土した木簡は、古代人名にあらたに一姓を加えるものとして、史料研究のうえでも貴重な発見といえましょう。今後これらは、檜尾川東方地域の歴史を解明するための重要な資料となるものと考えております。

ここに3次にわたった梶原南遺跡の発掘調査結果をまとめ、報告させていただく次第です。種々誤りや遺漏があるかと思われますが、多くの方々のご教示をいただければ幸いです。

最後に本調査会の運営ならびにこれまでの調査にご指導、ご協力いただいた関係各位に心からお礼申しあげます。

昭和63年3月

梶原遺跡調査会

理事長　藪　　重彦

例　　言

1．本書は、梶原遺跡調査会が高槻市五領町８番地外で調査を実施した梶原南遺跡の発掘調査報告書である。なお梶原南遺跡は、本調査会の第１次・第２次調査結果に基づき、従前知られていた梶原遺跡から分割して新たに設定された名称である。したがって梶原南遺跡は高槻市五領町を中心に、また梶原遺跡は高槻市梶原四丁目を中心に分布する遺跡として位置付けられる。

2．事業は、大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、昭和58・60・62年度の３カ年度にわたって実施した。期間及び総事業費は以下のとおりである。

第１次(昭和58年度)	期　間	昭和58年12月２日～昭和59年３月31日
	総事業費	8,000,000円
第２次(昭和60年度)	期　間	昭和60年７月23日～昭和60年11月30日
	総事業費	9,000,000円
第３次(昭和62年度)	期　間	昭和62年４月17日～昭和63年３月31日
	総事業費	19,500,000円

3．各事業年次の調査期間及び調査担当者は、以下のとおりである。

第１次調査	期　間	昭和59年１月９日着手、同年３月９日完了
	担当者	冨成哲也、大船孝弘
第２次調査	期　間	昭和60年８月５日着手、同年９月25日完了
	担当者	冨成哲也、宮崎康雄
第３次調査	期　間	昭和62年４月20日着手、同年８月８日完了
	担当者	冨成哲也、宮崎康雄

4．調査会は、大阪府・大阪府教育委員会・高槻市教育委員会の担当職員及び学術研究者らで構成し、事業を行った。会の構成は以下のとおりである。

		第１次	第２次	第３次
理事長	高槻市教育委員会教育長	藪　重彦	藪　重彦	藪　重彦
理　事	高槻市文化財保護審議会委員	原口　正三	原口　正三	原口　正三
	帝塚山短期大学教授	田代　克己	田代　克己	田代　克己
	大阪府教育委員会文化財保護課長	藪内　盛雄	吉房　康幸	吉房　康幸
	大阪府建築部住宅建設課長	阪倉　克巳	原出　明治	原田　明治
	大阪府建築部住宅建設課長			実藤　清二
	高槻市教育委員会社会教育部長	足立　晴一	橋長　勉	橋長　勉
監　事	高槻市教育委員会管理部長	植田　實	植田　實	足立　晴一
	高槻市教育委員会管理部次長	奥田　晴基	井出　正夫	井出　正夫
調査部長	大阪府教育委員会文化財保護課記念物係長	井藤　徹	堀江　門也	堀江　門也

調査員	高槻市立埋蔵文化財調査センター所長	冨成　哲也	冨成　哲也	冨成　哲也
	高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員	大船　孝弘	宮崎　康雄 （文化財専門員）	宮崎　康雄 （　〃　）
事務部長	高槻市教育委員会社会教育部次長	橋長　勉	西阪　弘	西阪　弘
事務職員	高槻市教育委員会社会教育課長	西阪　弘	寺田　貞夫 （同課文化係長）	杉本　秀一
	高槻市立埋蔵文化財調査センター事務吏員	入江　淳	入江　淳	鐘ケ江一朗 （技術吏員）

5．本書の構成・執筆は、宮崎康雄がおこなった。

6．遺構の実測・製図は主として宮崎康雄があたり、京都府立大学学生北原治氏の援助を受けた。遺物の実測、製図は宮崎が、写真撮影は大船孝弘が担当し、白銀良子氏の援助を受けた。

7．花粉分析及び出土木材の樹種鑑定については、大阪府立三島高校教諭・徳丸始朗氏、蛍光X線分析については大阪瓦斯株式会社総合研究所分析センターに委託し、報告をいただいた。

8．空中写真撮影は阪急航空株式会社に委託した。第3次調査で出土した木製品は、財団法人元興寺文化財研究所に委託して保存処理をおこなった。

9．第3次調査で出土した木簡解読については、奈良国立文化財研究所・綾村宏氏、鬼頭清明氏のご指導を得たほか、遺物の整理及び本書の作成にあたっては下記の方々のお世話になりました。

橋本久和、森田克行、恵谷英俊、木曽　広、後藤勇子、八十健次、江浦　洋、
笠井敏光、富井康夫、西口陽一、長谷　実、野崎　準（順不同）

10．調査の実施にあたり、大阪府建築部住宅建設課の援助と、上牧住宅白治親交会（会長・平林　哲）の方々のご協力をいただいた。
記して感謝の意を表します。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに

1．位置と環境 …… 1

2．調査経過 …… 2

第Ⅱ章　遺　構

1．層　序 …… 4

2．弥生・古墳時代の遺構 …… 4

3．奈良時代の遺構 …… 6

4．平安時代以降の遺構 …… 13

第Ⅲ章　遺　物

1．土器・土製品 …… 15

2．墨書土器 …… 22

3．硯 …… 23

4．製塩土器 …… 23

5．瓦 …… 23

6．木製品 …… 24

7．石製品・砥石 …… 25

8．金属製品 …… 26

9．鋳・鍛造関係遺物 …… 26

第Ⅳ章　自然科学的分析

1．梶原南遺跡の花粉分析および木材の樹種 …… 28

2．蛍光X線分析 …… 40

第Ⅴ章　ま と め …… 43

挿図目次

図－1　梶原南遺跡とその周辺
図－2　調査位置図
図－3　公民館地区平面図
図－4　土層断面（柱状図）
図－5　住居跡1、土壙1平面図・断面図
図－6　井戸1平面図・断面図
図－7　井戸2平面図・断面図
図－8　土壙墓1平面図・断面図
図－9　方形土壙平面図・断面図
図－10　弥生・古墳時代の土器
図－11　軒丸瓦・平瓦
図－12　金属製品、鋳・鍛造関係遺物
図－13　マツ属花粉検出量
図－14　コナラ属花粉検出量
図－15　照葉樹花粉検出量
図－16　照葉樹花粉とマツ花粉の比
図－17　時代別Q/P値
図－18　蛍光X線スペクトル
図－19　蛍光X線スペクトル
図－20　製塩土器
図－21　古代～中世の鋳・鍛造遺跡（大阪府）

表目次

表－1　花粉分析試料（第3次調査）
表－2　花粉分析結果（樹木）
表－3　花粉分析結果（草本）
表－4　木材樹種鑑定
表－5　梶原南遺跡花粉分析試料
表－6　梶原南遺跡花粉分析結果（樹木）
表－7　梶原南遺跡花粉分析結果（草本）
表－8　建物群の構成
表－9　高槻市の古代掘立柱建物規模
表－10　古代～中世の鋳・鍛造遺跡（大阪府）

図 版 目 次

口　絵 1　梶原南遺跡遠景
口　絵 2　木　簡
PLATE 1　梶原南遺跡周辺（空中写真）
PLATE 2　調査区全景（空中写真）
PLATE 3　A～Dトレンチ全景（空中写真）
PLATE 4　E～Gトレンチ全景（空中写真）
PLATE 5　Hトレンチ全景（空中写真）
PLATE 6　a. Aトレンチ全景（南側から）／b. Bトレンチ全景（東側から）
PLATE 7　a. Cトレンチ全景（東側から）／b. Dトレンチ全景（東側から）
PLATE 8　a. Eトレンチ全景（東側から）／b. Fトレンチ全景（東側から）
PLATE 9　Gトレンチ全景（東側から）
PLATE10　a. Hトレンチ全景（東側から）／b. Hトレンチ全景（西側から）
PLATE11　a. Hトレンチ東半部（北側から）／b. Hトレンチ西半部（北側から）
PLATE12　a. 住居跡1（北側から）／b. 住居跡1（南側から）
PLATE13　a. 土壙1（南側から）／b. 土壙2（西側から）
PLATE14　a. 建物1～3、柵1（東側から）／b. 建物1～3、柵1・2（南西側から）
PLATE15　a. 建物1～3（北側から）／b. 建物3・柵1（南側から）
PLATE16　a. 建物4～6（南西側から）／b. 建物5（北側から）
PLATE17　a. 建物6・溝5（北西側から）／b. 建物6・溝5（南側から）
PLATE18　a. 建物7・16（南側から）／b. 建物16（東側から）
PLATE19　a. 建物8（北側から）／b. 建物8（東側から）
PLATE20　a. 建物8・9・17（東側から）／b. 建物9（北側から）
PLATE21　a. 建物10～13・18・井戸3（西側から）／b. 建物10（東側から）
PLATE22　a. 建物13（南側から）／b. 建物13（東側から）
PLATE23　a. 建物12（東側から）／b. 建物17（北側から）
PLATE24　a. 井戸1 遺物検出状況（東側から）／b. 井戸1 遺物除去後（同）
PLATE25　a. 井戸2（北側から）／b. 井戸2（西側から）
PLATE26　a. 井戸3（北側から）／b. 井戸3（北側から）
PLATE27　a. 井戸4（東側から）／b. 井戸5（東側から）
PLATE28　a. 焼土壙1（南側から）／b. 焼土壙3（西側から）
PLATE29　a. 土壙墓1（西側から）／b. 方形土壙（南側から）
PLATE30　a. 溝1～3（西側から）／b. 溝4・堰跡（北側から）
PLATE31　a. 溝5（Fトレンチ北側から）／b. 溝5（Hトレンチ北側から）
PLATE32　弥生・古墳時代の遺物

PLATE33　井戸1出土の遺物
PLATE34　井戸3、土壙墓1、土壙3出土の遺物
PLATE35　土壙3出土の遺物
PLATE36　溝7、溝17出土の遺物
PLATE37　建物3・18、土壙4、落ち込み9・10、G・Hトレンチ出土の遺物
PLATE38　包含層出土の遺物
PLATE39　方形土壙出土の遺物
PLATE40　方形土壙出土の遺物
PLATE41　方形土壙出土の遺物
PLATE42　a. 住居跡1出土の弥生土器／b. 土壙1、土壙2出土の弥生土器
PLATE43　a. 溝1・3・5出土の遺物／b. 整地層出土の遺物
PLATE44　a. 井戸出土の遺物／b. 井戸3掘形出土の遺物
PLATE45　a. 土壙3出土の土師器／b. 土壙3出土の須恵器
PLATE46　a. 土壙4出土の遺物／b. 溝7出土の遺物
PLATE47　墨書土器
PLATE48　a. 硯／b. 方形土壙出土の遺物
PLATE49　a. 製塩土器［Ⅰ類］／b. 製塩土器［Ⅱ～Ⅳ類］
PLATE50　a. 平瓦凹面／b. 平瓦凸面
PLATE51　木簡
PLATE52　斎串、櫛、紡錘車
PLATE53　曲物（井戸4上段）
PLATE54　曲物（井戸4下段）
PLATE55　石製品・砥石
PLATE56　石鏃・石核・剥片
PLATE57　a. 土製品・金属製品／b. 鋳・鍛造関係遺物
PLATE58　花粉資料1［樹木］
PLATE59　花粉資料2［樹木］
PLATE60　花粉資料3［樹木］
PLATE61　花粉資料4［草本］
PLATE62　木材の樹種1
PLATE63　木材の樹種2
PLATE64　調査区位置図
PLATE65　A～Dトレンチ遺構平面図
PLATE66　E～Gトレンチ遺構平面図
PLATE67　Hトレンチ遺構平面図
PLATE68　井戸3平面図・断面図

PLATE69　井戸1出土土器実測図
PLATE70　井戸3、土壙墓1、土壙4、溝7出土土器実測図
PLATE71　土壙3出土土器実測図
PLATE72　G・Hトレンチ出土土器実測図
PLATE73　G・Hトレンチ出土土器実測図
PLATE74　方形土壙出土土器実測図
PLATE75　方形土壙出土土器実測図
PLATE76　木製品実測図
PLATE77　石製品・石核・礫石実測図

第Ⅰ章　はじめに

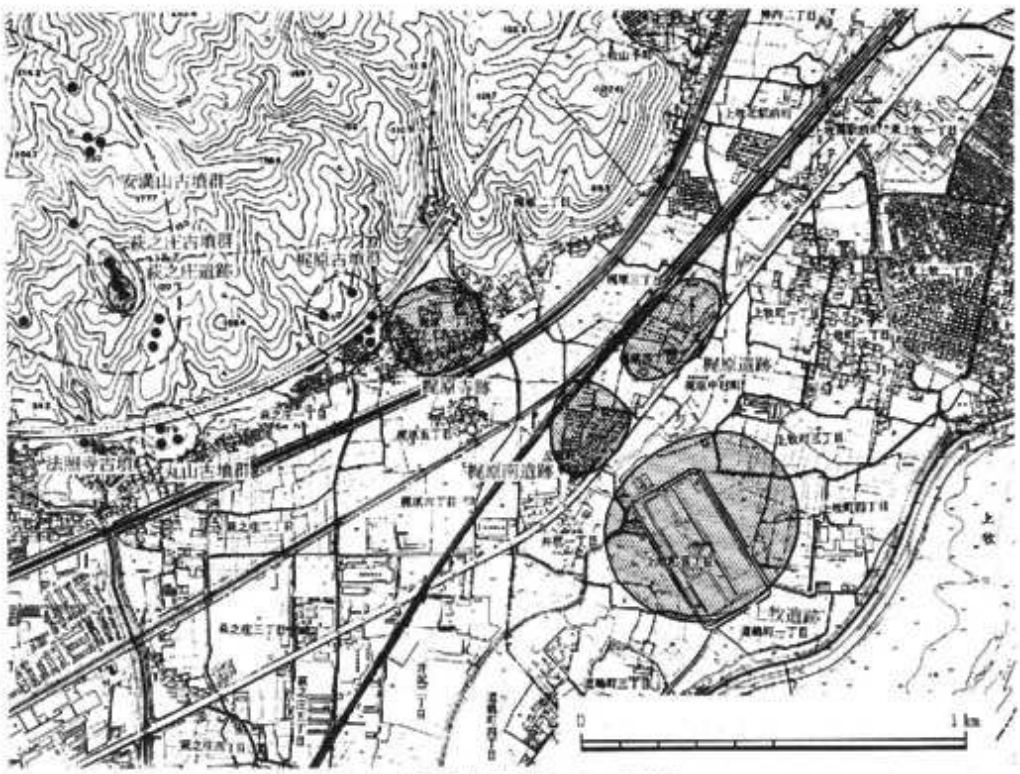
1．位置と環境

桂・宇治・木津の流れを集めた淀川を下ること3㎞、高槻市梶原・上牧の地は大阪平野の北東最奥部にあたる。北は北摂山地、南を淀川にはさまれた狭い平野部には、わずかな扇状地と淀川の氾濫原が広がる。各所に残る伸牛池・牛池・丸池等の小字名や内ケ池・大野池等の中小の池沼は、古の淀川支流を偲ばせている。また、氾濫原に点在する微高地上には、井尻、上牧などの村落が営まれている。

周辺に散在する遺跡では、萩之庄遺跡①、梶原寺跡②、上牧遺跡③以外に発掘調査が実施されておらず、遺跡の調査・研究は進んでいない。

梶原・上牧地区では、縄文時代の遺跡は確認されていない。しかし遅くとも弥生時代中期には人々が生活していたようで、上牧遺跡で住居跡や土器、石器などを検出している④。

古墳時代には上牧遺跡や梶原寺下層遺跡⑤で布留期を中心とした遺構・遺物が検出されている。梶原遺跡においても須恵器等の出土が知られるものの、その実体については明らかでない。安満山の尾根上には前期古墳、萩之庄1・2号墳が築造される。檜尾川東部地域にある前方後



図－1　梶原南遺跡とその周辺

円墳はこれ以外に無く、槍尾川流域の首長が葬られたといえよう。後期になると山麓部に梶原古墳群などの小規模な群集墳が形成されるが、後世の削平等で消滅したものも多い。

律令期の梶原・上牧は摂津国嶋上郡にあたる。条里制が施行され、本市においても先学によってその復原がなされている[2]が、梶原南遺跡周辺は上条里と嶋上北部条里が交錯する位置にあり、現段階で条里遺構は明らかでない。

「続日本紀」和銅四（711）年正月丁未条によれば、摂津国嶋上郡に大原駅を置いたとされる。その位置や規模は未だ明らかでないが、現在の島本町桜井付近に想定されている。当遺跡も山陽道沿いの集落として栄えたであろう。北西約300mには梶原寺が建立されるが、その伽藍配置や成立背景は明らかでない。正倉院文書によると、天平勝宝九（757）年に東大寺大仏殿回廊の屋瓦を四天王寺と梶原寺に発注している。また、天平勝宝八（756）年頃には水無瀬に東大寺が荘園を設けていることからも、梶原周辺地域と東大寺との関わりを指摘できよう。

平安時代になると水上交通がさかんになり、淀川の重要性が増してくる。土佐日記や平家物語には鵜殿や鳥飼牧など淀川沿いの地名が登場する。また、楠葉牧・鳥飼牧などの公私の牧が設けられ、梶原周辺にも上牧や川原牧などの地名が残っている。しかし古代から中世へ移行する時期の集落は検出されておらず、今後の調査に期するところが大きい。

律令制崩壊後、内ケ池と淀川にはさまれた微高地上には上牧遺跡が展開する。発掘調査の結果、その出現は11世紀後半であり、遺跡が発展・拡大する12世紀頃には周辺地域の農地開発が進行していったと考えられる。

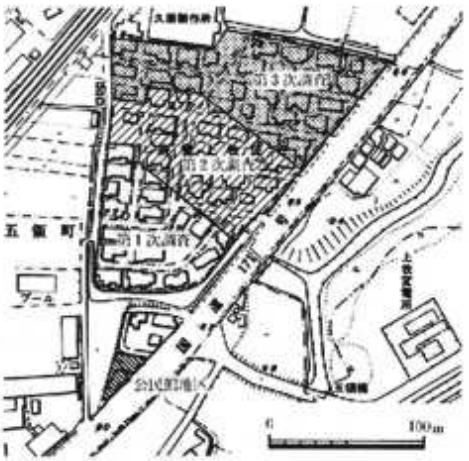
梶原・上牧周辺は平野が狭小で水害を受ける危険性が高いという地理的悪条件にもかかわらず、早くから開け、交通の要所として発展してきた。そして交通路が整備される律令期以降、都へあるいは西国への出入口として多くの人々や物資が往来したであろう。なお、現在も山麓から河畔までわずか1kmのあいだに名神高速道路、JR 東海道線、阪急京都線、東海道新幹線、国道171号線などの主要幹線が集中する立地条件にある。

2．調査経過

府営上牧住宅の老朽化に伴い、新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。調査は3次にわたり、南側から順次実施した。

第1次調査（A～Dトレンチ）　府営住宅新築工事の第1期工事分の住宅3棟と浄化槽1ケ所の調査である。調査期間は昭和59年1月9日～3月9日、調査面積は約1500㎡を測る。検出した遺構は、弥生時代後期～古墳及び中世に属す溝6条と落ち込み1ケ所である。

第2次調査（E～Gトレンチ）　府営住宅新築工事の第2期工事分である。調査期間は昭和60年8月5日～9月25日、調査面積は約1600㎡を測る。住宅4棟の調査であるが、遺構検出状況から北側2棟分を連結して実施した。検出した遺構は8世紀の掘立柱建物6棟などで、奈良

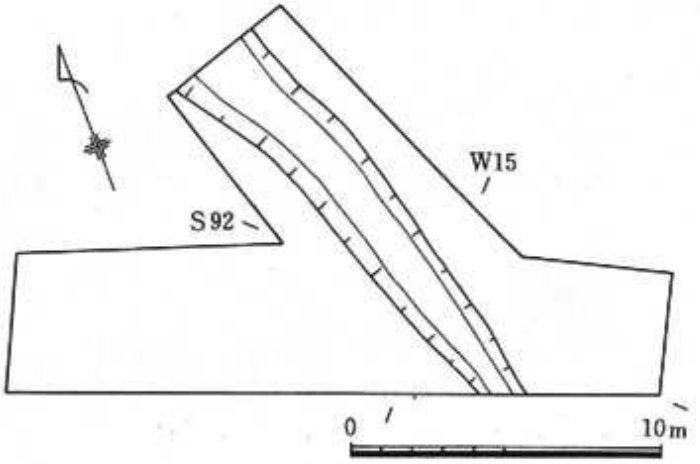


図－2　調査位置図

時代の集落の一端が明らかとなった。遺物も羽口、鉄滓など鍛造に関係するものの出土をみた。また、第1次調査で検出した弥生時代後期の溝が北へ続くことも確認した。

第3次調査（H・Iトレンチ）　府営住宅新築工事第3期分の事前調査として住宅棟3ケ所及び集会所部分について実施した。過去2回の調査によって、今回の調査地は奈良時代集落の中心部と推定されたため、住宅3棟分を一括して行った。期間は昭和62年4月20日～8月8日、調査面積は約3000㎡を測る。調査の結果、弥生時代中期の土壙や後期の竪穴式住居を検出し、前回検出した弥生時代後期の溝はさらに北へ続くことが明らかになった。また、掘立柱建物12棟や井戸5基などの遺構や木簡、墨書土器などは当遺跡が8世紀に最も栄えたことを示している。そして中世の土壙や溝は、この時期における農地開発を物語っている。

なお、第3次調査と併行してAトレンチの南西、高槻市五領町21－4において公民館建設に伴う調査を実施した。調査は昭和62年8月2日～8日にわたって行い、調査面積は約22㎡を測る。層序は盛土(1m)、耕土・床土（0.5m)、整地層(0.3m)、暗褐色粘土層(0.2)(0.2m)、黄褐色粘土層〔地山〕である。検出した遺構は南北溝1条のみで、遺物はまったく出土しなかった。溝は幅0.8～1.2m、深さ0.2～0.3mを測り、断面の形状は浅いU字形である。規模・形状やその位置関係からみて、Dトレンチで検出した溝4の下流と考えられる。

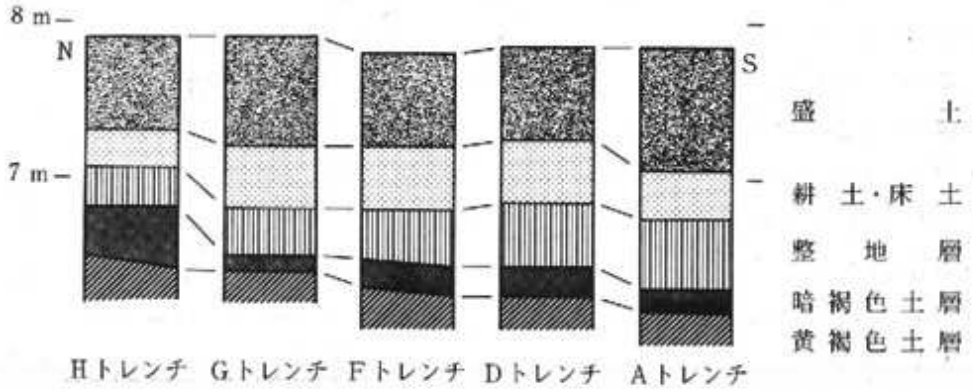


図－3　公民館地区　平面図

第Ⅱ章　遺　　構

1．層　　序

調査区は宅地であったので、0.3～0.4mの耕土上に0.6～0.8mの盛土がなされている。耕土以下は黄灰色土層〔整地層〕0.3～0.45m、暗褐色土層〔遺物包含層〕0.1～0.4m、黄褐色粘質土層〔地山〕となる。耕土下に床土は認められない。整地層は標高の低い南側に厚く、耕土面を水平に保っている。近世頃に大規模な整地をしたらしく、17世紀後半～18世紀初頭の軒平瓦などが出土している。暗褐色土層〔遺物包含層〕は、中世以降の整地によって上面が削平されている。包含層出土遺物の量は建物等の遺構密度に対応しており、Fトレンチ以南ではほとんど認めることはできない。地山となる黄褐色粘土層は、北から南へゆるやかに下降している。Iトレンチ以西は浅い谷地形となって、黄褐色粘土層の上に暗灰色粘土が堆積している。この黄褐色粘土層の厚さは1～1.5mで、以下は暗灰色砂層、灰色粘土層となる。暗灰色砂層は湧水層で、井戸の多くはこの層まで掘削されている。

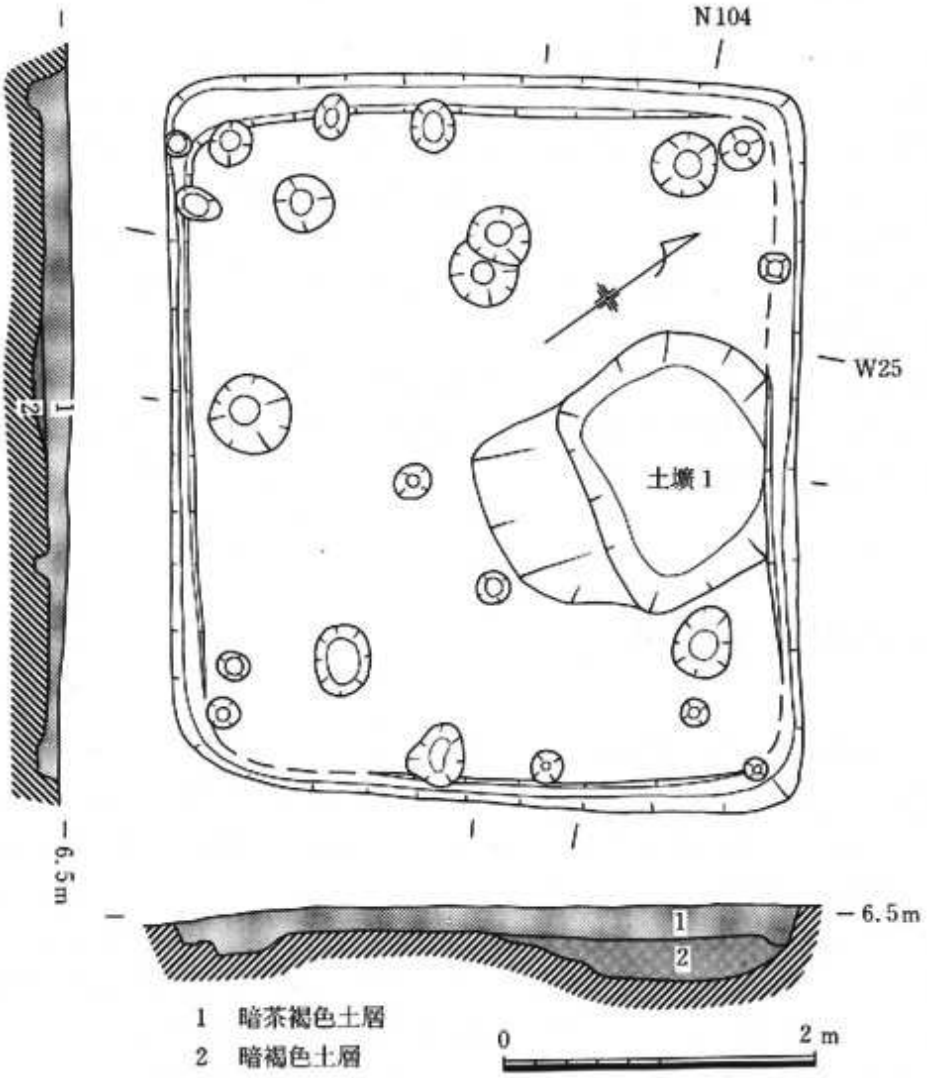


図－4　土層断面（柱状図）

2．弥生・古墳時代の遺構

a．竪穴式住居（PLATE 12）

住居跡1　Hトレンチ北東隅で検出した方形の住居跡である。東西4.6m、南北4.1m、深さ0.2mを測る。周壁溝は幅0.1～0.2m、深さは床面より0.1mを測る。主柱穴は直径0.4m前後、深さ0.1～0.2mを測り、東側の柱穴がやや浅い。柱穴間の距離は東西3m、南北2.5mである。土壙1を切って築かれ、炉や貼り床などの施設は認められなかった。埋土は暗褐色土で、弥生時代後期の土器が出土した。



図－5　住居跡1、土壙1　平面図・断面図

b. 土壙（PLATE 13）

土壙1　Hトレンチ北東隅で検出したが、上面は住居跡1によって削平されている。平面形は1.6m×2mを測る方形で、南壁は2段に掘り下げている。深さは0.5mを測り、底面付近より弥生時代中期の土器が出土した。

土壙2　Hトレンチ中央で検出した方形の土壙である。1.2m×1.3m、深さ0.15mを測る。弥生時代中期前半の土器が出土した。

c. 溝（PLATE 30）

溝1　B・Cトレンチ西端で検出した。幅1.5m、深さ0.7mを測る南北溝で、地形からみて南流している。断面はゆるやかなU字形を呈している。埋土は暗灰色土層と黒灰色土層が互層となって計4層認められる。溝底より後期の弥生土器が出土した。

溝2　B・Cトレンチ西側で検出した南北溝である。幅3.5m～4.3m、深さ0.9mを測る。断面はU字形で、Cトレンチでは2段掘りのような形状をなしている。埋土は5層認められ、溝底から中位にかけて弥生時代中期から5世紀末頃の弥生土器・須恵器が出土した。

溝3　B・Cトレンチ中央・Eトレンチ西側で検出した。幅1.9～2.2m、深さ0.6～1.2mの南北溝で、下流の方が深い。また、断面の形状も深さに対応し、浅いU字形～深いU字形・V字形へと変化している。埋土は暗灰色砂質土と黒灰色粘土の互層、遺物は弥生時代後期の土器片が少量出土したのみである。

溝5　Dトレンチ東側、F～Hトレンチ中央を貫流する南北溝である。幅1.3～1.6m、深さ0.6～0.9mを測る。断面は溝3同様U字形～V字形へと変流するにしたがって変化していく。埋土は暗灰色～黒灰色の粘土層が3～5層認められ、少量の弥生時代後期の土器が出土した。

3．奈良時代の遺構

a．掘立柱建物（PLATE 14～23）

建物1　Gトレンチ西側で検出した。一部調査区外にあるが、2間（4.2m）×推定2間の総柱建物であろう。柱列の軸はN－25°－Eを示す。柱掘形は1辺0.5mの方形で深さは0.3mを測る。建物2と重複する。

建物2　Gトレンチ西側、建物1と重複して検出したが、南側は調査区外にある。桁行2間以上×梁行2間（4.2m）の規模であるが、他の建物の規模から判断して3間×2間であると推定できる。柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。柱掘形の平面形は方形を呈し、1辺0.5m前後、深さ0.3～0.4mを測る。明確な切りあいは認められないが、建物1に先行する。柱穴埋土から土師器・須恵器とともに羽口・鉄滓が出土した。

建物3　建物1・2の東側で検出した。桁行3間（5.7m）×梁行2間（3.6m）の規模である。柱間は桁行1.9m、梁行1.8mを測る。柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。柱掘形は1辺0.5m前後の方形を呈し、深さ0.3～0.4mを測る。柱根が遺存するものも認められる。柱穴埋土より羽口・鉄滓が出土した。

建物4　Gトレンチ中央、建物3の東で検出した。2間（柱間2m）×2間以上(柱間1.8m）の総柱建物である。南側は調査区外にあるが、他の総柱建物の例から、南北柱列は2間であろう。また、建物5との位置関係から、南北柱列を桁とみるのが妥当である。柱列軸の方向はN－28°－Eを示す。柱掘形の平面形は1辺0.4～0.9mの方形であるが、建物1～3と比較してややいびつな形を示している。深さは0.15～0.3mを測る。中央の柱掘形は他の柱掘形より小さく浅い。同位置・同規模で建替えが行われている。

建物5　Gトレンチ中央、建物4の東に位置している。桁行3間（4.6m）×梁行1間（3.4m）の規模である。桁行の柱間は1.3～1.7mとばらつきがあり、平均柱間は1.6mを測る。

梁行は3.4mと2間相当の長さであるが、東西両妻柱の柱穴は認められなかったため、最初から1間であったと思われる。柱列軸の方向はN－28°－Eを示し、建物4と等しく、南側の柱通りも一致させている。柱掘形は0.3～0.5mの方形ないし円形であり、建物4と同じ傾向を示している。深さは0.1～0.2mを測る。

建物6　Gトレンチ東側で検出した。規模は桁行3間（5.4m）×梁行2間（3.5m）、柱間は桁行・梁行ともに1.7mを測る。柱列軸の方向はN－28°－Eである。柱掘形は1辺0.5～0.7mの方形を呈し、深さは0.2～0.3mを測る。柱穴の1つには礎板が遺存していた。

建物7　Hトレンチ西端で検出した。桁行3間（5.1m）×梁行1間（3.2m）の建物である。西側柱列の一部は調査区外にある。建物5と同じく、両妻柱の柱穴は検出しなかった。柱列軸の方向はN－21°－Eを示す。柱掘形の平面形は1辺0.7～0.8mの方形で、深さ0.3～0.6mを測る。コウヤマキ製の礎板や根石の遺存する柱穴も認められる。建物16と重複しているが、柱穴の切りあいから建物7が先行する。なお、建物6の南側で検出した3個の柱穴は、建物7の柱穴と規模や軸方向が等しいので同規模の建物が存在するのかもしれない。

建物8　Hトレンチ南側で検出した。桁行4間（8m）×梁行2間（4.6m）、柱間は桁行2m、梁行2.3mを測る。柱列軸の方向はN－28°－Eである。柱掘形は1辺0.6～0.8mの方形を呈し、深さは0.4～0.5mを測る。四隅の柱掘形は他と比べてひとまわり大きい。柱穴底には柱材の沈みこんだ跡が明瞭で、柱の直径は0.2m前後である。

建物9　Hトレンチ東南隅で検出した。南側が調査区外にあったので、建物規模を確認するために、トレンチを南へ拡張した。桁行4間（10.5m）×梁行2間（4.6m）の南北棟で柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。柱掘形は1辺1mの方形を呈し、深さは0.3mを測り、直径0.2m前後の柱根跡が認められた。南側の妻柱は検出できなかった。柱穴埋土よりとりべ片が出土した。

建物10　Hトレンチ西側で検出した総柱建物である。2間（3.3m）×2間（3.3m）で一部は調査区外にある。柱掘形は1辺0.5～0.7mの方形を呈し、深さは0.3m前後を測る。柱列軸の方向はN－28°－Eを示す。

建物11　Hトレンチ西側で検出した建物である。桁行3間（6.6m）×梁行2間（3.2m）の規模をもつ東西棟である。柱列軸の方向はN－25°－Eを示し、建物13の柱通りに一致させている。柱掘形は0.6～0.8mの方形であるが、東西の妻柱の掘形は0.4mと小さい。深さはいずれも0.3m前後である。

建物12　建物11の北に位置する。2間（3.2m）×2間（2.4m）の総柱建物である。平面形から南北が桁と考えられる。柱掘形は方形で1辺0.3～0.4m、深さ0.2mを測る。柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。

建物13　建物11・12の主屋と考えられ、桁行4間（9.8m）×梁行2間（4.6m）の南北棟である。柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。柱掘形は1辺1mの方形を呈し、礎板が遺存するものもある。深さは0.2～0.6mとばらつきがあり、南側の掘形が深い傾向を示している。南柱列には柱抜きとり時の再掘削が認められる。

建物14　Hトレンチ北側で検出した南北棟である。桁行3間（5.1m）×梁行2間（3.6m）の規模であるが、後世の削平が著しく南妻柱は検出できなかった。柱掘形は方形で、建物の四隅は1辺0.7m、その他はやや小さく0.5mを測る。深さは比較的遺存状態の良好な北妻柱で約0.3mを測るものの、他は0.05m程度である。柱列軸の方向はN－25°－Eを示す。

建物15　Hトレンチ東端で検出したが、大部分は調査区外に位置している。検出した4個の柱掘形は方形で1辺0.6m、深さ0.3mを測る。柱列軸の方向はN－37°－Eを示し、他の建物より東へ振っている。規模は明確ではないが、他の建物の妻がすべて2間以下であって3間の建物は存在しないことや、平均的な建物規模が3間×2間であることから建物15は3間×2間の南北棟であると推定できる。

建物16　Hトレンチ西端で建物7と重複して検出した。桁行3間（4.2m）×梁行2間（3m）の規模を有し、柱列軸の方向はN－28°－Eを示す。柱掘形は1辺0.5mの方形ないし隅丸方形を呈し、深さは0.1～0.3mを測る。建物7の柱穴を切っている。

建物17　Hトレンチ東側で検出した。2間（3.9m）×2間（3.5m）の総柱建物である。柱掘形は1辺0.4～0.6mの方形・隅丸方形で、深さは0.2mを測る。柱列軸の方向はN－37°－Eを示す。

建物18　建物13と重複して検出した。桁行4間（9.8m）×梁行2間（5m）、柱列軸の方向はN－28°－Eを示す。柱掘形は1辺0.5～0.8m、深さ0.3m前後を測る。柱の痕跡を認めるものもあり、柱材は直径0.2m前後と考えられる。柱穴の切り合い関係からみて建物13の建て替えであろう。

b. 柵（PLATE 14・15b）

柵1　建物3の北側1.5mに位置する3間の柵である。柱間は2m、柱掘形は0.4mの方形及び円形を呈し、深さは0.3mを測る。径0.2mの柱根が遺存していた。建物3に平行である。

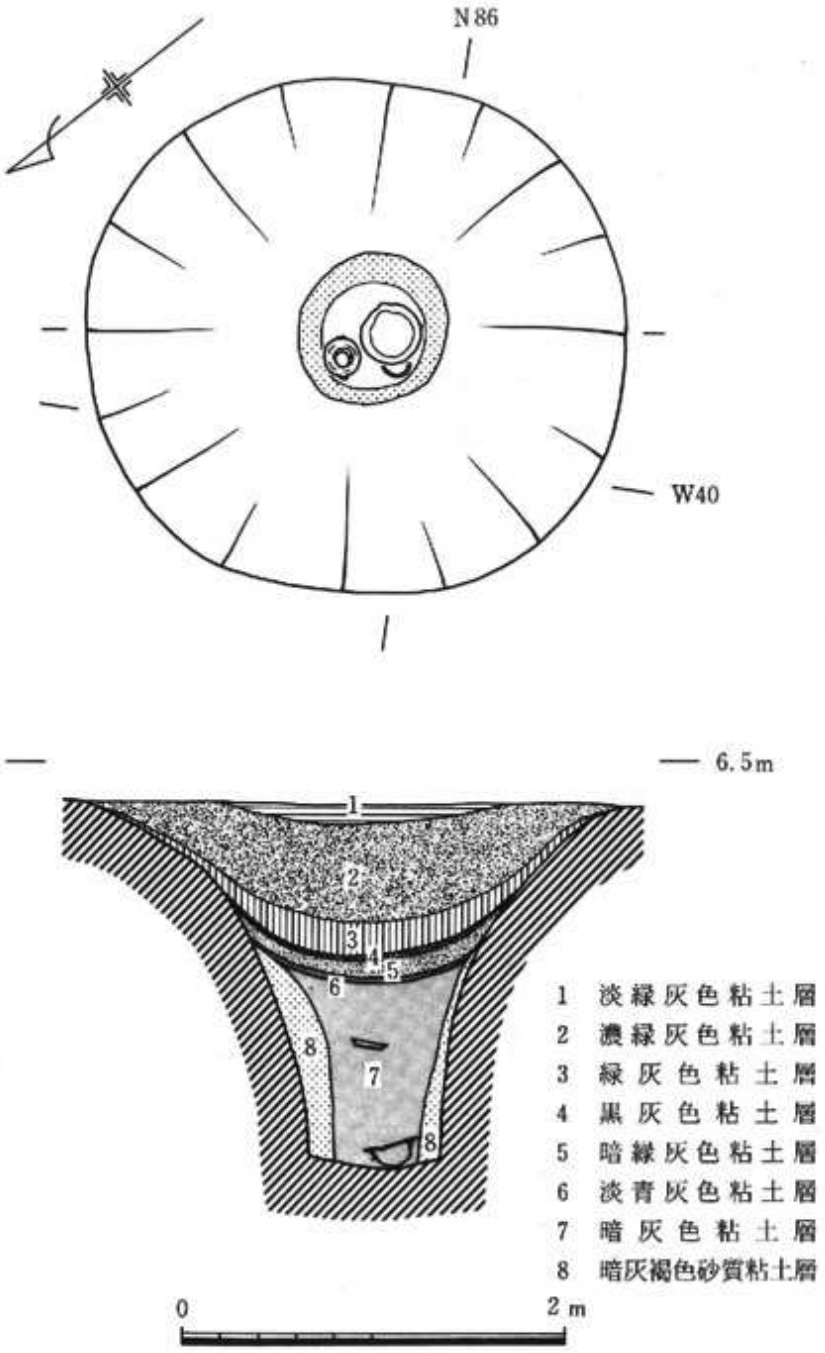
柵2　建物3・4間に位置する。柱間2.75mを測る2間の柵であり、これを補助しているような2個の柱穴も認められる。方向はN－25°－Eと建物3に平行する。

柵3　建物5・6間に位置する。規模は3間以上で柱間は2.2mを測る。掘形は円形を呈し、直径0.4m、深さ0.2～0.3mを測る。柱列軸の方向はN－27°－Eであって、建物5・6の軸にほぼ平行である。

柵4　建物13・18の東側で検出した。規模は8間、柱間は南側5間分が1.8m、北側3間の平均が約2mとやや不規則である。柱掘形は径0.2～0.4mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。方向はN－30°－Eと建物13・18よりも東に振っている。土壙墓1を切っている。

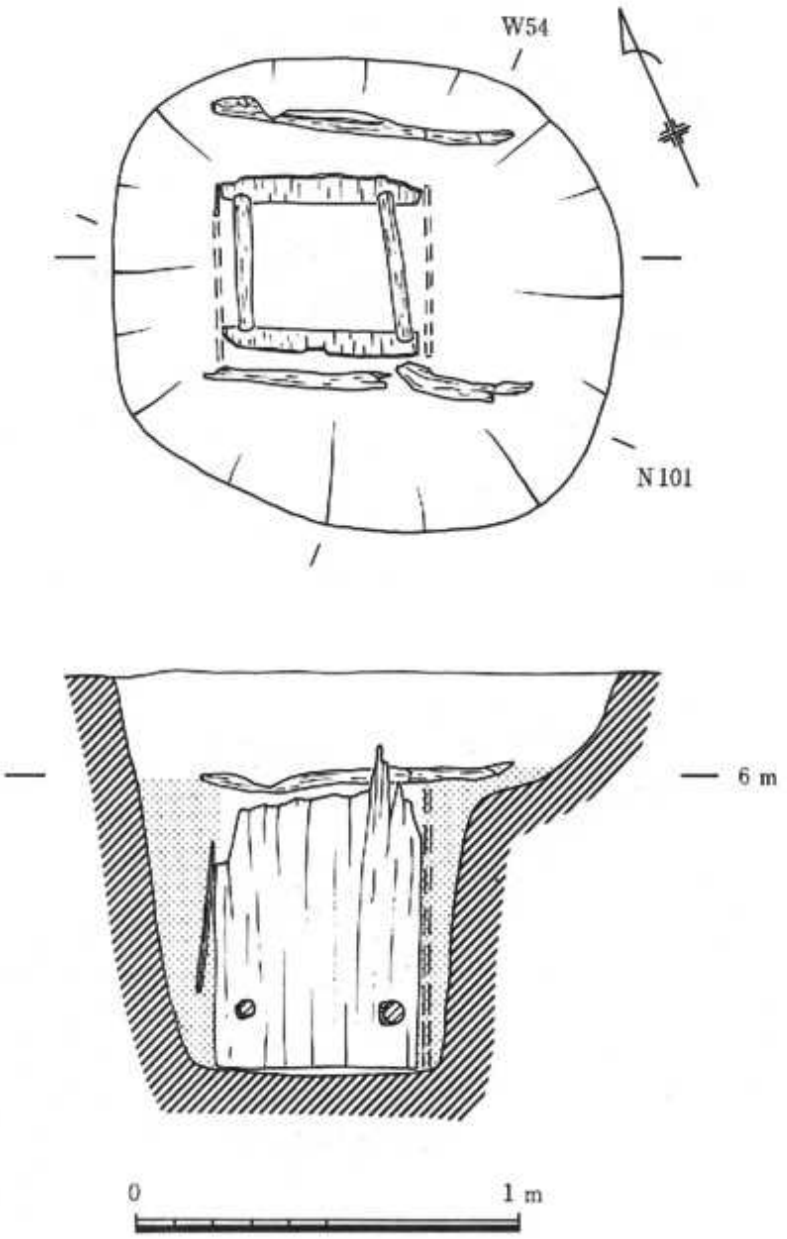
c. 井戸（PLATE 24～27）

井戸1　Hトレンチ東側で検出した。掘形は円形を呈し、上面の直径2.8m、底部の径0.7m、深さは1.9mを測る。井戸枠等は遺存していなかったが、埋土の状況から掘形底面のほぼ中央に径0.4m程度の集水槽（曲物）の存在が推定できる。



図－6　井戸1　平面図・断面図

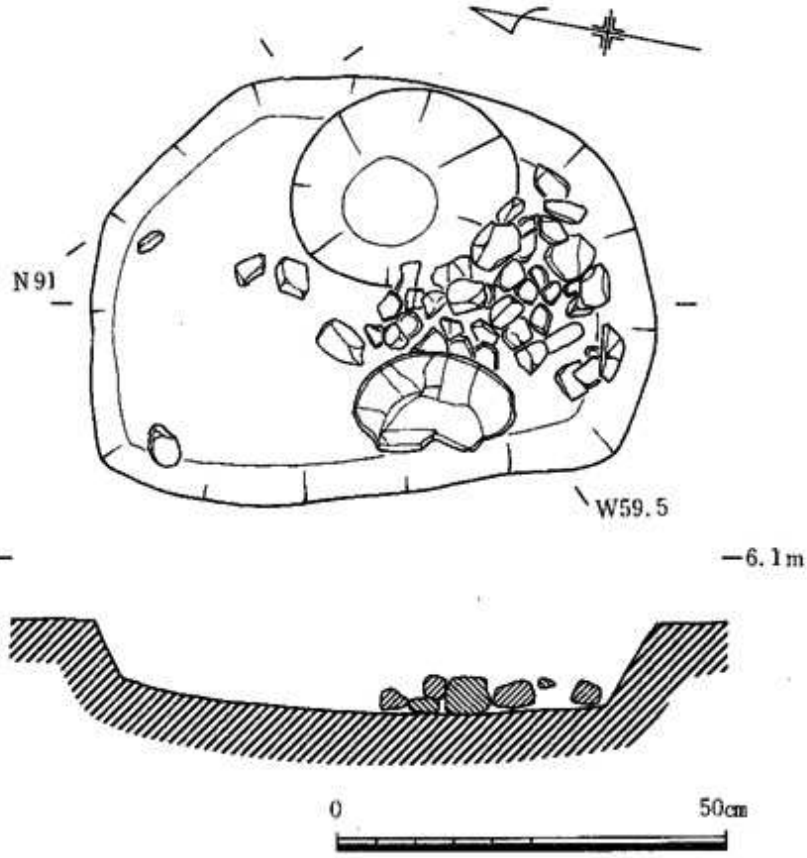
遺物は井戸底に完形の土師器（杯・壺・鍋）が、その上方にも杯・甕・鍋などの土師器が投棄された状態で出土した。また、杭などの木製品やヒョウタン・モモの種も出土した。ヒョウタンの実は底付近で集中して出土した。表皮がついているものも多い。モモの種は埋土中位の淡青灰色粘土層より数十点出土している。これらの遺物出土状況や埋土の状態から、井戸廃棄時の埋めもどしは掘形中位の暗灰色粘土層以下であり、それ以後はゴミ穴などに使用され、自



図－7　井戸2　平面図・断面図

然埋没したと考えられる。

井戸2　建物14の北側で検出した。掘形の平面形は1辺1.3mの方形を呈し、深さは1mを測る。底は1辺0.7mを測る。井戸枠は隅柱を使用せず、側板を2本の横桟木で1方向のみ固定する簡単な構造である。枠は上下2段分認められ、下段は縦板組である。上段は側板が遺存しなかったが、下段と同構造であろう。下段の枠は西・南・北の側板が遺存し、東を欠いている。横桟木は丸太材、側板は厚さ3cmの板材を用いている。上段は横桟木のみ検出した。下段の横桟木に対し直交する位置関係にある。下段の内法0.35m、上段は0.6mを測る。井戸1・



図－8　土壙墓1　平面図・断面図

3が湧水層である暗灰色砂層まで掘り下げているのに対し、井戸2は砂層に達していない。埋土中から8世紀中頃に属す土器片が少量検出され、底部より「新屋首乙賣」と記された木簡が出土した。なお、北側板の材質はモミである。

井戸3　建物11の西に位置する。掘形は方形を呈し、1辺3.2m、深さ2mを測る。井戸枠は横板組みであり、隅柱・横桟木を用いて固定している。内法は1辺0.9mを測るが、隅柱の位置がずれているために平面形は平行四辺形となっている。隅柱には1辺10～15cmの角材を使用し、横桟木を取りつけるための枘穴を2方向、上下2ケ所にあけている。残存長140cm。側板は幅30～40cm、厚さ3cmを測り、東西の側板が南北の側板をはさんでいる。また、西側板の外側には、人頭大の石がまとまって出土した。砥石として使用したものも認められる。井戸底面の南東隅に曲物を掘え、集水槽とする。曲物は上下2段で、上段は直径41.5cm、下段は直径35.2cmを測り、集水槽全体の深さは52cmを測る。この上下の合せ目に上段の曲物の底板を割ったものが差し込まれた状態にあった。

遺物はさほど多くないが、埋土より8世紀中頃～後半にかけての土器及び墨書土器や斎串・櫛などが、掘形埋土より土師器・須恵器・製塩土器・木製紡錘車などとともに銅製の鉸具片が出土した。

井戸４　建物13の東に位置する。円形・素掘りで、直径１ｍ、深さ1.1ｍを測る。８世紀中頃の土師器が少量出土した他に、羽口片と思われるものが出土している。

井戸５　建物18の東方に位置する素掘りの井戸である。掘形は円形で直径１ｍ、深さ1.7ｍを測る。８世紀代の土師器片がわずかに出土したのみである。

d. 土壙墓（PLATE 29a）

土壙墓１　建物11の東側で検出した。平面形は長辺0.7ｍ、短辺0.5ｍの方形を呈する。上面は削平されており、検出面からの深さは約0.1ｍを測る。土壙底面には径５㎝程度の小石を敷き詰め、その上面に８世紀中頃の土師器杯を副葬している。土壙掘形の一部は柵４の柱穴に切られている。

e. 土壙（PLATE 28）

土壙３　建物11の東で検出した方形の土壙である。１辺５ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測り、南側はさらに0.2～0.3ｍ深く掘られている。埋土中には炭や焼土を含んでいる。遺物は土師器・須恵器等の土器類でいずれも８世紀中頃に属する。他にめのうの原石が出土している。

土壙４　土壙３の南で検出したややいびつな方形を呈する土壙である。長辺4.5ｍ、短辺２～3.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。８世紀中頃～後半の土器が出土した。

土壙５　建物８の東側で検出した。２ｍ×４ｍ、深さ0.1ｍを測り、溝５を切っている。埋土は灰褐色土で炭・焼土を含んでいる。８世紀中頃～後半の土器とともに鉄滓が出土した。

焼土壙１　Ｅトレンチで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺0.7ｍ、短辺0.4ｍを測る。上面は削平されているが、残りの良い部分で深さ0.08ｍを測る。壁面は黄褐色粘土〔地山〕が火熱を受けて約２～３㎝の幅で赤褐色に変色し、底には炭が約３㎝の厚さで堆積していた。遺物は出土しなかった。

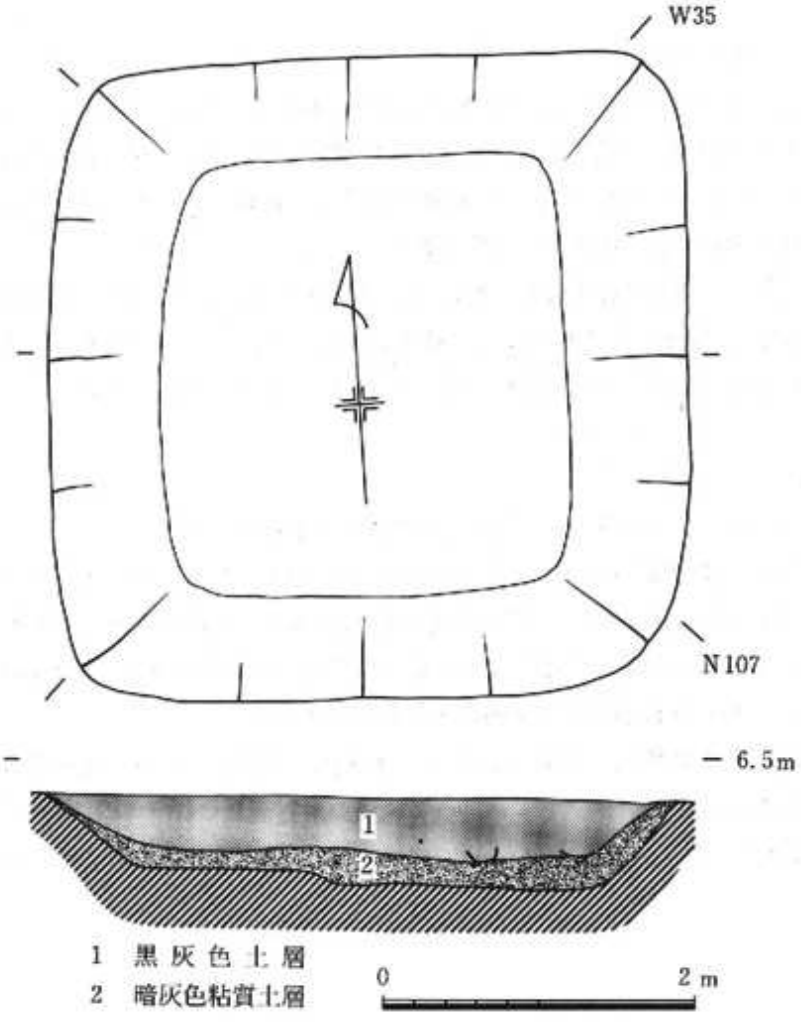
焼土壙２　建物３の東側で検出した方形の土壙である。長辺1.5ｍ、短辺１ｍを測り、深さは約0.2ｍである。埋土内には炭や焼土が混入し、平瓦が３点出土した。

焼土壙３　Ｈトレンチ北側で検出した。2.1ｍ×１ｍの方形で、深さ0.4ｍを測り、壙底には１辺0.2ｍ、厚さ0.05ｍの板状の石が置かれている。土壙底面・板状の石ともにわずかに焼けが認められる。ワラもしくはカヤの類を燃やした形跡が認められた。埋土は茶褐色土で炭・焼土を含んでいる。

焼土壙４　建物11の北で検出した。１辺0.7ｍ・深さ0.2ｍを測る方形の土壙である。埋土中には焼土が多量に含まれるが壁面や底面など地山は熱を受けていない。焼土もブロック状であり、投棄されたものである。

f. 溝

溝７　Ｈトレンチ東側をゆるやかに弯曲しながら南北に貫流する。幅0.5～１ｍ、深さ約0.2ｍを測るが、北側は削平されている。埋土は暗灰褐色粘土である。８世紀中頃の土器が出土した。



図－9　方形土壙　平面図・断面図

4．平安時代以降の遺構

a. 土壙（PLATE 29b）

方形土壙　Hトレンチ北端に位置する。検出当初、遺構の大半は調査区外にあったが、完形の土器が数点出土し、遺構の全容を把握する必要から北側に拡張した。平面形は4.1m×4.6mの方形を呈し、深さ0.6mを測る。壙底は平坦である。

遺物は比較的豊富で、12世紀初頭の瓦器・土師器・須恵器・中国製磁器などのほかに、石鍋・砥石・金属片や木炭・焼土塊が出土した。その他、弥生時代中期の石鏃や石斧が出土している。

b. 溝（PLATE 30b）

溝4　Dトレンチ西側で検出した南北溝である。幅1.5～2m、深さ0.3～0.4mを測る。埋土は黒褐色粘土、断面の形状は浅いU字～逆台形を呈している。中央付近に直径約0.05m、長さ0.6mの杭が2本打ちこまれていた。堰跡であろう。遺物はまったく認められなかったが、溝の形状や埋土の状況から中世頃の遺構と考えられる。

溝6　Aトレンチ東側で検出した。幅1.1mを測る南北溝である。断面は浅いU字形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土で、遺物は出土しなかった。位置的には溝5の下流にあるが、両者は規模・形状・埋土の状態が異なり、同一の溝とは認められない。

c. 小　溝

F～Hの各トレンチでは東西及び南北方向の溝を多数検出した。

比較的幅が広い溝はF～Hトレンチで検出した。溝8～15などがこれにあたり、幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.2mを測る。各溝の間隔は3～3.5mが平均的である。比較的残りの良い溝8～12でみると東西溝（溝9～12）は南北溝（溝8）以東に掘削され、長さ約20m、溝間3.3～3.9mを測る。他の東西溝も20～30mが平均的な長さである。

比較的幅の狭い溝は溝11などG・Hトレンチ西部で検出した。すべて東西溝で、幅0.1～0.2m、深さ0.05mを測る。溝間も2m前後と狭い。両者ともそれぞれの規模・形状が類似し、一定の間隔で掘削されていることから、これら小溝群は鋤溝等の農業に関連した耕作痕と考えられる。

第Ⅲ章　遺　　物

弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦器、中国製磁器などの土器類や瓦、木製品、石製品、金属製品や鋳・鍛造関係遺物など多種におよぶ遺物が出土した。しかし、調査面積に比べてその出土量は少ない。以下、それぞれの出土遺物について述べる。

1．土器・土製品

A～Iトレンチの遺構・包含層から出土した。土器類の出土位置は遺構の分布に対応する。弥生土器はHトレンチ北東部、古墳時代の土器はC・Dトレンチ以南、奈良時代の土器はGトレンチ以北を中心に出土した。

a. 弥生・古墳時代

弥生土器（PLATE 32・42）

住居跡1、土壙1・2、溝1・3・5などの遺構や包含層から出土している。

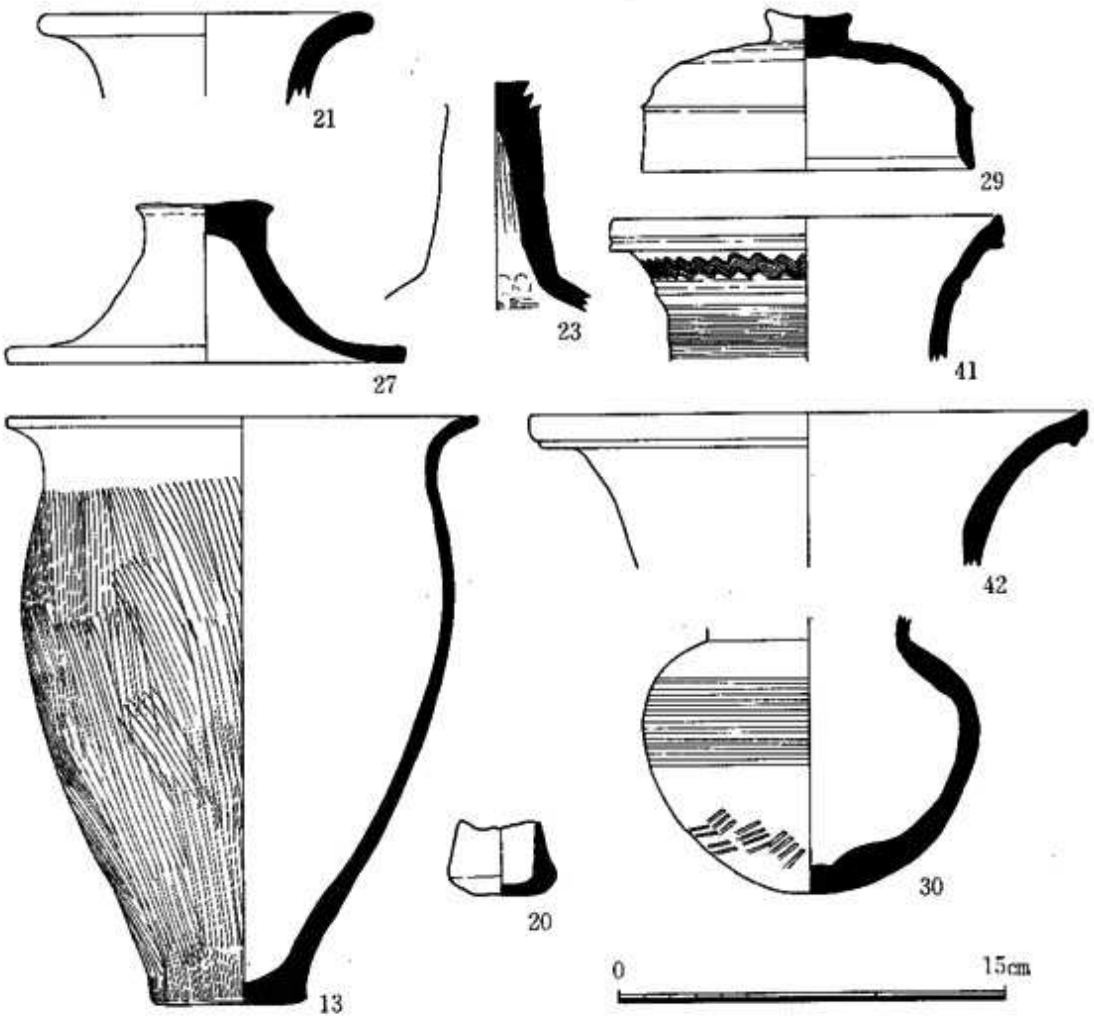
住居跡1　柱穴及び埋土より出土したが、すべて破片で完形に復原できるものはない。畿内第Ⅴ様式の壺（1・2）、鉢（3）、高杯（4・5）、器台（6）、甕（7～10）がある。器台（6）は口縁端部を下方へ拡張し、2条の凹線を施した後に円形浮文で飾る。口縁部内面にも3条の凹線を施している。（8～10）は近江地域の影響を受けた甕である。（9）は口縁端部外面にヘラで列点文を施している。(10) は肩部に櫛描列点文を施し、その上下に直線文を配している。これらは一般的にみられる近江系甕のように体部をハケ調整せず、タタキ整形後に直接施文している点が特徴的といえる。

土壙1　壺（11・12）、甕（13～17）などがある。甕（13）は土壙底面から押しつぶされた状態で出土した。畿内第Ⅱ様式に属し口径18.2cm、器高23cmを測る。全体に風化が著しい。体部外面はタテハケ、口縁部はハケ調整後ヨコナデ成形を行う。内面はナデ調整。底部はわずかに凹む。色調は暗褐色を呈している。

土壙2　畿内第Ⅱ様式の壺・甕が出土しているものの完形に復原できるものはない。壺（18）は複帯構成の櫛描直線文で飾っている。

溝1　溝底より甕・手づくね土器が出土した。手づくね土器（20）は口がわずかにすぼんだ形で、口径3cm、器高2.9cmを測る。色調は底部外面が黒色を呈する他は灰褐色である。

溝3　畿内第Ⅴ様式の土器が出土したが、いずれも風化が著しい。(21)は壺の口縁部である。胎土中には砂粒が多く含まれ、口縁端部は丸い。胎土・形状から畿内第Ⅰ様式に属するものと考えられる。



図－10　弥生・古墳時代の土器　土壙1(13)、溝1(20)、溝2(29・30)、溝3(21)、溝5(23)、柱穴(27)、整地層(41・42)

溝5　畿内第Ⅴ様式の高杯（22・23）、甕（24～26）などが出土したが、風化が著しく観察に堪えない。

その他の遺構・包含層　住居跡1の周辺を中心としたHトレンチ北東部より出土した。壺・甕などすべて畿内第Ⅱ様式に属す。（27）は甕の底である。直径15.6cm、器高6.3cmを測り、淡灰褐色を呈している。胎土は砂粒を多く含む。風化が進んでいるが、ハケ調整後ナデ調整を行う。

土師器・須恵器（PLATE 32・43）

溝2　底部～中央部にかけて5世紀後半～末頃の土器が出土した。土師器（28）は直口壺の胴部である。口縁部を欠くが、淡茶褐色の胴部に円孔を穿っている。嶋上郡衙跡45－J・K・N・O地区㊀で類似品が出土している。須恵器（29）は高杯の蓋で、口径12.8cm、器高6.3cmを測る。つまみは中央が凹んだ形状を呈し、基部の直径は3cmである。天井部のヘラケズリは中位まで及び、稜は比較的鋭い。口縁端部は段をもち、内傾する。色調は暗灰色～黒灰色を呈す。

(30) は壺胴部。外面下半部はタタキ成形後ナデ調整、上半部はカキ目調整を施す。肩部及び底部内面には自然釉がかかる。また、底部外面には乾燥時に付着したのかワラの痕跡が看取できる。色調は暗灰色～黒灰色を呈す。

整地層　Cトレンチ以南の整地層から5世紀末頃の須恵器の細片が出土している。器種は蓋杯 (31～35)、高杯 (36)、甕 (37・38)、器台 (39)、壺 (40・41)、甕 (42) など多種に及ぶ。これらは整地の際に運ばれてきた客土中のものである。

b. 奈良時代

井戸1 (PLATE 33・44a・69)

井戸下層の遺物 (43～51) と廃絶後の堆積土 (上層) の遺物 (52・53) がある。下層の土器は8世紀前半～中頃に属す。完形品が多く、須恵器は1点も含まれていない。

土師器　杯A (43～45)、杯C (46・47)、壺A (48)、甕A (49)、甕B (50)、鍋B (51) がある。

杯A (43) は口径14.6cm、器高3.5cmを測る。外面は底部をヘラケズリ、口縁部をヘラミガキのb手法で調整する。内面はヨコナデ後、螺旋文＋斜放射文1段と連弧文を施す。底部外面には焼成後に刻まれた十文字の線刻が認められる。(44) は口径17.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部はゆるやかに内弯後上半部が外反し端部は丸く肥厚する。b手法で調整し、口縁部のヘラミガキは粗い。暗文は内側から螺旋文、斜放射文1段、連弧文があり、すべて右方向に施文されている。底部外面には焼成後の線刻が認められる。格子状の線刻で経緯4本×3本以上 (推定4本) である。

杯C (46) は口縁端部が内傾する。口径13.4cm、器高3.2cmを測る。底部外面はかるくナデ調整するが、粗面がめだつ。口縁端部は強いヨコナデを施す。内面はなでているが、ヘラ状工具で整形した時の圧痕が各所に残る。

壺A (48) は口径11.2cm、器高10.5cmを測る。やや肩のはった胴部に把手がつくいわゆる蒸壺である。把手は双方とも先端を欠いている。高台は直径9.5cmで低くゆるやかに外反する。体部は内面を丁寧になで、外面は全面にわたってヘラミガキが施される。蓋は出土しなかった。

甕A (49) は口径26.8cmを測る長胴型の甕で、口縁はゆるやかに外反、端部は内側に丸く肥厚し、外側に面をもつ。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は調整を施している。また、外面には煤が厚く付着する。

甕B (50) は球形の体部に把手がつく。口径29cm、器高27.5cmを測る。体部外面は縦方向にハケ調整しているが、上半部と下半部ではハケ原体が異なる。内面は上半部を横方向にハケ調整、口縁部はハケ調整後ヨコナデを施す。器壁は凹凸が目立つ。色調は暗黄灰色である。

鍋B (51) は口径32cm、器高17.2cmを測る。半球形の体部両側には把手を有し、わずかに内傾する肩部からゆるやかに外反する口縁部がつく。外面は縦方向のハケ調整後ナデ調整、内面はタタキ成形後ナデ調整している。また、口縁部をひねりだして注口とし、把手はヘラで押圧して胴部に接着後、周囲を縦方向のヘラナデでととのえている。

井戸2（PLATE 44a）

土師器・須恵器・製塩土器が出土したが、その大半が細片である。

土師器　杯A、皿A、甕などの器種を認めることができる。8世紀中頃に属すが多くは観察に堪えない。

皿A（54）は復原口径24.8cm、器高2.4cmを測る。b手法で調整し、口縁端部はわずかに肥厚する。暗文は螺旋文＋斜放射文1段である。淡赤褐色を呈している。

井戸3（PLATE 34・44・47・70）

土師器　杯、椀、皿、高杯、甕、鍋、竈などがあり、量的には杯・皿等の供膳具が多い。

杯A（55～57）にはすでに暗文は施されていない。（55）は口径14.8cm、器高3.2cmを測る。口縁端部はわずかに外反し丸くおわる。底部外面には指圧痕が明瞭に残っている。（56）は口径16.8cm、器高3.2cmを測り、b手法で調整している。（57）は口径13.4cm、器高3.7cmを測る。底部から口縁部にかけてなだらかに移行する。そして口縁端部はわずかに外反し、内側に肥厚している。b手法で調整する底部外面には「㊫」と記した墨書が看取できる。

竈（58～60）庇部の破片で内外面ともハケ調整であるが、各面のハケ原体は異なる。色調は暗黄褐色を呈している。掘形出土。

須恵器　杯A・B、杯B蓋、瓶子、鉢などが出土したものの土師器に比して少ない。

杯A（61）は口径13.6cm、器高3.3cmを測る。口縁部は外反し直線的にたちあがる。底部内面と口縁は回転ナデ調整、底部外面は粗くナデており、中央のやや外寄りには「當」と書かれた墨書が看取できる。そして、墨書後に刻まれた線刻が認められる。これは4本の直線をほぼ平行に並べたものである。色調は灰白色である。（62）は口径13.5cm、器高3.9cmを測る。内・外面共にナデ調整を施すが、底部外面のナデは粗雑で、粘土紐の痕跡が認められる。底部外面には硯として使用した痕跡が認められる。（63）は口径17.2cm、器高5.5cmを測る大型の杯である。他の杯と同じく内面及び口縁部は回転ナデ調整であるが、底部外面はかるく回転ヘラケズリを施している。

杯B（64）は口径13.2cm、器高4cmを測る。高台は0.6cmと高く、安定感がある。内面と口縁部は回転ナデ、底部外面は高台接着後にナデ調整を施す。

瓶子（65）は細長い胴部に短い口頸部がつく。口径3.3cm、肩部径7.2cmを測る。ロクロ整形で、色調は暗灰色である。

土壙墓1（PLATE 34・70）

土師器　杯A（73）は墓壙底で出土した8世紀中頃の土器である。口径18.5cm、器高5.4cmを測る。風化が進んでいるが、暗文は斜放射文のみ看取できた。非常に雑に施されているので部分的に2段あるようにみえるが、本来1段の構成と考えられる。色調は明褐色である。

土壙3（PLATE 34・35・45・71）

土師器　杯、椀、皿、高杯、甕、鍋が出土したが、遺存状態は良くない。また、甕・鍋などの煮沸具の占める割合が高い。

杯A（74～78）暗文は螺旋文＋斜放射文1段で構成するが、斜放射文の間隔が若干粗くなる。

(74) は口径18cm、器高3.1cmを測る。粗い斜放射暗文が1段認められるが、底部の螺旋暗文は看取できない。色調は淡黄褐色である。(75) は口径20cm、器高4cmを測る。色調は淡黄褐色である。

杯Bは杯Aに高台を付した形態である。すべて細片で図示できるものはない。暗文は斜放射文1段のみ看取できた。また、杯B蓋 (79・80) も出土している。

椀A (81) は底部からゆるやかに内弯する口縁部がつく。口縁端部は内傾し、丸くおわる。色調は淡茶褐色である。

高杯A (82) は裾の広がった短い脚部に、横に張り出した杯部がつく。口縁部は欠くが浅い形態であろう。内面には螺旋暗文が認められる。

甕A (83～87) は小型と大型とがある。(83) は小型の甕で球形の胴部にゆるやかに外反する口縁部がつく。口径14cm、器高11.5cmを測る。最大腹径は中位よりやや上にあり、上半は縦方向、下半は横方向のハケ調整を施す。(84～87) は長い胴部をもつ大型の甕である。(84) は口径30cm、復原高約34cmを測る。胴部は外面を縦方向、内面は横方向にハケ調整を施すが、両者の原体は異なる。(85) はやや平底ぎみの底部をもち、口径26cm、器高33.5cmを測る。口縁部の外反度がやや強く、端部は上向きの面をもつ。(86) は口径25cm、器高31cmを測る。胴部外面は縦方向のハケ調整、内面は下半部ナデ調整、上半部は横方向のハケ調整を施している。

須恵器　杯・蓋・椀・甕などがある。

杯A (301～303) は斜め上方にまっすぐのびる口縁部に回転ナデを施し、底部外面はヘラ切り後未調整である。口径14cm前後、器高4cmを測るものが多い。

杯B (88) はゆるやかに口縁部が外反し、扁平ぎみの高台がつく。

蓋 (89～91) の天井部は平坦でゆるやかなカーブを描き裾部に至る。(90) は裾付近でわずかに屈曲する。

椀B (92・93) は 外方へ長く直線的にのびる口縁部をもつ。杯Bに比べ高台は高い。(92) は口径13.8cm、器高6.3cmを測る。高台は下外方へ張り出し、高さは0.6cmである。色調は暗灰色である。

甕B (94・95) は頸部から直立して端部が内傾する口縁部をもつ。これらは同一個体と考えられ、焼き歪みが著しい。(95) は焼成時に杯蓋と溶着している。

上壙4 (PLATE 37・46a・70)

土師器　杯A (96)、杯B (97)、杯C (98)、皿A (99・100)、甕 (101)、鍋 (102) などがあるものの大半は小片である。杯・皿類の暗文は省略傾向が認められる。所属年代は8世紀中頃～後半にかけてであろう。

皿A (99) は口径14cm、器高2.3cmを測る。風化が著しいものの底部内面には螺旋暗文が認められる。しかし口縁部の斜放射暗文は省略されている。色調は淡赤褐色である。(100) は口径23.5cm、器高2.8cmを測り、b手法で調整している。暗文は省略されている。色調は淡赤褐色である。

須恵器　杯A・B、杯B蓋、甕などが出土したが、いずれも細片で少ない。

土壙5（PLATE 48）

土師器　杯A・C、椀A、甕などの器種が認められる。杯類で暗文を施すものは皆無に等しく、土壙4と同じ8世紀中頃～後半の時期に属す。

須恵器　杯A・B、杯B蓋、壺、甕がある。

杯B蓋は低くゆるやかにカーブする天井部から端部にいたるものと、端部が鉤曲する2種が混在する。（103・104）の内面には墨痕が認められ、硯として使用されている。

溝7（PLATE 36・46b・70）

土師器　杯A・B・C、皿A、甕などが出土した。

杯A（105）は口縁部に2段の斜放射暗文が施されている。普通にみられるものとは逆向きで、左上がりの斜放射文である。色調は赤褐色を呈す。（106）も（105）と同じ左上がりの斜放射暗文が2段施されている。口縁端部の剝離面に油煙が付着していることから、灯火器として再使用している。

杯B（107）は口径22cm、器高6.3cmを測り、高台は比較的高い。暗文は内側より螺旋文、斜放射文2段であり、上段の斜放射暗文は下段と比べやや粗い。井戸1上層出土の破片と接合する。色調は赤褐色である。

杯C（298）は内面に斜放射暗文を施す。口縁部のヨコナデはやや強い。

皿A（108）は口径22.5cm、器高2.6cmを測る。a手法で調整され、底部外面に木葉痕が残る。内面調整後、螺旋文と斜放射暗文を施す。斜放射文は密である。

須恵器　杯A・B、杯B蓋、盤、盤蓋などが出土した。

杯A（109～111）底部が平坦で口縁部が外方へ直線的にのびるもの（109）と丸みをもった底部からゆるやかに口縁部へ移行するもの（110・111）がある。

杯B（112）は口径12.6cm、器高4cmを測る。高台は外方へ開く形態である。（113）は口径14.5cm、器高4.5cm。高台は外方へ開く形態で、色調は淡灰色である。

壺は全容を知れるものはない。（115・116）は長頸壺の底部と肩部片である。（117）は壺Aの蓋である。平坦な天井部にゆるやかに外方へ開く口縁部がつき、端部は面をもっている。つまみは扁平でその外側に断面方形の突帯がまわる。淡い緑色の釉がかかり、丁寧に仕上げられた秀品である。これとセットになる壺は出土しなかった。この形態のものは鳴上郡衙跡55－A・B・E・F地区溝2出土遺物の他に例をみない。

その他の遺構・包含層（PLATE 36～38・57・70・72・73）

8世紀前半～後半頃に属す土師器・須恵器が出土し、8世紀中頃のものが最も多い。器種的には土師器〔杯（118～128・285・286）、鉢（129・287）、皿（130・131）、高杯（132）、壺（133）、甕（134）、鍋（288）〕や須恵器〔杯（135～138・143・144・290～294）、杯蓋（139～142）、皿（145・295）、鉢、壺（297）、平瓶（296）、甕〕などの一般的にみられるものである。以下特徴的なものを述べる。

土師器　杯A（119）はGトレンチ北端、柵1北方の柱穴より出土した。完形品で口径14cm、器高3.5cmを測る。暗文は認められない。鎮墓具に用いられたのであろう。

皿B（131）は口径26.5cm、器高3.1cmを測る。口縁部は内弯後ゆるやかに外反し端部が肥厚する。風化が著しいが、内面に斜放射暗文が1段看取できる。包含層出土。

壺B（133）は口径7.2cm、器高5cmを測る小型品である。器壁は約0.8cmとその大きさに比べて厚い。口縁部のヨコナデは強く、頸部内面には稜線を有する。

甕A（134）はGトレンチ東側の柱穴底で出土した。球形の体部に外反する口縁部がつき、口径23.6cm、器高約23cmを測る。

土製品　土錘（150）は全長3.8cm、最大径1cm、孔径0.3cmを測る有孔土錘である。色調は淡灰褐色を呈し、黒斑が認められる。胎土中にはクサリ礫を含んでいる。包含層出土。（151）は土錘状の土製品である。現存長2.1cm、直径0.8cmを測るが、孔径が0.2cmと細くやや雑なつくりである。色調は茶褐色である。

c. 平安時代以降

方形土壙（PLATE 39～41・48a・74・75）

瓦器、土師器、中国製磁器など12世紀初頭に属す遺物が出土した。

瓦器　瓦質土器、椀、皿、土釜がある。

椀（152～158）はすべて楠葉型で口径15cm、器高6cm前後が平均的な大きさである。体部は内弯ぎみにゆるやかにのび、器壁は0.4～0.5cmを測る。高台の断面形は四角形から三角形へと退化していく傾向にある。口縁端部はヨコナデ、内面には1条の沈線が巡る。外面の暗文はやや簡略化されており、特に下半部は疎となっている。これに対し内面は密で丁寧に施される。（152）は口径15.2cm、器高5.9cmを測る。高台の形態や暗文の施文法はやや古い特徴を示している。（155）は口径14.8cm、器高5.6cmを測る。底部内面にはハケメが認められ、施文前にハケ調整をおこなったことを示している。（156）は口径15.2cm、器高6cm。外面には焼成後に刻まれた十文字の線刻が認められる。

皿（159・160）は2点出土している。双方とも口径約9cm、器高2cmを測る。内面には椀と同様な暗文が施されているが、外面には認められない。

土釜（161）は小型の三足付土釜で底部及び脚を欠く。口径約10cm、現存高4.5cmを測る。半球形の体部に内傾し丸くおわる口縁部がつく。鍔は幅約0.5cmを測りほぼ水平にのびている。体部内面は椀と同様に丁寧な暗文を施している。外面には鍔以下に煤が付着しているものの、暗文が明瞭に看取できる。施文法からみて、椀と同時期の12世紀初頭をその所属年代とすることができる。（162）は大型の三足付土釜の脚片である。上方から下方へヘラケズリを施して面取りをする。

土師器　皿、台付皿が出土した。

皿Ⅰ（163～176）は口径14～15cm、器高2.5～3.6cmを測る。底部と口縁部の境は不明瞭で、口縁部はゆるやかに内弯し端部は丸くおさめる。手づくねで整形後、口縁端部にはヨコナデを施し、内面はナデ調整、外面はかるくなでるものが多い。時代が下るにつれて器高が低くなる編年観からすれば、器高3cmを境としてそれ以上のもの（163～172）と3cm未満（173～176）

とに分類可能である。(169～171) は内面をハケで調整し、外面はほとんど未調整である。(169) には左方向の粘土接合痕が認められる。ワラの上に置いて乾燥させたらしく、外面にワラの圧痕が認められる。

梶原南遺跡で出土した皿Ⅰのほとんどは、底部がいびつで外面に指圧痕をとどめており、口縁部のたちあがりは一方がゆるやかで、他方は弱い段をつくる傾向がある。このことは土器の製作技法に起因するものと考えられる。

皿Ⅱ (177～195) は口径9～10cm、器高1.5～2cm前後を測る。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整である。外面は未調整のものも多い。また、内面をハケ調整したもの (179・183) もある。灯火器として使用されたものは (178) のほか計4点ある。

これら皿Ⅱは口縁部の形態から a・b の2種に分類できる。皿Ⅱa (177～186) は口縁部が2段に屈曲し、端部は肥厚する「 て 」字状口縁をもつ。そして屈曲度の強い a_1類 (177～180) と弱い a_2類 (181～186) とに細分でき、前者は古い特徴を備えたものといえよう。色調にも差異が認められ、 a_1類には淡赤褐色のものが多く、 a_2類は灰褐色を呈するものが多い。皿Ⅱb (187～195) はゆるやかに内弯する口縁部を有し、端部はわずかに外反し丸くおさめる。色調は淡赤褐色～灰褐色とさまざまである。

台付皿 (196～198) は皿Ⅰに大きく高い高台を付した形態である。杯部の大きさに比べ高台が大きすぎるためにアンバランスな形にみえる。(198) は口径16.2cm、器高5.4cmを測る完形品である。杯部高3cm、高台部高2.4cmで直径は8cmを測る。高台は外方へ開き内端面で接地する。色調は淡黄褐色である。

中国製磁器　白磁皿 (199～201) が出土した。(199) は底部片である。見込みに黒色物質が付着する。漆であろうか。(201) は口径9.6cm、器高3.4cmを測る完形品である。高台は削り出して成形している。底部外面に「 上 」と墨書している。

その他の遺物　須恵器の甕片が数点出土した以外に焼土 (203・204) がある。量は比較的少ない。色調は青灰色～赤褐色を呈し、スサや土師器片を混和している。カマド等の残骸であろうか。また、木炭 (299・300) も出土している。

2．墨書土器 (PLATE 47)

土師器 (57)、須恵器 (61・152)、白磁 (201) の計4点出土した。すべて杯・皿類でいずれも底部外面に記されている。(57) は土師器杯Aの底部外面に記される。下方を欠くがおそらく1文字であろう。「(冨)」と看取できる。一見「 冨 」のようであるが冠の下の「一」を欠いている。伴出した (61) の墨書から判断して「 常 」の省略形と理解したい。(61) は須恵器杯Aで底部外面に「 當 」と記されている。(57) とは筆跡が異なるようである。井戸3出土。(152) は須恵器杯Aもしくは皿Aの底部外面に記されている。墨痕が薄く判然としないが

「 大 」かもしれない。溝15出土。(201) は白磁皿底部外面に「 上 」と記されている。方形土壙から出土した。

3．硯 (PLATE 48a)

井戸3 (62・146～148)、建物17(149)、土壙5 (103・104) の計7点出土した。すべて須恵器の杯・鉢を転用している。器種は杯蓋 (103・104・146・147・149)、杯身 (62)、鉢 (148) がある。蓋は天井部内面を用いているが、杯は底部外面を使用している。墨をする時に不安定な内面よりも、伏せた時にぐらつかない外面を選んだのであろう。鉢 (148) は内面を使用している。これは鉄鉢型鉢と呼ばれるもので、使用されている部位も体部の最大径を測る位置に近く、完形品では硯として使用しにくいであろう。破損品を再利用して硯にしたのであろうか。

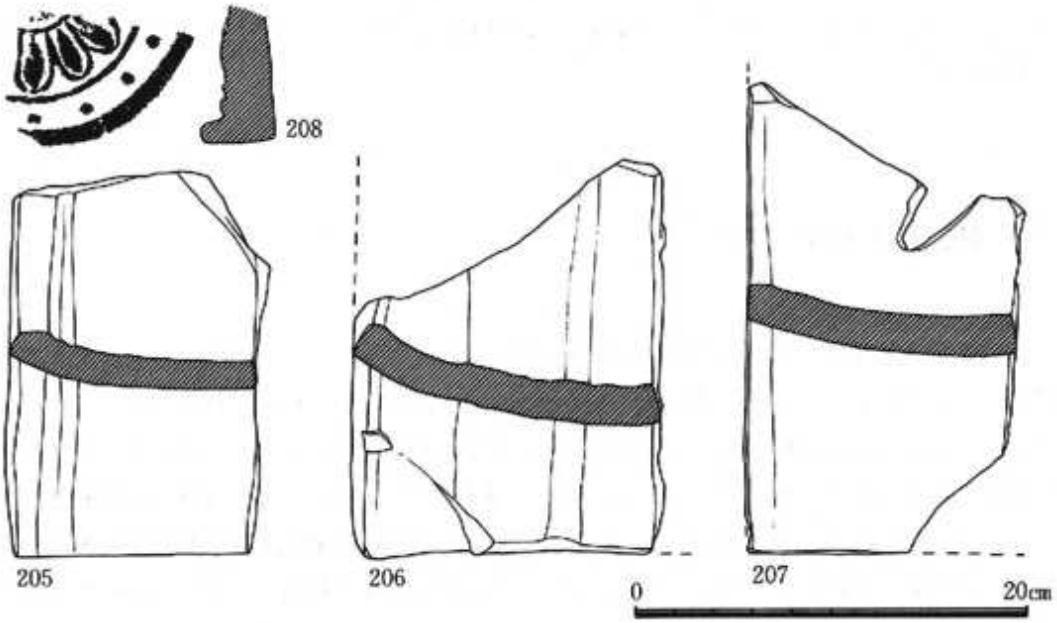
4．製塩土器 (PLATE 49)

G・Hトレンチの遺構・包含層から1200点以上出土した。主としてGトレンチ西部の建物1～3周辺及びHトレンチ井戸3から出土し、この2ケ所で全体の9割以上を占める。他の遺構からは数点ずつしか出土していない。これらはすべて細片であって全体を復原できるものはない。製塩土器は焼成の硬軟、胎土、形状、調整などさまざまである。大きく分ければ、胎土中に砂粒を含み内面をナデ調整するもの、内面に布圧痕の残るもの、内面をハケ調整するもの、胎土中にモミやワラを含むものがある。このうち内面をナデ調整するものが最も多く出土し、他は少ない。

5．瓦 (PLATE 50)

G～Iトレンチより白鳳～奈良期の平瓦や丸瓦が出土しているが、全体的に少ない。平瓦 (205～207) は焼土壙2出土。白鳳期のもので凹面には布目が看取でき、凸面はなでている。色調は淡赤褐色である。(206) は火熱をうけてわずかに変色している。

軒丸瓦 (208) は包含層より出土した。単弁蓮華文で花弁を細線で縁どっている。平安前期頃であろう。



図－11　軒丸瓦・平瓦
焼土壙２(205～207)、包含層(208)

6．木製品（PLATE 51～54・76）

井戸１～３、Ｉトレンチ暗灰色粘土層より出土した。

木簡（244）　井戸２底部より出土した。長さ22cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測るヒノキ製である。上端を圭頭状に、下端を尖らした形態である。側面は削っているが、表裏ともに割り面をほんのわずかに削る程度の調整である。墨書は片面のみに記されている。上半部に５文字、「新屋首乙賣（にいやのおびとおとめ）」という人物名が判読できた。賣は比売など女性を表わす用例があり、この場合「乙賣」という女性名であると推定される。

斎串（245）　井戸３の曲物内より出土した。厚さ約0.1cmを測る薄板の下端を削り、尖らせている。上半は欠いており現存長12.9cm、幅２cmを測る。ヒノキ製。

櫛（246）　井戸３底部より出土した。現存長6.6cm、脊高0.6cm、歯長1.9cm、厚さ0.4cmを測るサカキ製の横櫛である。脊の上面はゆるやかな弧を描き、平滑に仕上げている。

紡錘車（247）　井戸３の掘形から出土した。長径4.5cm、短径４cmの長円形を呈している。厚さは2.9cmと一般的にみられる紡錘車に比べて厚い。中央には径0.6cmの孔を穿っている。材質はスギである。

曲物（248・249）　井戸３の集水槽として使用していた。(248）は円形曲物で直径41.2cm、高さ27.2cm、厚さ0.5cmを測り、集水槽の上段に使用されていた。側板は重ね部分を樹皮で縫い、内面は縦方向と斜め方向にケビキを入れている。タガは上段のみ遺存していた。厚さ0.5cmの板の重ね部は樹皮で縫合し、側板とは径0.2～0.3cmの木釘を用いて接合している。

(249) は下段の集水槽に使用していた。直径35.2cm、高さ26.6cm、厚さ0.5～0.7cmを測るヒノキ製である。側板の重ね部は樹皮で縫っている。内面には縦方向のケビキを平行に入れる。底板は遺存しないが、痕跡が残っている。厚さ1cm前後の板を使用していたようで、側板とは木釘で接合する。タガは上下ともに遺存している。重ね部は樹皮で縫合し、側板とは木釘で接合している。底板（248′・304・305）は井戸3の底から3個体出土した。側面は垂直に断ち落とし、側板とは木釘で接合する。(248′) はスギ、(304・305) はヒノキを使用している。

漆器　1トレンチ暗灰色粘土層より出土した。細片であるが内面を赤漆、外面を黒漆で仕上げている。材質はブナである。全体の形状は不明である。

杭状木製品　井戸1底付近より3点出土した。(250) は直径2.5cm、長さ23.5cmを測る。上端は面取りをし、下端は尖らせている。部分的に樹皮が残っている。材質はサカキである。(251) は直径2.9cm、現存長8.6cmを測る。上端は面取りをしている。下半部を欠くが (250) と同様の形態であろう。材質はカシ類である。(252) は直径2cm、現存長24.9cmを測る。下端は欠失するが、上端は面取りをしている。

7．石製品・砥石（PLATE 55・56・57）

すべてHトレンチの遺構・包含層から出土した。

石斧（250・251）　太型蛤刃石斧（250）は現存長12.5cm、幅6.8cm、厚さ5.3cm、重量530gを測る。最大幅は基部中央に求められるが、刃部は欠いている。断面の形状は長円形である。基端面に打撃痕が認められる。やや粒子の粗い硬質砂岩製で横方向に節理が走り、蛤刃石斧に用いる石材としては珍らしい。柱状片刃石斧（251）は硬質砂岩製である。長さ9.4cm、幅4cm、厚さ3cm、重量190gを測る。幅や厚さから判断して、当初製作時の長さは13cm前後と思われる。基部には幅2.7cm、深さ0.2cmの抉りがあり、断面形はカマボコ形である。基部・刃部ともに一部を欠損する。また刃部の先端には刃こぼれが認められる。研磨痕は明瞭に残るが、側面や基端は研磨の弱い部分があり特に基端部に著しい。刃部には方向の異なる研磨痕があり、再研磨したと考えられる。方形土壙出土。

石鏃（252）　先端部及び一方の逆刺を欠く凹基無茎式石鏃である。現存長3.3cm、幅1.7cm、重量1.7gを測る。側辺はわずかにくぼみ、断面は菱形を呈し厚さは0.4cmである。方形土壙出土のサヌカイト製である。(253) は包含層から出土した。長さ3cm、幅1.9cm、重量2.2gを測る。わずかにくぼんだ側辺に鈍角ぎみの先端部のつく五角形の形状を呈している。断面は菱形で厚さ0.5cmを測る。形態から、縄文時代後・晩期の石鏃であろう。

石核・剥片　Hトレンチで石核（254・255）、剥片（256～259）が出土した。このうち（255～259）の材はサヌカイトである。(254) は、めのうの石核である。重量は8.2g、色調は淡いオレンジ色である。部分的に自然面が残るが他の面は細かく打撃を加えている。土壙3の埋土

中より出土したが、その所属年代を8世紀中頃とするには類例に乏しく、前代の混入品と思われる。

石鍋（260）　底部径約18cmを測る滑石製で、方形土壙より出土した底部片である。外面はノミ状工具で縦方向に整形し、底部は砥石で研磨して平坦にしている。内面もノミ状工具で整形するが、調整痕の形状等から外面で使用した工具とは異なるようである。底部外面には煤が付着し、大きく剝離した面にも煤が認められる。伴出遺物から12世紀初頭頃であろう。

砥石（261～264）　Hトレンチの遺構・包含層より計20点出土した。大きさは親指大～人頭大、石質は細粗さまざまである。自然石をそのまま使用したものが多く、ととのった形状を呈するものは少ない。井戸3の裏込め石に転用されたものが7点あり、これらの多くは熱を受けて変色している。包含層出土の砥石と接合するものもある。伴出遺物から12世紀初頭に属する（261）以外は奈良時代のものである。

8．金属製品（PLATE 57a）

釘（266）　Gトレンチ溝15より出土した鉄釘である。断面は方形を呈し、上端を折りまげて方頭にしている。現存長は7.6cmを測り先端を欠いている。

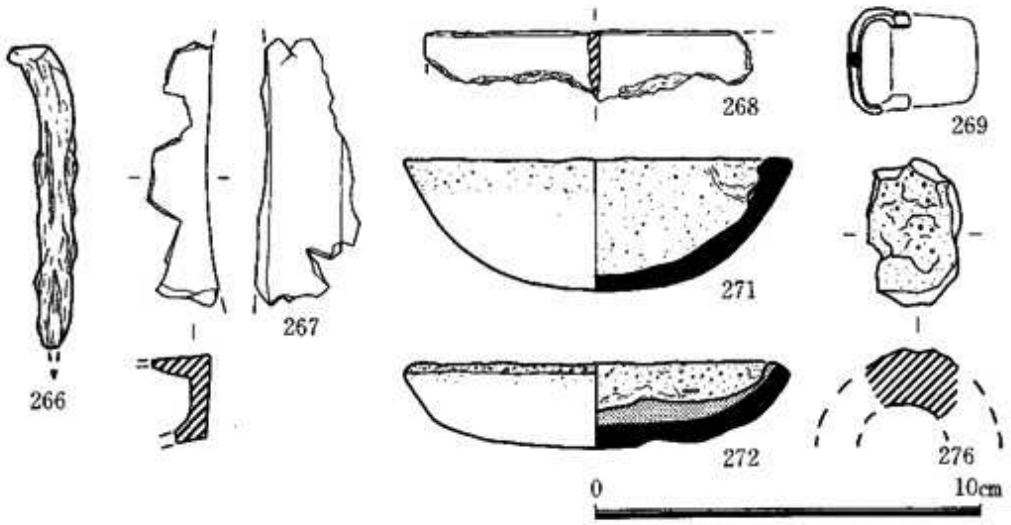
用途不明鉄製品（267）　溝15より出土し、長さ6.8cm、最大幅2.4cmを測る。厚さ0.2cmで断面の形状は「コ」の字形であるが、本来は中空の方形であったかもしれない。（268）は腐食が著しい。現存長8.4cm、最大幅1.7cm、厚さ0.2cmを測る。刀子や庖丁などの茎部分かもしれない。伴出遺物から12世紀初頭頃であろう。方形土壙出土。

鉸具（268）　基部に0.15cmの孔をあけた外枠片である。黒漆の遺存する銅製の鉸具で、衣服令の烏油腰帯に相当する。鉸具の中では最も小型のAⅥタイプである。井戸3の掘形より出土した。

9．鋳・鍛造関係遺物（PLATE 57b）

とりべ、羽口、鉄滓などの鋳造や鍛造にかかわる遺物がわずかながら出土している。出土位置は建物1・3・6・8・9周辺及びIトレンチである。

とりべ（270～272）　Hトレンチ南東側で出土した。（270）は建物9出土の口縁部片である。小片であるが椀状の形態を想定できる。口縁端部及び内面は多孔質となり、わずかに残滓が溶着している。厚さ0.4cmを測る。（271）は砂質の胎土で風化がすすんでいる。（270）と同じく椀形の形態を呈し、口縁端部と内面は硬化して多孔質になっている。残滓の溶着が認められる。



図－12　金属製品、鋳・鍛造関係遺物
釘(266)、用途不明品(267・268)、鉸具(269)、とりべ(271・272)、羽口(276)

建物９出土。(272) は建物９北方の柱穴より出土した。前２者と比較して浅く、皿に近い形態である。内面には残滓が溶着している。土師器小型甕を転用しているかもしれない。

羽口 (273～276)　建物１・３及びその周辺の遺構から出土した。すべて細片で全形を知れるものはない。色調は赤褐色～青灰色、先端に近い部分は青灰色を呈し多孔質となる。比較的大きい (276) から推定すれば、直径５cm、孔径2.6cm前後と考えられる。鍛冶用の羽口であろう。

鉄滓 (278～281)　建物１・３及びその周辺や建物６、土壙５、Ｉトレンチ暗灰色粘土層より出土したがその量は少ない。１点５～180ｇを測り、20ｇ前後でそらまめ大のものが多い。(281) はＩトレンチ暗灰色粘土層出土。拳大で重さ180ｇを測る。(278) は平滑な曲面をもち、とりべから剝離した残滓かもしれない。

その他の遺物　(277)はわずかに曲面をもつ外面がガラス化し多孔質となっている。そしてわずかに鉱滓が溶着している。井戸４出土。(282) は青灰色を呈する窯壁状粘土である。溝15出土。(284) はスサを混じえた焼土である。炉壁かもしれない。

第Ⅳ章　自然科学的分析

1．梶原南遺跡の花粉分析および出土木材の樹種

大阪府立三島高等学校

徳　丸　始　朗

はじめに

昭和62年度梶原南遺跡第３次発掘調査に際し、花粉分析ならびに材質鑑定を実施したので報告する。また、花粉分析については第１次調査から第３次調査までの総合所見をつけ加えることにする。

（Ａ）花粉分析

１．試　料

試料は表－１に掲げる７点で、梶原遺跡調査会により採集されたものである。

試料No.	遺構名	土　　層	時　　期
No. 8	井戸１	濃緑灰色粘土層（上層）	奈　　良
No. 9	〃	暗緑灰色粘土層（中層）	〃
No. 10	〃	暗灰色粘土層（下層）	〃
No. 11	方形土壙	黒灰色粘土層（上層）	中　　世
No. 12	〃	暗灰色粘質土層（下層）	〃
No. 13	住居跡１	暗茶褐色土層	弥生後期
No. 14	土壙１	暗褐色土層	弥生中期前半

表－１　花粉分析試料（第３次調査）

この中で試料 No. 13と No. 14は花粉化石の残留状態が悪く、胞子化石が若干見られたにすぎなかった。

２．分析結果

各試料につき樹木花粉が500個を越えるまで種・属・科ごとに計数し百分率を求めた。

同定不能のものや不確実のものは計数から除外し、主要樹種についてまとめた結果が表－２・３である。

種別	時代	奈良時代			中世	
	試料	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
イチョウ属		1.1	0.1	1.9	0.2	
ナギ			0.4	0.7	0.4	0.2
モミ・トウヒ属		7.8	16.7	4.5	2.9	0.7
ツガ属		3.8	1.7	5.6	2.1	3.5
マツ属		13.6	14.7	11.7	28.9	35.3
コウヤマキ属			0.3			
スギ		0.4	0.1	1.5	0.4	
ヤナギ科		1.4	1.3	2.8	0.4	
ヤマモモ属		2.0	4.2	2.4	3.2	1.4
クルミ属		1.1	1.0	0.7	0.2	
ハンノキ属		0.4	0.4	0.7	0.9	0.2
シラカンバ属		2.2	8.7	0.2	5.4	3.0
クマシデ属		2.0	9.1	2.2	3.8	9.5
ハシバミ属		1.1	1.3	1.9	2.1	2.1
クリ・シイノキ属		9.6	7.1	13.9	8.3	7.1
ブナ属		4.4	2.3	4.8	0.7	1.8
コナラ亜属		19.1	14.9	21.4	23.3	17.1
アカガシ亜属		10.0	7.7	14.1	9.7	10.6
エノキ・ムクノキ属			1.0		0.7	4.2
ニレ・ケヤキ属		4.5	4.6	4.8	2.5	1.2
クスノキ科			0.6	2.4		0.2
バラ科		0.5	0.3	0.4	0.4	0.4
トウダイクサ科				0.4	1.2	
ウルシ科		1.5	0.7	0.2		
モチノキ属		11.8	0.1	0.2	0.4	0.4
カエデ属		1.1	0.4	0.4		0.2
ツツジ属				0.2	0.4	0.2
カキノキ属			0.3		1.1	0.7
アカネ科		0.2			0.2	
スイカズラ科		0.4			0.2	

(%)

表－2　花粉分析結果（樹木）

種別 ＼ 時代・試料	奈良時代			中世	
	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
イネ科（大）	6.3	38.0	28.0	21.1	7.2
イネ科（小）	5.8	3.9	7.7	7.7	6.8
ソバ	3.6			3.5	3.2
ウリ科		0.8			0.4
アブラナ科	4.0	7.7	5.4	0.3	5.6
ハス			0.3	0.7	
タデ科	8.1	0.8	0.9	0.7	2.4
カナムグラ	0.5	7.0	2.3	1.7	4.0
ギシギシ		7.7	3.7	0.7	3.6
ミチヤナギ		0.8			
アカザ科	8.5	3.1	5.4	11.1	28.8
ヤマトグサ			1.4		
ナデシコ科	1.8	7.7	7.1	2.0	5.2
スイレン科			0.3	0.3	0.8
オキナグサ	0.9	1.6	1.4	2.3	3.2
ケシ科					
セリ科	13.0	4.6	6.3	7.7	2.0
リンドウ科					0.4
キク科	1.3	1.6	0.9	2.3	2.0
オナモミ			0.6	0.3	
ヨモギ	46.2	14.7	26.9	36.6	24.4
カヤツリグサ科			1.4	1.0	

（%）

表－3　花粉分析結果（草本）

3．考　察

樹　木

試料8から試料12まで全般についてみるとマツ属とコナラ属（コナラ亜属・アカガシ亜属）が多い。

試料8ではコナラ亜属が19.1%、次いでマツ属の13.6%、モチノキ属の11.8%、アカガシ亜属の10.0%、クリ・シイノキ属9.6%、モミ・トウヒ属7.8%となっている。

試料9ではモミ・トウヒ属の16.7%が最も多く、次いでコナラ亜属の14.9%、マツ属の14.7%で、クマシデ属9.1%、シラカンバ属8.7%、アカガシ亜属7.7%、クリ・シイノキ属7.1%の順になっている。

試料10ではコナラ亜属が21.4%の高率を示し、アカガシ亜属の14.1%、クリ・シイノキ属の13.9%、マツ属の11.7%となる。

試料11ではマツ属が28.9%、コナラ亜属が23.3%と両者で50%以上になっている。続いてアカガシ亜属の9.7%、クリ・シイノキ属の8.3%である。

試料12ではマツ属が35.3%と極めて多く、コナラ亜属17.1%、アカガシ亜属10.6%、クマシデ属9.5%、クリ・シイノキ属7.1%となっている。

以上、試料別に検出量の多いものについて記してみた。次に一般的傾向につき検討を加えてみよう。

試料8から試料10まではコナラ属がマツ属より多い。ところが試料11と試料12では反対にマツ属の方がコナラ属より多く検出されている。年代では前者が奈良時代であり、後者は中世である。したがって時代の移行にともないコナラ属とマツ属の相対比が変わってマツ属が次第に多くなっていくことになる。これは他の遺跡でもみられるような傾向であるが、当遺跡周辺の森林構成についてもコナラ属が主体となっていた植生が次第にマツ属を主体とするものに変わっていく様子を示しているといえよう。

また、奈良時代の試料からはモミ・トウヒ属がかなり検出されている。このことは近くにモミ・トウヒ属が生育していたことを示していると思われる。後述の材質鑑定の項でふれるが、奈良時代の井戸用材にモミが使用されていることと合わせ考えると、当時の生育は否定できないであろう。

試料8では他の試料にくらべてモチノキ属がきわめて多い。その理由ははっきりしないが、すぐ近くにモチノキ属があったと考えるのが無難であろう。試料8から10までは同じ井戸1の試料であり、時間的に10が下層で最も古く、8が上層で最も新しい。もし周辺にある森林の花粉が堆積したとするなら、森林の植生が急変しない限りこのような結果にはならなかったであろう。しかし森林の植生で急にモチノキ属が増えるということは考えられない。したがってモチノキ属のイヌツゲ・ソヨゴ・クロガネモチ・モチノキなどがなんらかの理由ですぐ近くに植えられたと考えるのが妥当ではなかろうか。

他の樹種については普通にみられるものばかりである。

草　本

試料8・12以外の各試料では大型イネ科が多い。大型イネ科はイネと断言できないまでも、イネの花粉と考えられるところから、奈良時代・中世を通じて稲作が行われていたと考えられる。

ソバは試料8・11・12で検出されている。このことから考えると、奈良時代の終りから中世にかけてのソバの栽培が近くの畠でみられたのではあるまいか。

ハスも2試料から検出されている。奈良時代から中世にかけて近くの池にハスが生えていたと思われる。

ウリ科・アブラナ科がみられるが栽培種であるか野生種であるか断言できない。

その他、現在でも田の畦や畠の周辺・路傍に普通にみられる草本が生育していたようである。

（B）材質鑑定

梶原南遺跡第3次発掘調査において出土した木製品・用材・加工木について材質を調べた。

材は木口・柾目・板目の切片をとり顕微鏡で組織を観察し樹種を同定した。中には材の腐食状態で柾目・板目の切片がとれなかったものもある。なお、同定に際しては京都大学木材研究所の島地謙、林昭三両氏の御指導を得たことを附記しておく。

同定した試料ならびに結果は表－4のとおりである。

トレンチ	遺　構	遺　物	樹　種
H	井戸1	杭状木製品（250）	サカキ
		杭状木製品（251）	カシ類
	井戸2	木　簡（244）	ヒノキ
		火つけ木	ヒノキ
		側　板（北）	モミ
	井戸3	斎　串（245）	ヒノキ
		〃　（246）	サカキ
		紡錘車（247）	スギ
		曲　物（249）	ヒノキ
		曲物底板（304）	ヒノキ
		曲物底板（248′）	スギ
		曲物底板（305）	ヒノキ
		井戸枠側板（東上段）	モミ
		井戸枠側板（西中段）	モミ
		井戸枠桟木（東）	同定不能
		井戸枠桟木（北）	同定不能
		井戸枠隅柱（南西）	スギ？ヒノキ？
	建　物7	礎　板	コウヤマキ
I	暗灰色粘土層	漆　器	ブナ

表－4　木材樹種鑑定

同定に際し樹種の決めてとなった特徴を次に記しておく。

サカキ

(木口面) 散孔材で小さな道管が単独もしくは2個複合して全体に均等に分布している。

(柾目面) 個々の道管にはゆるいらせん肥厚がみられる。せん孔は階段状で bar の数が多い。

(板目面) 放射組織は単列のものが多く、高さは数個～30細胞高である。

カシ類

(木口面) 放射孔材である。年輪界は肉眼的に不明瞭。広放射組織がみられる。

(柾目面) 道管はせん孔板の断面から単せん孔であることがわかる。放射組織は平伏細胞からなっている。

(板目面) 道管が単せん孔をもっていることと、広放射組織がみられる。

モ　ミ

(木口面) 早材から晩材へかけての移行はゆるやかで晩材部の幅は狭い。また、樹脂道が見られない。

(柾目面) 分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁をもっている。

(板目面) 放射組織は単列で細胞高は高い。

ヒノキ

(木口面) 早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の幅はせまい。晩材部に樹脂細胞が散在し、その数は少ない。

(柾目面) 分野壁孔はヒノキ型で1分野に大体2個存在する。

(板目面) 放射組織は単列で、10細胞高前後である。

ス　ギ

(木口面) 早材から晩材への移行はやや急で晩材の幅はヒノキより広い。樹脂細胞は晩材部に存在し、ヒノキより多い。

(柾目面) 分野壁孔はスギ型で通常1分野に2個存在する。

(板目面) 放射組織は単列で比較的短かく10細胞高までである。

コウヤマキ

(木口面) 早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅はせまい。

(柾目面) 分野壁孔は窓状であるが、マツ属のそれにくらべて小さい。

(板目面) 放射組織は単列で10細胞高前後である。

ブ　ナ

(木口面) 散孔材で道管はほぼ平等に散在している。

(柾目面) 道管に階段せん孔と単せん孔がみられる。

(板目面) 放射組織は単列・複数列のものと広放射組織があり、広放射組織は紡錘形をしている。

（C）梶原南遺跡花粉分析のまとめ

昭和58・60・62年度の3次にわたって実施された梶原南遺跡の調査をまとめてみることにする。

花粉化石が検出されたのは表－5に示す12試料である。試料はすべて梶原遺跡調査会が採取した。

次	試料No.	遺構	土層	時代
1	No. 1	Cトレンチ溝2下層	暗灰色砂質粘土層	弥生中期～5世紀末
	No. 2	〃 中層下部	暗褐色粘土層	
	No. 3	〃 中層上部	黒色粘土層	
	No. 4	〃 上層	茶褐色粘土層	
2	No. 5	Gトレンチ溝 13	黒灰色粘土層	奈良？
	No. 6	〃 溝 14	灰褐色粘土層	
	No. 7	〃 建物3柱穴	暗褐色粘質土層	
3	No. 8	井戸1（上層）	濃緑灰色粘土層	奈良
	No. 9	井戸1（中層）	暗緑灰色粘土層	
	No. 10	井戸1（下層）	暗灰色粘土層	
	No. 11	方形土壙（上層）	黒灰色粘土層	中世
	No. 12	方形土壙（下層）	暗灰色粘質土層	

表－5　梶原南遺跡花粉分析試料

1．結　果

分析結果をまとめたのが表－6・7である。

調査年次		第1次調査				第2次調査			第3次調査				
	時　代	弥生中期～5世紀末				奈良時代？			奈良時代			中　世	
種別	試料No.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
イチョウ属		0.4				0.5		1.1	1.1	0.1	1.9	0.2	
ナギ										0.4	0.7	0.4	0.2
モミ・トウヒ属		4.9	6.0	6.4	5(5.9)	10.8	5.7	6.5	7.8	16.7	4.5	2.9	0.7
ツガ属		0.9	1.7	1.9		2.3	1.5		3.8	1.7	5.6	2.1	3.5
マツ属		8.9	8.4	6.2	14(16.5)	30.7	30.5	27.4	13.6	14.7	11.7	28.9	35.3
コウヤマキ属				0.5						0.3			
スギ		0.9	2.4	2.4		0.9	0.4	3.2	0.4	0.1	1.5	0.4	
ヤナギ科		0.4	3.9	10.0	2(2.3)	1.9	1.5	2.7	1.4	1.3	2.8	0.4	
ヤマモモ属		1.8	1.1	0.2		0.5	0.4	0.5	2.0	4.2	2.4	3.2	1.4
クルミ属			0.4	1.0					1.1	1.0	0.7	0.2	
ハンノキ属			0.2	0.5	2(2.3)	0.5		0.5	0.4	0.4	0.7	0.9	0.2
シラカンバ属		0.9	0.4		1(1.2)	0.9	0.4	1.1	2.2	8.7	0.2	5.4	3.0
クマシデ属		2.2	0.7	0.7					2.0	9.1	2.2	3.8	9.5
ハシバミ属		0.4	0.4	1.0		1.4	0.4	1.1	1.1	1.3	1.9	2.1	2.1
クリ・シイノキ属		11.6	16.4	27.0	34(40.0)	18.4	22.9	17.7	9.6	7.1	13.9	8.3	7.1
ブナ属		3.1	1.5			1.4	1.1	0.5	4.4	2.3	4.8	0.7	1.8
コナラ亜属		28.0	31.3	18.7	6(7.1)	18.4	19.5	25.8	19.1	14.9	21.4	23.3	17.1
アカガシ亜属		25.8	21.3	21.3	18(21.2)	9.0	10.7	8.6	10.0	7.7	14.1	9.7	10.6
エノキ・ムクノキ属										1.0		0.7	4.2
ニレ・ケヤキ属		1.8	0.7	1.0		0.5			4.5	4.6	4.8	2.5	1.2
モクレン科				0.2									
クスノキ科						0.5				0.6	2.4		0.2
バジ科		0.4							0.5	0.3	0.4	0.4	0.4
マメ科		0.4											
ツゲ科							0.4	1.1					
トウダイクサ科		2.2									0.4	1.2	
ウルシ科									1.5	0.7	0.2		
モチノキ属		1.4	0.7			0.5	2.3	2.2	11.8	0.1	0.2	0.4	0.4
ミツバウツギ科							1.5						
カエデ属		2.7	1.9	0.5	3(3.5)	0.9	0.4		1.1	0.4	0.4		0.2
ジンチョウゲ属		0.9		0.5									
ツツジ属			0.2								0.2	0.4	0.2
カキノキ属							0.4			0.3		1.1	0.7
アカネ科									0.2			0.2	
スイカズラ科			0.4						0.4			0.2	

(%)

表－6　梶原南遺跡花粉分析結果（樹木）

調査年次		第1次調査				第2次調査			第3次調査				
	時代	弥生中期～5世紀末				奈良時代？			奈良時代			中世	
種別	試料	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
イネ科（大）		10.6	6.3	4.2	2(2.3)	20.8	14.5	22.9	6.3	38.0	28.0	21.1	7.2
イネ科（小）		14.4	1.8	3.7	3(3.4)	14.4	23.1	18.0	5.8	3.9	7.7	7.7	6.8
ソバ		1.9	1.8	0.3		2.4	1.6	2.7	3.6			3.5	3.2
ウリ科		1.0	0.7	0.5						0.8			0.4
アブラナ科		5.8	8.8	4.4	3(3.4)	4.0	1.1	2.2	4.0	7.7	5.4	0.3	5.6
ハス		1.9									0.3	0.7	
タデ科		3.8	4.6	0.5	1(1.2)	4.0	2.7	2.7	8.1	0.8	0.9	0.7	2.4
カナムグラ		1.9	0.7			2.4			0.5	7.0	2.3	1.7	4.0
ギシギシ										7.7	3.7	0.7	3.6
ミチヤナギ										0.8			
アカザ科		1.0	1.0	0.5	1(1.2)	2.4	3.2	2.7	8.5	3.1	5.4	11.1	28.8
ヤマトグサ											1.4		
ナデシコ科		1.9	2.1	5.4	6(6.9)	3.2	4.3	1.6	1.8	7.7	7.1	2.0	5.2
キンポウゲ科		1.0											
スイレン科											0.3	0.3	0.8
オキナグサ						0.8	1.6		0.9	1.6	1.4	2.3	3.2
ケシ科		1.0	1.0										
セリ科		16.3	8.4	24.9	28(32.2)	21.6	14.5	6.5	13.0	4.6	6.3	7.7	2.0
リンドウ科													0.4
オミナエシ科		1.9	0.4	0.3									
キク科		4.8	0.7	3.4			1.1	1.6	1.3	1.6	0.9	2.3	2.0
オナモミ		1.0									0.6	0.3	
ヨモギ		28.8	60.7	51.2	43(49.4)	24.0	30.1	37.5	46.2	14.7	26.9	36.6	24.4
カヤツリグサ科		1.0	1.0	0.7			2.2	1.6			1.4	1.0	

（%）

表－7　梶原南遺跡花粉分析結果（草本）

2．考　察

樹　木

針葉樹ではマツ属・モミ・トウヒ属・ツガ属・スギ属が広く検出されている。また、広葉樹としては常緑のアカガシ亜属・シイノキ属・ヤマモモ属や落葉のコナラ亜属・ブナ属・シラカンバ属・ハンノキ属・ヤナギ科・ニレ科・モチノキ属・カエデ属が全体的にみられるようである。

これらの樹種は現在の森林でも見うけられるものであり、弥生時代中期から中世に至るまでの間の植生は現在とよく似たものであったと考えられる。

次に、検出された樹種の中で高率をしめているマツ属とコナラ属（コナラ亜属＋アカガシ亜属）について棒グラフで示してみると図－13・14のようになる。

マツ属についてみると、弥生中期から5世紀の試料で少なく、第2次調査の奈良時代と思われる試料と中世の試料で多い。

コナラ属は弥生中期から5世紀にかけて多く、奈良時代・中世で少なくなっている。

また、照葉樹（常緑のアカガシ亜属・シイノキ属・クスノキ属・ヤマモモ属等の総称）の状態は図－15のようになる。照葉樹のうつりかわりは前のマツ属・コナラ属のようにはっきりした傾向はみられない。しかし第1次調査の弥生中期～5世紀で幾分多く、奈良時代と中世では少なくなっている傾向がうかがえる。

そこで照葉樹花粉とマツ属花粉の比（Q／P）をもとめてみると図－16のようになる。明らかに弥生中期～5世紀で大きな値を示し、奈良時代、中世と時代の経過に従い減少している。すなわち、第1次の弥生中期～5世紀が3.2～7.8と高く、次いで第3次の奈良時代が1.3～2.8、第2次の奈良時代と思われる試料が0.9～1.1、第3次の中世が0.6～0.7と減少の状態がみられる。この数値をもとにしてQ／Pのグラフを時代順に記してみると図－17のような曲線をえがき時代の経過と共にその値が減じていくことがわかる。

この曲線上での位置から時代の明確でなかった第2次調査の試料は第3次調査の奈良時代と中世の間のものであることがわかる。すなわち第2次調査の遺構は奈良時代末期から中世初期にかけてのものであろうと推定される。

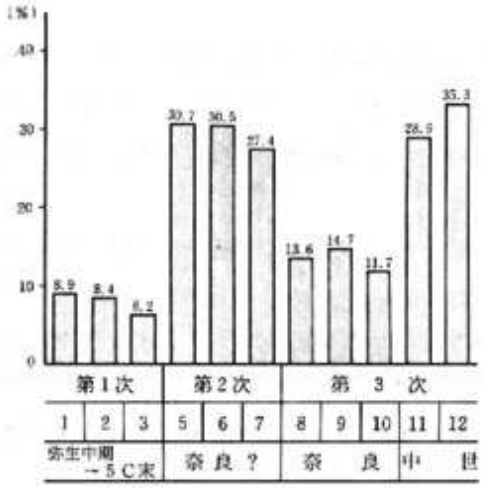
以上より梶原南遺跡周辺は弥生時代中期より中世に至る間、照葉樹を主体とした植生がみられ、それにマツ属が次第に侵入しはじめ、中世には照葉樹とマツ属の混交林がみられるようになったと思われる。

モミ・ツガ属も奈良時代まではある程度の生育がみられたが中世になると減少している。第3次調査において実施した材質鑑定でモミがみられることと合わせ考えると、用材として利用されたために減少していったといえよう。

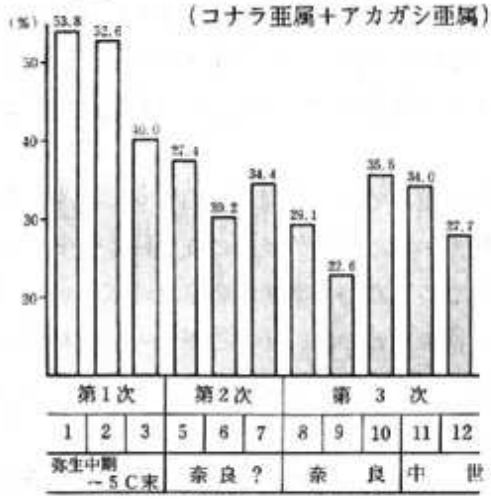
草　本

イネ科は栽培種から野生種に至るまで多くの種類があり、大きさの点からいえば一般に栽培種は大型で野生種は小型の傾向がある。50ミクロン以上を大型、未満を小型として計数した結果が第6表である。

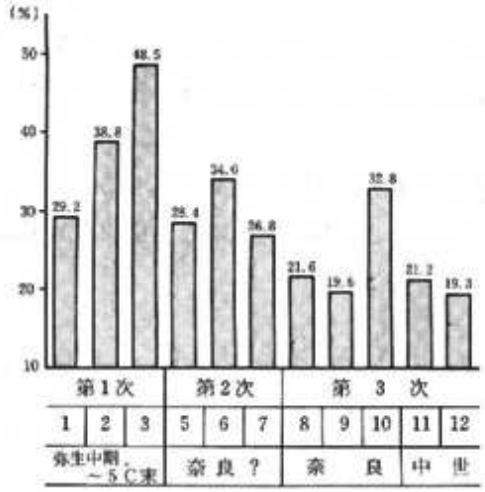
図－13　マツ属花粉検出量



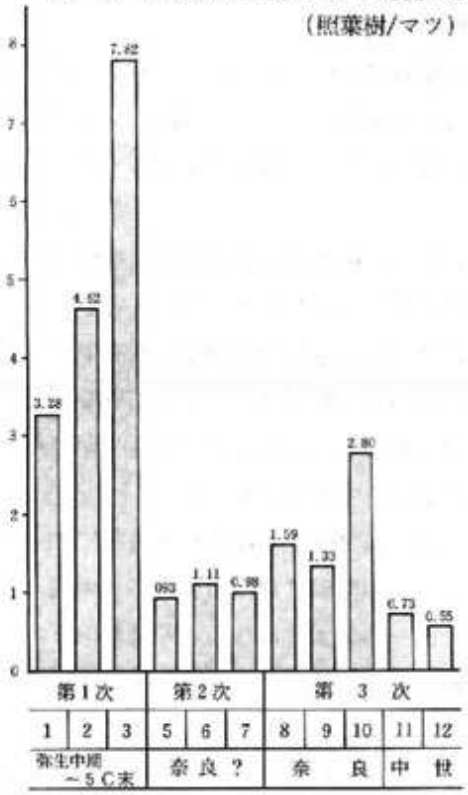
図－14　コナラ属花粉検出量
（コナラ亜属＋アカガシ亜属）



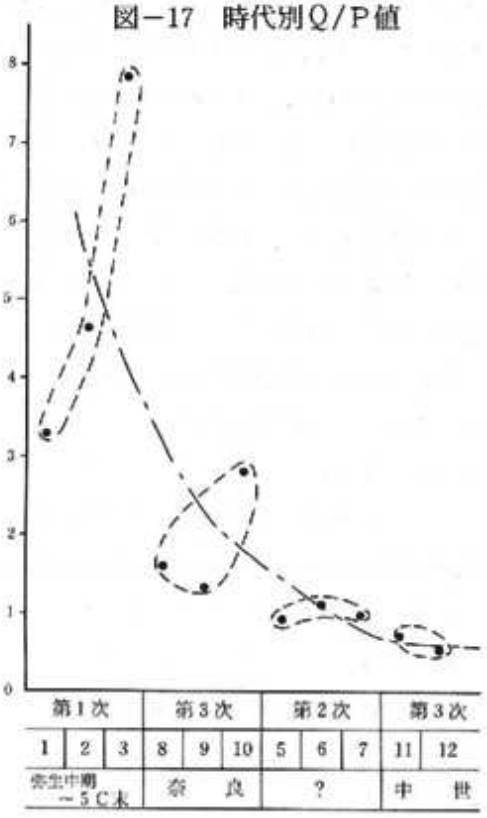
図－15　照葉樹花粉検出量



図－16　照葉樹花粉とマツ花粉の比
（照葉樹/マツ）



図－17　時代別Q/P値



この結果によると、小型の方が大型より多い場合が幾らかみられるものの、全般に大型が小型より多く検出されている。大型がそのまま栽培種、すなわちイネとは断定できないまでも大型の中にイネが含まれていることは否定できない。そう考えると、当遺跡の全試料から大型花粉が検出されていることから弥生時代中期以降中世に至る間、多かれ少かれ稲作が行われていたといえよう。

その他、畑作としてソバが作られていたようである。調査したすべての時代にソバが検出されている。不時の災害に備える為か、また常食の為かは判然としないが引き続いて栽培されていたと考えられる。

また近くの池沼にはハスもみられたようである。

アブラナ科・ウリ科が検出されているが、栽培種のものか野生種のものかわからない。

ヨモギ・セリ科・キク科・ナデシコ科・アカザ科・タデ科などの草本類がかなり検出されている。水田や池沼・溝の水辺はセリ科・タデ科がみられ、その際の畦や路傍にヨモギ・キク科・ナデシコ科・アカザ科・タデ科等が生育していたと思われる。

2．蛍光X線分析

第1次～第3次の調査で出土した遺物のうち、鋳造ないし鍛造にかかわると思われる遺物について、蛍光X線分析による成分分析を実施した。分析は大阪瓦斯株式会社総合研究所分析センターに依頼した。

試料の採取方法および成分分析の結果を以下に示す。なお分析方法は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による。ターゲットには Ti、Ge、Gd の3元素が用いられた。測定データ中、＊はターゲットの影響によるピークで、また各ピークの高さは元素の含有量には直接比例しない。

〔No. 1〕　建物9出土のとりべ（271）　内面に付着した残滓を削り取って分析した。主成分は Fe（鉄）で、酸化鉄の形をしていると考えられる。少量成分として Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、S（硫黄）、K（カリウム）、Sn（スズ）、Zn（亜鉛）を検出した。このうち Al、Si、S、Kは土砂の成分と考えられる。Sn、Zn が特徴的に検出されているが、鉄の量より1桁低い含有量と考えられる。

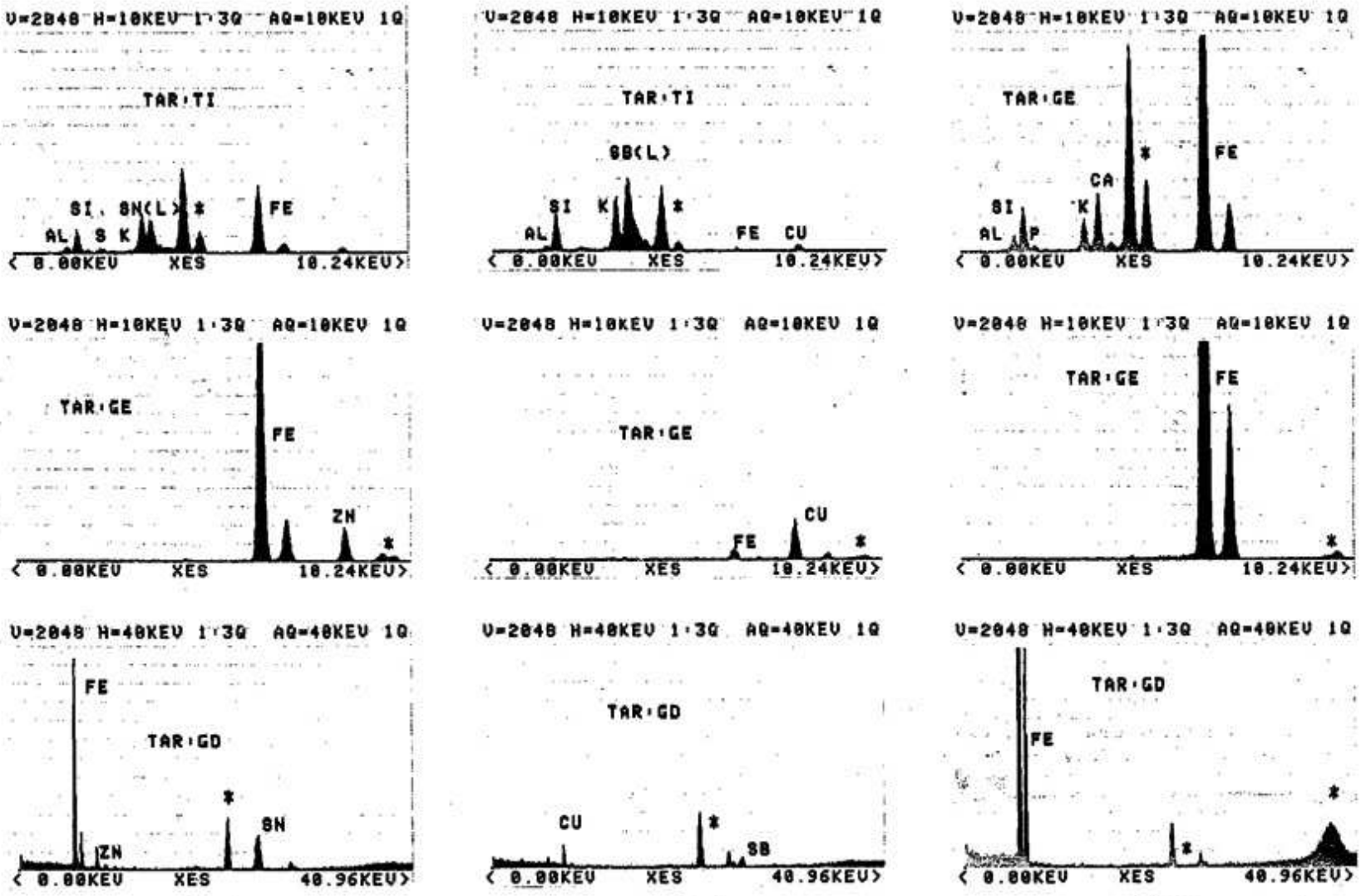
〔No. 2〕　Hトレンチ P－141出土のとりべ（272）　内面に付着した残滓を削り取って分析した。主成分として Si（ケイ素）が多く含まれている。土砂の成分と考えられる。少量成分として Al（アルミニウム）、K（カリウム）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Sb（アンチモン）がある。Fe、Cu、Sb が特徴的に検出されている。いずれも数%位含まれている可能性がある。Al、Kは土砂の成分と考えられる。

〔No. 3〕　土壙5より出土した鉱滓の黒味を帯びた面を分析した。主成分として Fe（鉄）、Si（ケイ素）が多い。Fe は酸化鉄として存在すると考えられる。Si は土砂の成分と考えられる。少量検出された Al（アルミニウム）、P（リン）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）はいずれも土砂にふくまれているものと考えられる。

〔No. 4〕　建物3より出土した鉱滓（279）の赤味を帯びた面を分析した。検出元素のうち、Si（ケイ素）、及び Fe（鉄）が多い。鉄は着色からみて酸化第2鉄として存在すると考えられる。少量成分として検出した Al（アルミニウム）、P（リン）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Mn（マンガン）、Ti（チタン）、Cu（銅）、Ba（バリウム）のうち、Al、Si、P、K、Ca、Ba は土砂に由来すると考えられる。Ti、Mn、Cu はいずれも微量（0.1%以下）である。

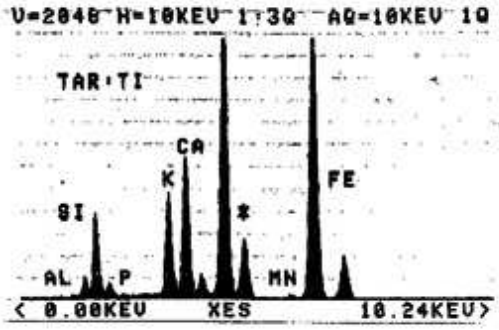
〔No. 5〕　Iトレンチ暗灰色粘土層より出土した鉱滓（281）を切断し、切断面を分析した。Si（ケイ素）及び Fe（鉄）が多く、鉄は酸化鉄の形で含まれていると考えられる。Si は土砂に含まれる成分と考えられる。少量検出された Al（アルミニウム）、P（リン）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ba（バリウム）は土砂に由来するものと考えられる。

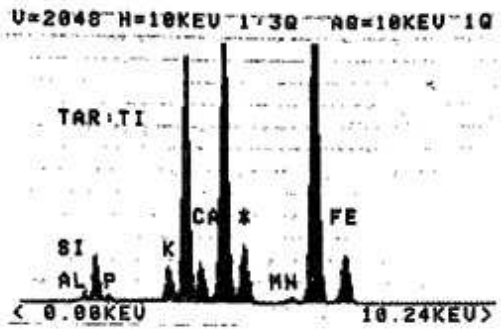
〔No. 6〕　井戸3掘形出土のバリ状遺物をそのまま分析した。主成分として Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、P（リン）、Fe（鉄）が多く検出された。Fe は酸化鉄と考えられる。Al、Si、Pは白く付着した土砂によるものと考えられる。少量検出されたK（カリウム）、Ca（カルシウム）は土砂の成分、Mn（マンガン）は鉄の不純物と考えられる。

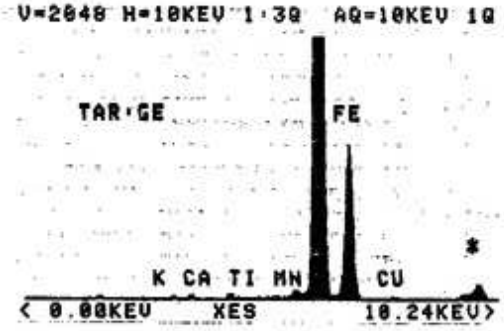


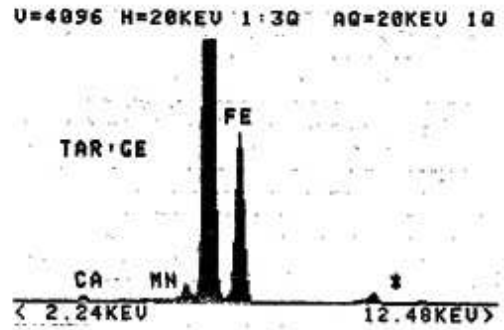
No. 1　　No. 2　　No. 3

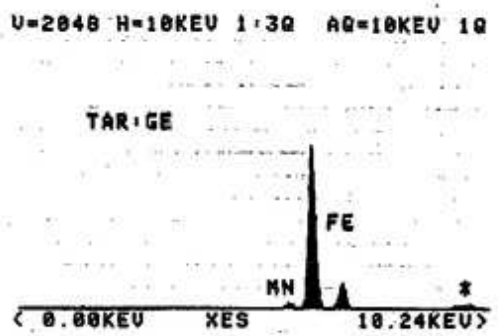
図−18　蛍光X線スペクトル

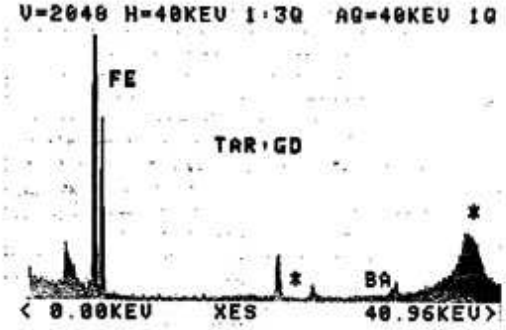


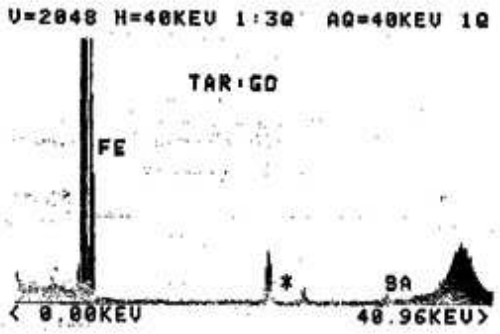


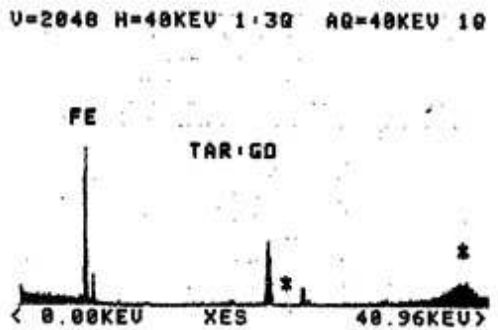












No. 4　　No. 5　　No. 6

図－19　蛍光X線スペクトル

第V章　まとめ

3次にわたる調査の結果、多くの遺構・遺物を検出し、8世紀代を中心とした遺跡であることが判明した。以下明らかになったことについて検討し、まとめとしたい。

遺構の変遷

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代中期前半から中世に至る各時代のものを認めた。ただ、各遺構の存続期間は比較的短く、集落は各時代を通して営まれるものではない。

弥生時代の遺構は、北東から南東へのびる微高地上に形成され、調査区はその外縁部にあたる。

Hトレンチ東側で発見された遺構として、弥生時代中期前半の2基の土壙があり、後期に属す遺構として住居跡1棟を検出している。弥生時代後期の溝は、調査区を北東から南西方向に走るもので、等高線に直交するようにほぼ直線的に掘削されている。今回の調査で確認された溝5の総延長は約130mを測り、検出状況からみて、この溝は下流部分に相当するものと考えられる。上流にあたるところに、これに関わる集落等を考えねばならない。

檜尾川東部地域には氾濫原や後背湿地が拡がり、自然の影響を受けやすい地理的環境にあるため、居住には適さないとされてきた。そしてこれまで弥生時代後期の遺構・遺物がわずかに知られるのみで、むしろ山際付近にその居住地を想定されていた。今回の調査では弥生時代中期前半にさかのぼる遺構・遺物を検出し、早くから低湿地への進出が明らかとなったほか、出土遺物からみれば弥生時代前期～中期中頃および後期に属すものが認められるところから、Hトレンチを南辺として北および東を中心とした長期間にわたる集落を想定することができる。

最近の調査例でも、高槻市芝生遺跡や守口市八雲遺跡などの淀川沿岸の低湿地帯に営まれた集落が明らかにされつつある。檜尾川以東のこの地域での弥生時代の歴史的空間構成を考えるうえで、今回の調査結果はその一歩をしるすもので淀川を中心に展開する集落のひとつとして重要な位置にあるといえる。

古墳時代の遺構としては、5世紀末頃の溝がある。調査区南側の整地層から出土する遺物にはこれと同時期のものが多数含まれていること、上牧遺跡や梶原遺跡などでも遺構・遺物が検出されている⑨ことからすれば、その実態はまったく不明といわざるを得ないが、北の山麓に位置する梶原古墳群を考えれば、この時期の集落位置も弥生時代のそれと同じ様相を呈しているのであろう。

奈良時代の集落はGトレンチ以北に分布していることが明らかとなった。これはIトレンチ以西は谷地形であることや、隣接する市立五領小学校の改築時に実施した確認調査で、何らの

遺構・遺物も検出しなかったことから、G・H－Iトレンチ間を集落の西限とみることができる。同様に東方に拡がる内ケ池周辺は淀川の氾濫原であるという地形的な状況から、集落の東限は内ケ池以西に求めることができ、集落は一定の範囲を想定することができよう。

検出した掘立柱建物は18棟で、柱列軸の方向や柱筋が一致するなど一定のまとまりを認めることができる[11]。すなわち柱列軸でみればN－21°－E（建物7）、N－25°－E（建物1～3・9・11－14）、N－28°－E（建物4～6・8・10・16・18）、N－37°－E（建物15・17）の4グループに分けることができる。このうち、建物1－3、4・5、11～13などは近接して柱筋を揃えており、それぞれ1群を構成していることがうかがえる。建物間では柱穴の切り合いから建物2→建物1、建物7→建物16、建物13→建物18という前後関係が明らかになっている。これを柱列軸が磁北より東へ振る角度からみれば、25度→25度、21度→28度、25度→28度となって、21度・25度→28度という関係を見出すことができるが、21度と25度、そして37度を示す各建物の前後関係を示す資料はない。時期が下るほど軸が東へ振る傾向は鳴上郡衙跡や郡家今城遺跡においても認められており[12]、当遺跡でも出土遺物の時期や柱掘形の形状などから21度→25度→28度→37度という順序で柱列軸が変化してゆくことが考えられる。

各遺構の時期については、建物1～3・7・9・11～14、櫓1・2、井戸1・2などから平城宮Ⅰ－Ⅲに相当する土器が出土し、その編年観から8世紀前半～中頃と考えられる。また、建物4～6・8・10・15～18、櫓3・4、井戸3などからは平城宮Ⅲ～Ⅴに相当する土器類が出土することから、8世紀中頃～後半に属すと考えられる。

以上の要件から検出した建物をまとめてみると、表－8に示すような群に分類することが可能である。この各群は、それぞれ1～3棟で構成し、このうち1棟で構成しているC・E・G・I群は、いずれも調査区縁辺にあることから、周囲に建物の所在を容易に推定できる。これら9群の時間的関係を考慮すれば、8世紀中頃を中心に前半には5群（A－E）、後半には7群（A・B・D・F～I）という群構成が考えられる。

群	遺構	群	遺構
A	建物2（建物1・3）	F	建物4・5
B	建物7（建物16）	G	建物6
C	建物9	H	建物8・17
D	建物11～13（建物10・18、井戸3）	I	建物15
E	建物14、井戸2		

（　）は建替え

表－8　建物群の構成

今回検出した建物群のなかでD群は3棟の建物をコ字形に配置している。主屋・副屋・倉庫の構成は他の遺跡でも一般的にみられるところであり、D群にあっては主屋（建物13）の西柱筋と副屋（建物11）の東柱筋、副屋の西柱筋と倉庫（建物12）の東柱筋が揃い、中央の空間地を囲む配置となっている。また、2棟で構成する建物群の配置形態はF・H群のように縦列に

並ぶものが認められる。各建物群にはA－F間、D－E間、F－G間のように柵で建物群の境界を明示するものもある。そして隣接する群の建物間にはその柱筋を一致させようとする意図がうかがえ、集落としてのまとまりを感じさせる。

D・Hの2群には主屋のすぐ横に大型の土壙がある（土壙3～5）。この土壙からは甕・鍋などの煮沸具や火つけ木等が比較的多く出土し、埋土中には炭・焼土が含まれることから建物にともなう廃棄壙などであろう。

各建物群が占有する敷地の広さは、建物や柵の配置状況、特に東西を柵で区画するF群を参考にすれば、1辺20～30m前後の数値が与えられよう⑩。

高槻市では9遺跡から7～9世紀の掘立柱建物を検出しており、規模の明らかなものは192棟を数える（表－9）。このうち最も標準的な規模である3間×2間の建物⑪は全体の4割、屋だけに限れば6割以上を占めている。倉庫は2間×2間が約5割を占め、3間×3間の規模がこれに次ぐ。ただ、梁行3間以上を測る掘立柱建物は嶋上郡衙跡に集中して検出している。嶋上郡衙跡における梁行2間以下と3間以上の建物の比は3：2である。これに対して、他の集落遺跡での比は97：3と圧倒的に梁行2間の建物が多く、官衙と一般的な集落の建物規模の差を見ることができる。梶原南遺跡では梁行3間以上の建物は存在せず、大半が3間×2間の屋と2間×2間の倉庫という建物で構成されていることから、一般集落の範疇に含めて考えることができる。

規模:梁行(間)		1				2					3				4
遺跡名	桁行(間)	1	2	3	4	2	3	4	5	6	3	4	5	6	4
梶原南	屋			2			6	4							
	倉					5									
上牧	屋														
	倉									1	1				
安満	屋						2		3				1		
	倉					2									
芝谷	屋		1		1								1		
	倉							1							
紅茸山	屋					2	3								
	倉	2	2												
上田部	屋						1								
	倉														
大蔵司	屋							2							
	倉														
郡家今城	屋	9	5	6		2	49	5	4			1			
	倉					9	5								
嶋上郡衙跡	屋						10	4	5			4	1	1	
	倉					12	2				10	2			2

表－9　高槻市の古代掘立柱建物の規模

奈良時代の集落が廃絶したのち、12世紀初頭にはHトレンチ北東隅に土壙や柱穴がわずかに認められる。遺構や遺物の検出状況からすれば、当該期の集落の外縁部とみることができ、北～北東側にその中心を求めることができよう。溝4・6はその上流部を認めることはできなかったが、弥生・古墳時代の溝と同じく等高線に直交し、直線的に掘削されている。堰の存在などからみて農業に関連することは明らかである。また、F～Hトレンチで検出した、耕作痕と考えられる小溝の埋土を花粉分析した結果、イネやソバなどの栽培植物の花粉を検出していることから、これらは耕地他の所産と考えることができる。

製塩土器について

製塩土器は、G・Hトレンチより出土している。特に、井戸3の掘形からまとまって出土した682点について分類を試みた。これらは胎土・形状・調整などの特徴からⅠ～Ⅳ類に大別できる。なお、製塩土器は細片で出土するものが多く、接合しないものはすべて1点として計数した。

Ⅰ類　全体に占める割合が85％と量的に最も多く、本市出土の製塩土器のうち大部分はこれに属す。胎土中には砂粒を含み、内面はナデ調整を施す。胎土に含まれる砂粒の種類によってａ～ｃ類に分かれ、ａ・ｃ類は口縁部形態でさらに細分できる。

Ⅰa₁類　口縁部は胴部より外反後内弯し、端部は水平に面をなしている。内外面ともナデ調整でヘラ圧痕が看取できるものもある。厚さ0.6～1.1cmを測り、胎土中には白色の細砂粒を含む。焼成は比較的硬質で、色調は暗灰褐色～暗赤褐色を呈す。

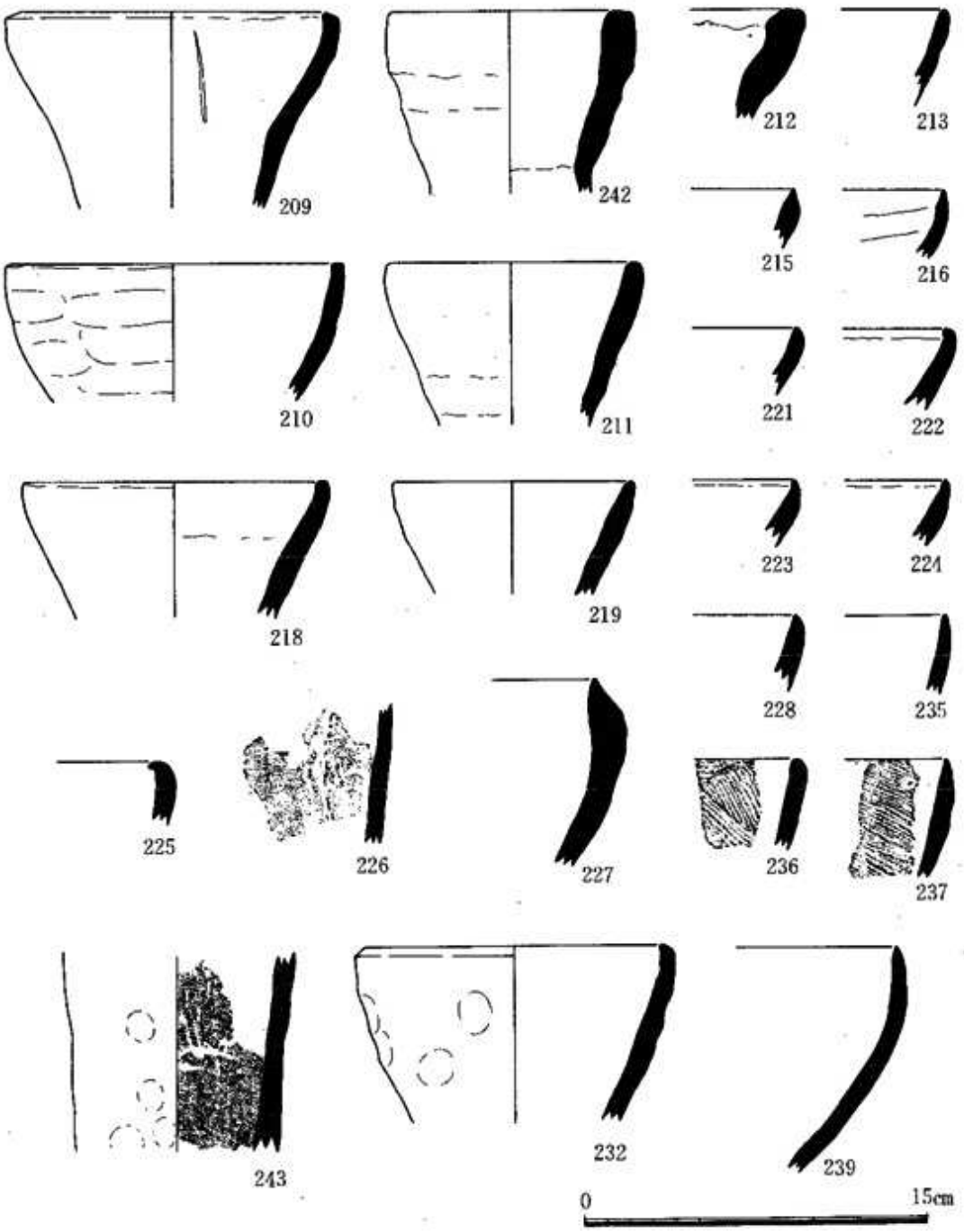
Ⅰa₂類　胎土はもろく、白色砂粒を含んでいる。風化の著しいものが多いが、外面はやや粗いナデ調整で指圧痕が残り、内面は比較的丁寧になでる。厚さは0.6～1.2cmを測り、焼成は軟質である。多くは明褐色系の色調を呈し、口縁端部が内弯して先細りになるものと、暗褐色～淡茶褐色で口縁端部が丸くおわるかわずかに面をもつものがある。しかしながら両者は明確に分類するに至らなかった。

Ⅰb類　口縁端部は内弯した先細りの形態である。内外面ともにナデ調整で、粘土接合痕が残るものもある。胎土中に0.5cm前後の風化が進んだチャート粒を含んでいる点が特徴的である。軟質で、色調は乳白色～桃灰色を呈している。

Ⅰc₁類　胎土中に0.1～0.3cmの石粒を含み、特に石英粒が顕著である。内外面ともナデ調整を施し、口縁端部は丸くおわるものとわずかに面をもつものがある。また、尖底ぎみの底部片が1点だけ出土している。厚さ0.6～0.9cmを測り、色調は暗灰色～淡茶褐色、軟質焼成である。

Ⅰc₂類　胎土中の砂粒は0.2cm以下でクサリ礫が顕著である。口縁端部は先細りし丸くおわる。器壁の厚さは0.6～0.9cm、色調は暗黄褐色～乳白色である。

Ⅰc₃類　細砂を含んだ胎土で、厚さは0.5～0.6cmと薄い。内外面ともナデ調整であるが、外面は概して粗く粘土接合痕の残る例も多い。口縁端部の形態は、先細りするものとわずかに内傾し丸くおわるものがある。色調は淡黄灰褐色～暗褐色である。



図－20　製塩土器

Ⅰa₁類(209・210)、Ⅰa₂類(211～213・242)、Ⅰb類(215・216)、Ⅰc₁類(218・219)、Ⅰc₂類(221・222)、Ⅰc₃類(223・224)、Ⅱa類(225・226・243)、Ⅱb類(227・228)、Ⅱc類(232)、Ⅲ類(235～237)、Ⅳ類(239)
井戸3掘形(209～213・215・216・218・219・221～228・232・235～237・239)、溝15(242・243)

Ⅱ類　内面に布圧痕が残る特徴的な土器であり、型造りで整形する。全容を知れるものはないが、砲弾形の形態が復原できる。出土数は40点、全体に占める比率は６％である。胎土の種類で３種類に分かれる。

Ⅱa類　胎土中に砂粒はほとんど含まない。内面の布圧痕は１cmにつき12～18本と36本前後を測る２種類認められるが、１破片で両方の布圧痕が看取できるものもあって布目の粗密では分類できない。外面はナデ調整で指圧痕が残る。口縁端部は先細りで内側に巻きこんでいる。器厚0.5～0.8cmとやや薄手である。焼成は硬質、色調は茶褐色～暗赤褐色を呈す。

Ⅱb類　胎土に0.3cm前後の石粒を含む。布圧痕は１cmあたり14本前後と23本前後の２種類ある。普通にみられる布目とは趣が異なる圧痕もある。口縁部はわずかに広がり、端部は外傾し面をもつ。色調は茶褐色～淡黄灰色、厚さ0.4～0.9cmを測る。

Ⅱc類　胎土中に砂粒や雲母などの鉱物粒を含む。焼成はやや軟質でもろい。布圧痕は粗密の差が著しく、１cmあたり10本前後と44本程度の２者が認められる。厚さ0.6～0.9cm、口縁端部はわずかに内傾し面をなす。色調は淡茶褐色～黄褐色を呈す。量的には少ない。

Ⅲ類　内面をハケで調整するのが特徴である。合計55点、８％を占める。口縁端部の形態は先細りになるものと丸くおわる２種があり、前者には粘土紐の接合痕が残る。量的には前者の方が多い。焼成は比較的硬質であり、胎土中には0.1cm以下の白色砂粒を含む。色調は暗灰色～淡赤褐色である。厚さは0.4～0.9cmを測り、0.6cm前後が平均的である。

Ⅳ類　胎土中にモミ・ワラを混ぜている。合計７点、１％と微量であり、Ⅳ類の製塩土器は三島地域においては初見である。口縁端部の形態は先細りで内面はナデ調整を施す。胎土に砂粒は含まない。モミ・ワラ痕が他と比べて少ないものが１点あるが、出土数が少ないので個体差か産地差かは判然としない。焼成は軟質、色調は灰褐色・淡茶褐色である。器厚は0.5～0.8cmを測る。

以上、製塩土器を調整・胎土・形状等から分類を試みた。

梶原南遺跡で出土した製塩土器は、胎土や形態から複数地域よりもたらされたのは明らかである。大阪府下の他の遺跡から出土する製塩土器をみても、内外面ナデ調整のⅠ類が最も多く出土している。Ⅰ～Ⅳ類や当遺跡では出土しなかった外面にタタキをもつ製塩土器の構成比は地域によって異なる傾向があり[8]、これには搬入ルートや産地との位置関係などが関係していることが想定される。

Ⅰ類の産地は不明であるが、他の遺跡と同じく紀淡海峡地域や東・西部瀬戸内地域からもたらされたと考えられる。Ⅱ類はその特徴から北部九州～西部瀬戸内地域に求め得るかもしれない[8]。Ⅳ類は本市で初めて出土した。モミ痕の認められるものに伊勢湾地方の「志摩式製塩土器」[8]があるが、これは外面にのみモミ痕が認められるのに対し、Ⅳ類は胎土中に混ぜた状態であり両者の間には明らかなちがいがある。Ⅲ・Ⅳ類の産地は現段階では不明で、今後の課題である。

一般に奈良時代に使われる塩は、生産技法の変化に伴って固形塩から散状塩へと変化していくとされ、固形塩の用途は①食用・食品加工用、②祭祀、③工業原料に大別されている[11]。食用に供する塩は散状塩が主流で、固形塩は散状塩に比べて下等品として扱われたらしい[12]。しかし製塩土器は奈良時代の集落ではごく普通にみられるものであり、郡家今城遺跡では1万点以上の出土をみた[13]ことから、引き続き固形塩を食用としていたと考えることも可能である。祭祀については、延喜式巻七・神祇七、大嘗祭条に「螺貝焼塩十顆」とある他にも四面御門祭や御川水祭条に塩の記述をみることができる。「顆」は固形物を表す単位であることから、10世紀にも固形塩を使用していたことがうかがえる。工業用では、平城京左京三条四坊七坪[14]の例があげられる。ここは和銅開珎鋳造遺跡と考えられ、炉跡集中地よりまとまって出土していることから、銅銭製造工程のいずれかで使用すると推定されている。また、天平六（634）年の「造仏所作物帳」には『塩一斗三升五合、鉛錆料』や『塩二升七合、鉛錆料』とあり、ガラス玉や釉薬の製造に塩を使用している。梶原南遺跡では、製塩土器が羽口や鉄滓などの鍛造に関わる遺物と共伴することが多い[15]。一般に鉄は塩を嫌うと考えられるが、近世以降民俗例では鍛冶における焼き入れ時に塩を使用している。南部鉄の場合、溶けた鉄にタガネが付くのを防ぐ為に塩を用いる[16]。また、焼き入れ時の脱炭防止剤として味噌と塩を混ぜたものを塗布する例[17]もある。刀鍛冶も塩と硝石と味噌を混ぜた「塩硝味噌」を艶出剤として使用し、表面が内で酸化したり脱炭するのを防いでいる[18]。中世ヨーロッパにおいても刃物に浸炭するために牛の角と塩を混ぜたものを使用している[19]。

このような民俗例が必ずしも古代の鍛造技術に直接結びつくとは言い得ないし、他遺跡の鍛造遺構で製塩土器が出土しない例も数多い。しかし、古代の鍛冶と塩とのかかわりを考えることができる資料を得たと確信する。

記名木簡

井戸2より出土した木簡は、片面の上半部に「新屋首乙賣（にいやのおびとおとめ）」という女性名が明瞭に記されている。しかし、「新屋」という氏族は新撰姓氏録に記載されておらず、新たな氏族の存在が明らかとなった。

この木簡は、1．女性名のみを明瞭に記している。2．井戸の底より単独で出土した。3．形態が通常の木簡類とは異なり、斎串に類似している。以上3点から宗教的行為、それも私的な祭祀に用いられたと考えられる。

本例のように、木簡の通常の用途以外で1人の姓名のみを明記した木簡は管見では知らない。ただ、人形に人名を記したものが平城京で認められる[20]ことから、類似した宗教的・思想的背景が認められるかもしれない。それゆえ当遺跡出土の木簡は、荷札・付札・文書等の定義から逸脱することになる。厳密には木札としたほうが良いのかもしれない。

梶原南遺跡の西方約10kmには式内社である「新屋坐天照御魂神社」が鎮座している。この地域（茨木市中・東部）は、律令期における嶋下郡4郷のうち新屋郷であったとされている[21]。「首」が地方小豪族に与えられた姓であり、居住地の地名を氏の名とすることからすれば、新

屋氏の活動本拠も茨木市中・東部地域に求めるのが妥当であろう。

なぜ梶原南遺跡で新屋郷の人名を記した木簡が出土したのかは判然としない。その理由は明らかにすることはできないが、この地と新屋郷との深いかかわりがうかがえる例として貴重な資料になるであろう。

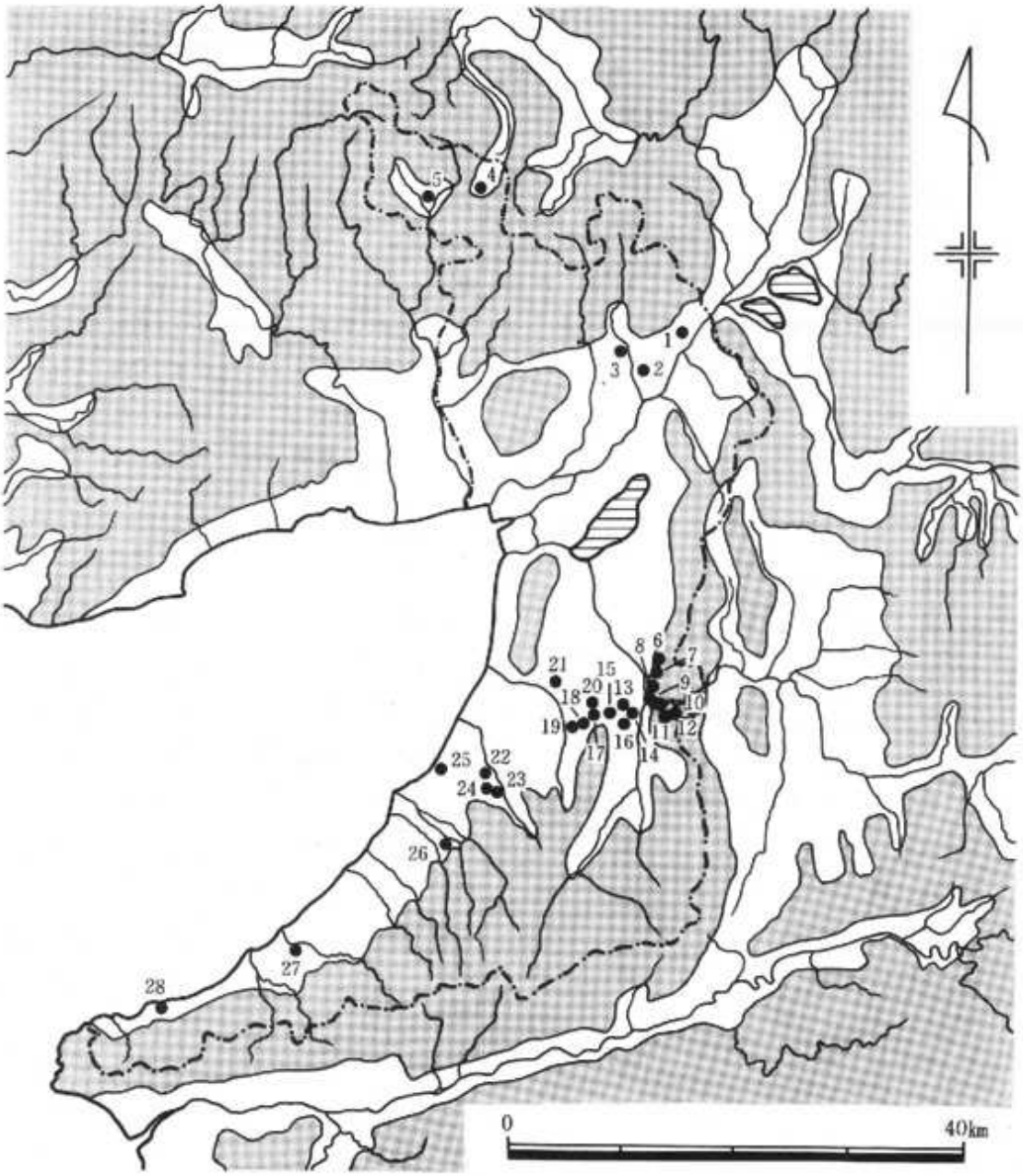
大阪の鋳・鍛造遺跡

G～Iトレンチで検出した鋳・鍛造関係遺物は、とりべ・羽口・鉄滓などである。量的にはわずかであるが、これらは集落南側で東西の2ケ所に集中して出土した。東では建物6・9などからとりべ・鉄滓が、建物1～3を中心とした西側では羽口・鉄滓などが出土した。とりべは鋳造の色彩が濃いが、蛍光X線分析結果からみれば鍛冶滓と考えられるものが多数で、鋳造・鍛造など生産活動のちがいはあまり明確ではない。ただ、焼土壙1・2は周壁が熱を受け、底は焼けずに炭や焼土が堆積するなど平城宮右京内裏北外郭で検出したSX 801㊂などに共通すると考えられ、その規模・形状からみて鍛冶炉である可能性が強い。とりべは3点しか出土していないが、そのいずれも器壁が薄く、いわゆる専用品と比べれば下級品とみられる。典形的なとりべの形態である、注口をもち器壁の厚いものや、太井遺跡のように土師器に粘土を貼りつけて器壁を厚くしたもの㊃は出土していない。器壁の厚薄や形態で耐用回数や使用目的を異にするかどうかは明らかでない。ただ、当遺跡出土のとりべはやや粗雑なつくりであることから、その生産規模も容易に推測することができよう。

三島地域では本遺構の他、これまで上田部遺跡で羽口、嶋上郡衙跡で羽口・鉄滓が出土している。両者ともがなどの遺構は検出しておらず、所属時期も不明確なものがある。嶋上郡衙跡では井川廃寺北東の丘陵裾部、5・6・15地区で羽口・鉄滓が出土する。伴出遺物から、7世紀中頃には鍛冶が行なわれていたと考えられる。

大阪府下における古代～中世（7～15世紀）の遺跡で鋳・鍛造に関係する遺構・遺物が検出されているのは、管見では28遺跡を数える。このうち古代の鋳・鍛造遺跡は20遺跡あり、寺域内で検出した鳥坂寺跡、大県南遺跡（山下寺跡）、野中寺跡、海会寺跡の4遺跡は寺院造営に伴なうことが明らかである。残る16遺跡のうち上田部遺跡と出山遺跡及び横町遺跡以外は古代寺院の近接地に立地していることから、その造営・修復等に関わったとかんがえることもでき、特に銅滓の出土する遺跡はその感が強い。そして丹南鋳物師発祥の地といわれる南河内一帯はこれらの遺跡が集中している。

寺院を建立するには瓦や仏具等を調達することが必要である。海会寺跡や野中寺跡などで検出された瓦窯や鋳・鍛造遺構及び炭窯は、寺院造営の際に必要な部材や仏具などを現地で生産したことを示している。天平宝字六（762）年の造東大寺の告朔解によれば、造東大寺司の下部組織として造物所、木工所、鋳所、造瓦所などがありそれぞれの作業を行っていたことがわかる。地方寺院でも同じように分業して作業にあたったのであろう。鋳・鍛造に従事した人々はいかなる集団であったかは明らかではない。しかし寺院建立に携わる中核的集団と、その周辺にあって寺院の修復や一般集落で農工具等の小鍛冶に従事していた集団を想定できるかもし



1. 榎原南	2. 上田部	3. 崎上郡衙跡	4. 横　町	5. 大　里	6. 大県南	7. 太平寺
8. 太平寺・安堂	9. 鳥坂寺跡	10. 高井田	11. 原　山	12. 田　辺	13. 西大井	14. 土師の里
15. 野中寺跡	16. 古　市	17. 真福寺	18. 太　井	19. 日置荘	20. 観音寺	21. 大和川・今池
22. 　上	23. 西浦橋	24. 菱木下	25. 伽羅橋	26. 和　気	27. 海会寺跡	28. 田　山

図－21　古代～中世の鋳・鍛造遺跡（大阪府）

No.	遺跡名	所在地	遺構	遺物	時期	文献
1	樫原南	高槻市	鍛冶炉	とりべ・羽口・鉄滓	8C	—
2	上田部	〃	—	羽口	8C	1
3	嶋上郡衙跡	〃	—	羽口	7C～中世	2～4
4	横町	豊能郡能勢町	製鉄炉	鉄滓	8C？	5
5	大里	〃	製銅炉？	銅滓	12C	6
6	大県南	柏原市	鍛冶炉	羽口・鉄滓・銅滓	6～8C初	7～10
7	太平寺	〃	—	羽口・鉄滓	6～8C・中世	11
8	太平寺・安堂	〃	—	羽口・鉄滓・銅滓	6後～7C後	12
9	烏坂寺跡	〃	木炭窯	とりべ・羽口・鉄滓・銅滓	7C中～後	13
10	高井田	〃	—	羽口	7C	14
11	原山	〃	鍛冶炉	羽口・鉄滓	8C	15
12	田辺	〃	鍛冶炉	羽口・鉄滓	7C	16
13	西大井	藤井寺市	—	羽口・銅滓	8C	17
14	土師の里	〃	—	羽口	6～8C？	18
15	野中寺跡	羽曳野市	鋳造炉	銅滓・炉壁	7C中	19・20
16	古市	〃	鍛冶炉	羽口・鉄滓・鋳型状土製品	15C中	21
17	鳥福寺	南河内郡美原町	白炭窯・鋳造炉	羽口・鋳型・鉱滓	8・13C	22
18	太井	〃	鋳造炉	とりべ・羽口・銅滓	8C前	23
19	口置荘	〃	—	鋳型・炉壁	平安末期	24
20	観音寺	松原市	—	とりべ・鉄滓	13C	25
21	大和川・今池	〃	鍛冶炉？	鉱滓	8C	26
22	上	堺市	—	鉄滓	13～14C	27
23	西浦橋	〃	鍛冶炉	羽口・鉄滓	鎌倉	28・29
24	菱木下	〃	—	羽口・鉄滓	15C	30
25	伽羅橋	高石市	—	羽口・鉄滓	平安後期？	31
26	和気	和泉市	—	羽口・鉄滓	13C	32
27	海会寺跡	泉南市	鍛冶炉	羽口・鉄滓	7C	33
	〃（東地区）	〃	—	羽口	8C前	
28	田山	泉南郡阪南町	—	羽口・鉱滓・木炭	8C中	34

表－10　古代～中世の鋳・鍛造遺跡（大阪府）

1．橋本久和「上田部遺跡の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7』高槻市教育委員会　1983
2．大船孝弘「5－E・F地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7』高槻市教育委員会　1983
3．大船孝弘「5－J・K地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・10』高槻市教育委員会　1986
4．大船孝弘「5－M・N地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』高槻市教育委員会　1987
5．森本　弋・前田豊邦『地黄北山遺跡・横町遺跡調査概報』能勢町教育委員会　1980
6．尾上　実・岡本敏行・宮野淳一『大里遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会　1986
7．北野　重『大県・大県南遺跡－下水道管渠埋設工事に伴う－』柏原市教育委員会　1984
8．桑野一幸『大県南遺跡－市道大県6号線建設に伴う－』柏原市教育委員会　1984
9．北野　重・桑野一幸『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1983年度』柏原市教育委員会　1984
10．花田勝弘・西原清美・広岡　勉『大県南遺跡－山下寺域の調査－』柏原市教育委員会　1985
11．桑野一幸「太平寺遺跡84－1・2次」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1984年度』柏原市教育委員会　1985
12．安村俊史『太平寺・安堂遺跡　1983年度』柏原市教育委員会　1984
13．花田勝弘・田中久雄『鳥坂寺－寺域の調査－1983年度・1984年度』柏原市教育委員会　1985
14．安村俊史『高井田遺跡Ⅱ』柏原市教育委員会　1987
15．北野　重「原山遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報－原山・田辺・大県遺跡－1984年度』柏原市教育委員会　1985
16．北野　重「田辺遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報－原山・田辺・大県遺跡－1984年度』柏原市教育委員会　1985
17．岩崎二郎「西大井遺跡第3次発掘調査概要」大阪府教育委員会　1983
18．松村隆文「上師の里遺跡発掘調査概要・V」大阪府教育委員会　1983
19．森田和伸ほか『野中寺塔跡発掘調査報告』羽曳野市教育委員会　1986
20．「野中寺書院建設に伴う発掘調査成果」羽曳野市教育委員会　昭和62年　他　笠井敏光氏教示による。
21．吉沢則男「製鉄関連遺物について」『古市遺跡群Ⅷ』羽曳野市教育委員会　1987
22．山本　彰・長谷川一英ほか『真福寺遺跡』大阪文化財センター　1986
23．藤柄俊夫・江浦　洋ほか『太井遺跡（その2）』大阪文化財センター　1987
24．『日置荘遺跡（その1）現地説明会資料』大阪文化財センター　昭和63年
25．尾上　実『観音寺遺跡第1次発掘調査概要』大阪文化財センター　1984
26．松田良憲『大和川・今池遺跡発掘調査概要Ⅲ－大和川下流域下水道今池処理場建設に伴う－』大阪府教育委員会　1986
27．森井貞雄『上遺跡発掘調査概要－堺市上・草部所在－』大阪府教育委員会　1985
28．石神　怡・橋本高明・芝野圭之助「西浦橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大阪文化財センター　昭和59年
29．橋本高明・安星　進・大野　薫『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－西浦橋遺跡－』大阪文化財センター　1984
30．橋本高明『菱木下遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会　1985
31．森　浩一・石部正志・宇田川誠一「大阪府高石町伽羅橋遺跡調査報告」『古代学研究15・16合併号』古代学研究会　1956
32．岩城　一・佐藤正則・灰掛　薫・福田雄子『和気Ⅱ－和気遺跡発掘調査報告書Ⅱ』和気遺跡調査会　1981
33．広瀬和雄・仮屋喜一郎・岡田直樹ほか『海会寺　海会寺発掘調査報告書』泉南市教育委員会　1987
34．國乘和雄ほか『旧山遺跡』大阪文化財センター　昭和58年

れない。やや時代は下るが館の造営について記した『庭訓往来』二月状返条に「山造斧・鑿・鉇・并造作釘。金物用意炭竈、召居鍛冶令造候也。」（鍛冶炉を用意して鍛冶屋を呼び、斧・鑿・鉇や釘などを造らせなさい。）とある。また、四月状往条には「可招居輩者、鍛冶・鋳物師・巧匠・木道・并金銀銅細工…中略…櫛引・鳥帯子折。」とあり、市町を経営する場合に招かねばならない職人や商人をあげている。このように中世にはすでに鍛冶が職業として成立しており、村落ではいわゆる「村の鍛冶屋」として従事していたのであろう。ただ、その時期・規模や各村落で鍛冶を行なっていたのか、地域の中で中心的村落にのみ存在したのか等不明な点も多い。今後類例の増加を待って検討してみたい。

梶原南遺跡は弥生時代・奈良時代・中世にわたる複合遺跡で、その中心は奈良時代であることが明らかになった。檜尾川東部地域は梶原寺跡を除けば奈良時代の遺跡は知られておらず、同寺の建立氏族や成立背景など全く不明であった。それゆえ、今回の調査で奈良時代の集落を検出したことは、この地域の歴史を考えるうえで重要である。

当遺跡と梶原寺跡は山陽道をはさんで隣接し、他に奈良時代の集落がみられないことからすれば、両者の間には何らかのつながりがあったと考えられる。出土遺物については、木簡や墨書土器、鉸具などが注目される。鉸具は破損品であるがその大きさから下級の官人が使用するもの[3]と考えられ、この官人と集落の性格を考えていくうえで重要である。和銅四年、嶋上郡に置かれた大原駅の位置は未だ明らかでない。大原駅と梶原南遺跡を結びつけることは、現段階では難しいが、大原駅がその機能を失なったであろう平安時代までに梶原南遺跡が廃絶することは興味深い。

今回の調査では、梶原南遺跡の実体に一歩近づき、8世紀における集落の一端が明らかになった。梶原南遺跡に先行する7世紀代の集落の位置や梶原寺の建立氏族、梶原南遺跡廃絶後の情況など解明しなければならない点は数多いが、檜尾川東部地域の歴史を明らかにするためにも今後周辺部の調査に期するとともに、本調査は貴重な手がかりを得たといえよう。

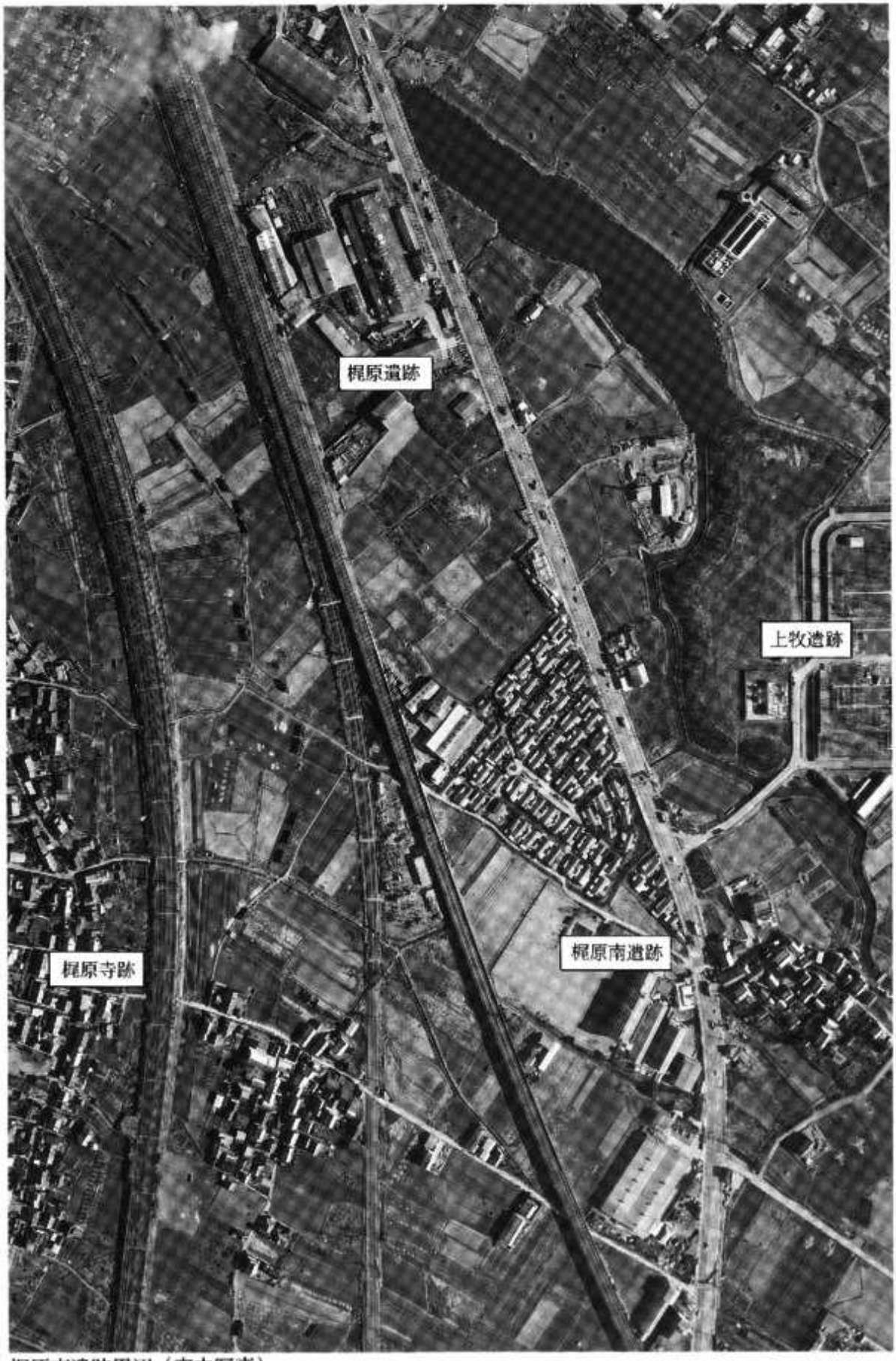
<注>

① 原口正三「萩之庄遺跡」『高槻市史』第6巻考古編　高槻市役所　昭和48年
② 森田克行「梶原寺跡」『昭和51・52年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会　昭和53年
③ 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1980年
④ ③に同じ
⑤ 森田克行「梶原寺跡」『昭和53・54・55年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会　昭和56年
⑥ a. 天坊幸彦「高槻通史」高槻市役所　昭和28年
b. 服部昌之「淀川右岸地域の条里と水無瀬庄」『人文研究23』　昭和47年
⑦ 鎌ケ江一朗「45－J・K・N・O地区」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』高槻市教育委員会　1987年
⑧ 大船孝弘「55－A・B・E・F地区」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』高槻市教育委員会　1987年
⑨ ③に同じ
⑩ 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物の展開」『考古学研究』第25巻4号　1979年
⑪ 「嶋上郡衙跡発掘調査概要」大阪府教育委員会　1971年
⑫ 郡家今城遺跡では約30m四方の範囲（約1段）を家地として占めている。
a. 原口正三「古代・中世の集落」『考古学研究』第23巻4号　1977年
b. 旧代克巳「西国の集落」『日本歴史考古学を学ぶ(上)』有斐閣　昭和58年
⑬ 長岡京における掘立柱建物は3間×2間が典型である。
山中　章「長岡京の建築遺構と宅地の配置」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会　昭和61年
⑭ 広瀬和雄「奈良時代集落について二、三の問題」『大県城跡』大阪文化財センター　昭和59年
⑮ 森田　勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻　吉川弘文館　1983年
⑮ 近藤義郎「土器製塩の研究」青木書店　1984年
⑰ a. 岩本正二「製塩土器の流通とその用途」『考古学研究』第27巻2号　1980年
b. 岩本正二「7～9世紀の土器製塩」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983年
⑱ 広山堯道「古代製塩について二、三の想定」『日本歴史』第303号　1983年
⑲ 森田克行「高槻市域出土資料について」『海の生産用具』埋蔵文化財研究集会　第19回研究集会資料　1986年
⑳ 『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所　昭和55年
㉑ 大県南遺跡では、古墳時代の炉（鍛冶炉）跡より多量に製塩土器が出土している。
北野　重「大県南85－1次調査区」『大県・大県南遺跡』柏原市教育委員会　1986年
㉒～㉕ 野崎　準氏教示による。
㉖ 『茨木市史』茨木市役所　昭和44年
㉗ 西崎卓也・中井　公『平城京左京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査報告』奈良市教育委員会　昭和57年
㉘ 宮沢智士「東区の遺構」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所　昭和51年
㉙ 大阪文化財センターで実見　江浦　洋氏の教示を得た。
鍋柄俊夫・江浦　洋他『太井遺跡（その2）』大阪文化財センター　1987年
㉚ 佐藤興治「金属器」『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所　昭和49年

<参考文献>

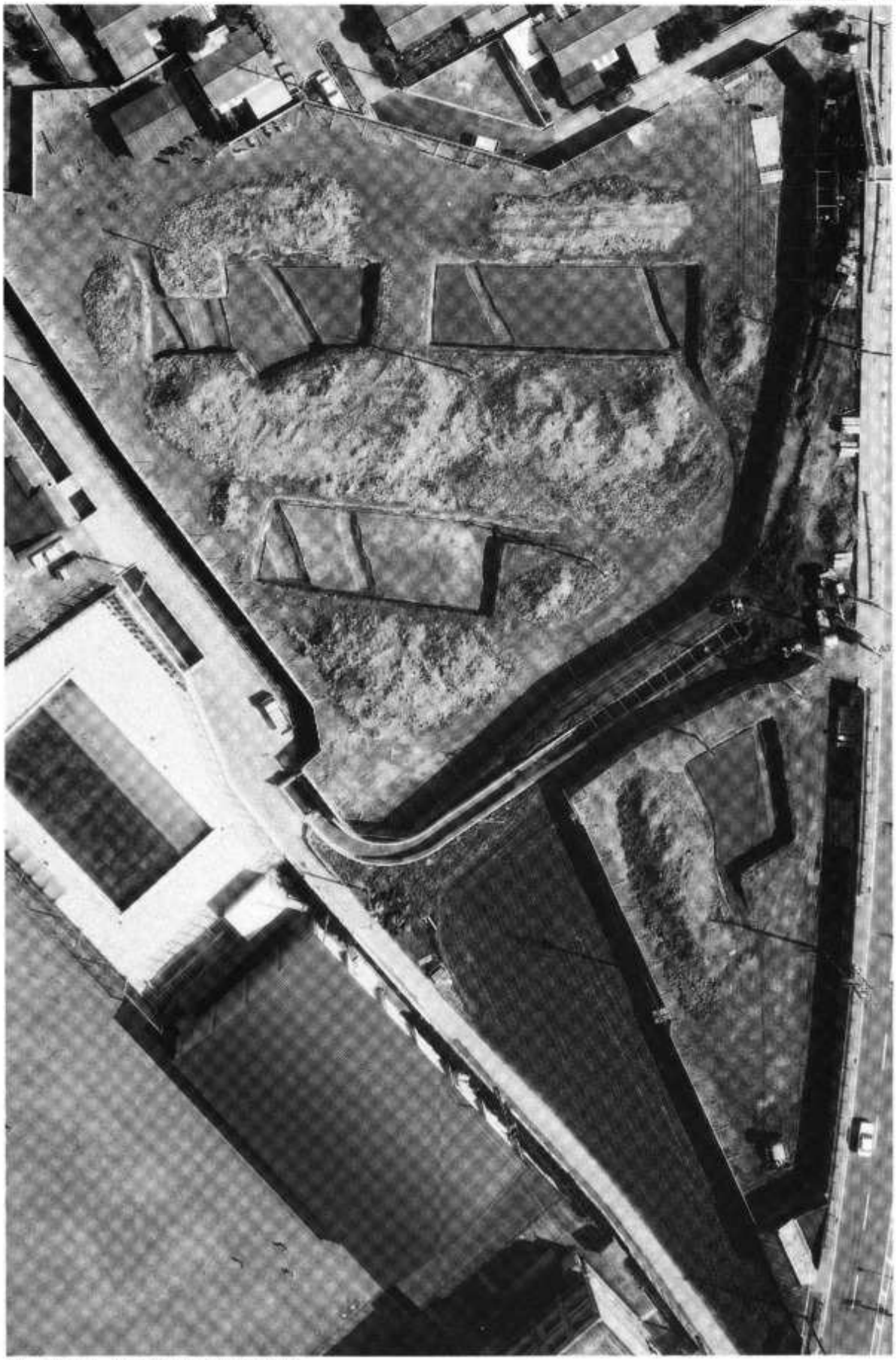
『高槻市史』第1巻本編1　高槻市役所　昭和52年
『高槻市史』第6巻考古編　高槻市役所　昭和48年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1971年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会　1972年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会　1973年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会　1974年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会　1975年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要』高槻市教育委員会　1977年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・3』高槻市教育委員会　1979年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・4』高槻市教育委員会　1980年
『嶋上郡衙跡発掘調査概要・5』高槻市教育委員会　1981年
『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7』高槻市教育委員会　1983年
『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・9』高槻市教育委員会　1985年
『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』高槻市教育委員会　1987年
『昭和47・48年度　高槻市文化財年報』高槻市教育委員会　昭和49年
『昭和50年度　高槻市文化財年報』高槻市教育委員会　昭和51年
『昭和53・54・55年度　高槻市文化財年報』高槻市教育委員会　昭和56年
橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書－中世集落の調査－』高槻市教育委員会　1974年
橋本久和『中世土器の製作技法ノート』『中近世土器の基礎的研究Ⅲ』中世土器研究会　1987年
平島裕正『塩』法政大学出版局　1973年
橋本久和『高槻市出土の製塩土器(一)』『摂河泉文化資料』第33号　摂河泉文庫　1983年
國乘和雄ほか『田山遺跡』大阪文化財センター　昭和58年
山内紀嗣『布留遺跡出土の製塩土器Ⅰ』『考古学研究中間報告9』埋蔵文化財天理教調査団　1984年
小林行雄『銅鋼』『古代の技術』塙書房　昭和37年
小林行雄『瑠璃』『続古代の技術』塙書房　昭和39年
窪田蔵郎『製鉄遺跡』ニューサイエンス社　昭和58年
『古代鉄生産の検討』古代を考える会　1984年
『鉄ができるまで』日本鉄鋼連盟　昭和59年
東頭清明『古代の村』岩波書店　1985年
大船孝弘『梶原南遺跡発掘調査概要－第1次調査』梶原遺跡調査会　1984年
高成哲也・宮崎康雄『梶原南遺跡発掘調査概要－第2次調査－』梶原遺跡調査会　1985年

PLATES



梶原南遺跡周辺（空中写真）

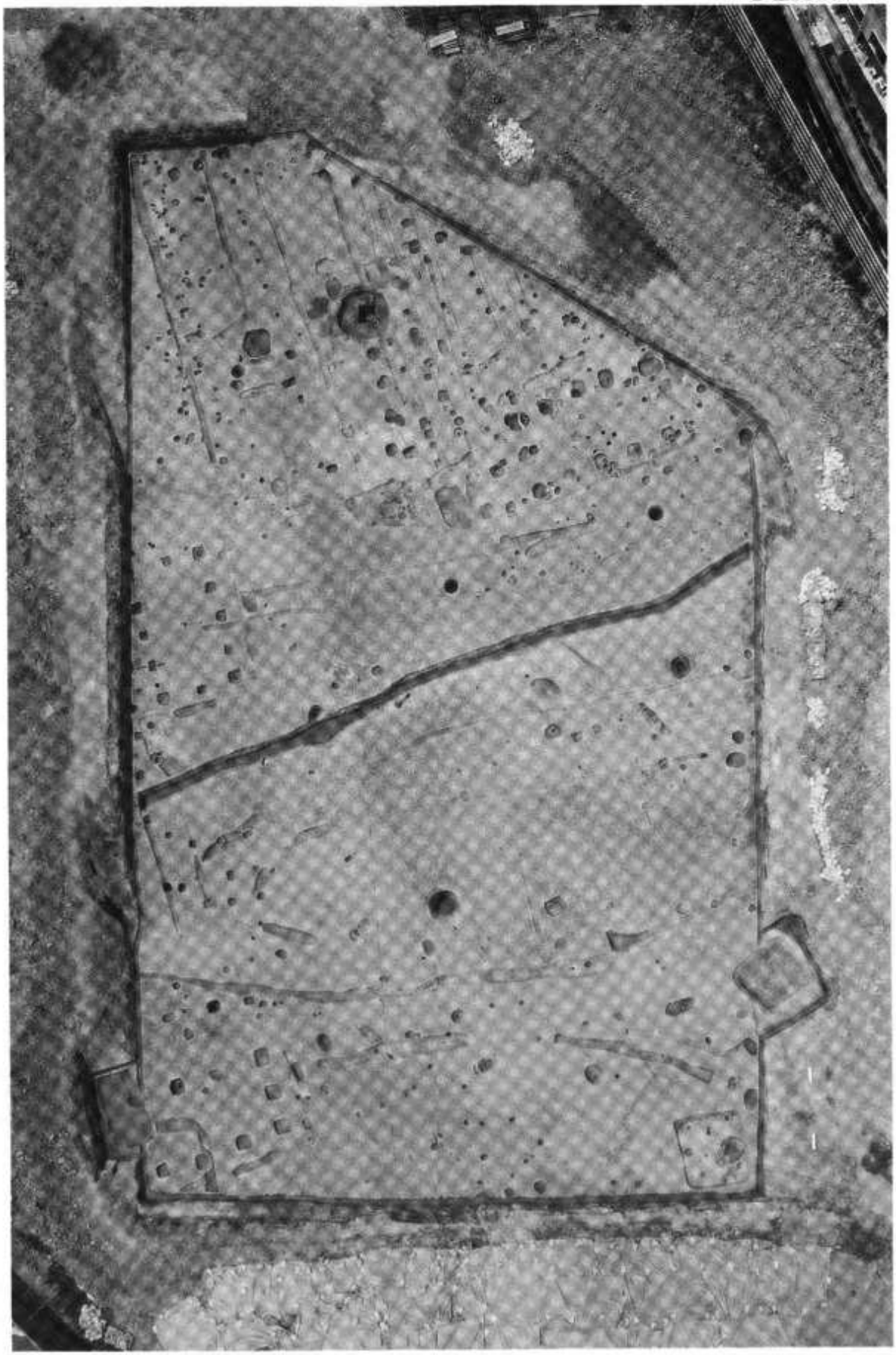
調査区全景（空中写真）



A～Dトレンチ全景（空中写真）

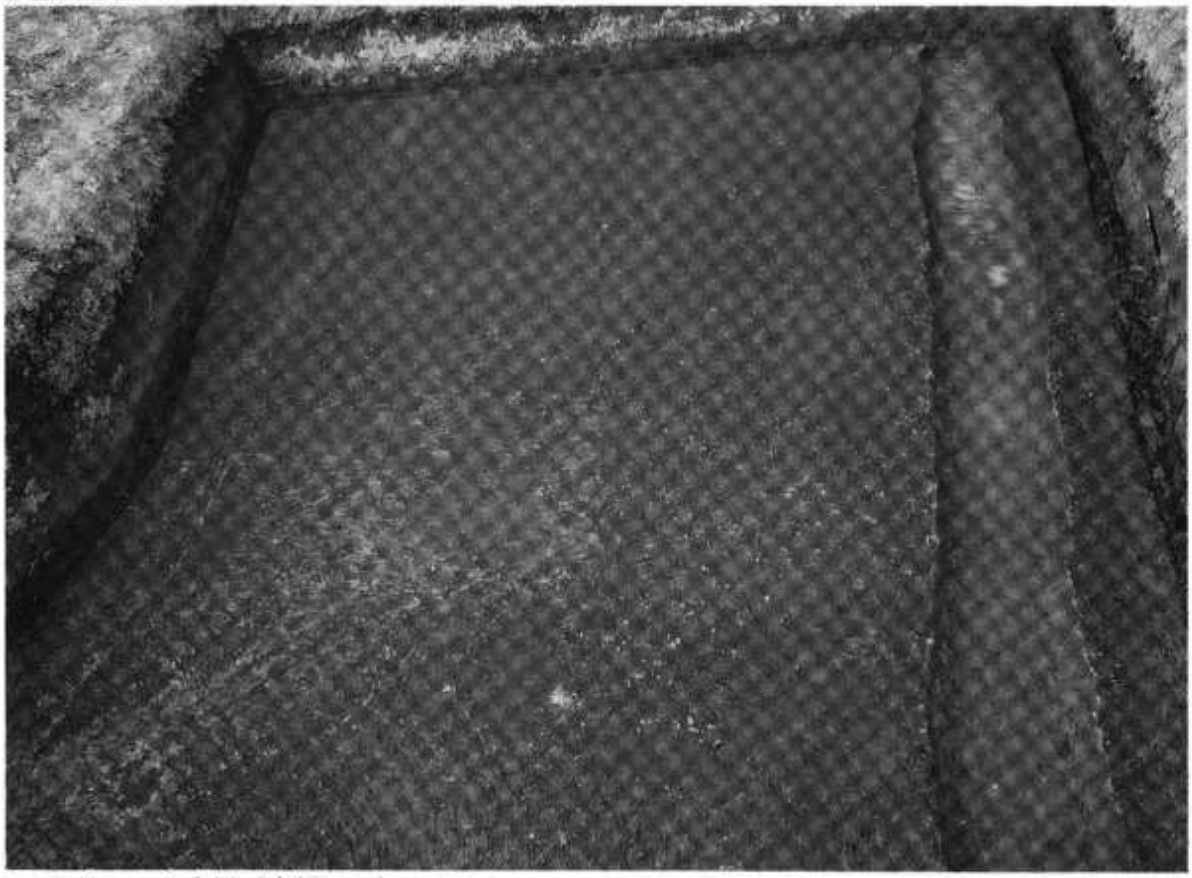
PLATE 4

E～Gトレンチ全景（空中写真）

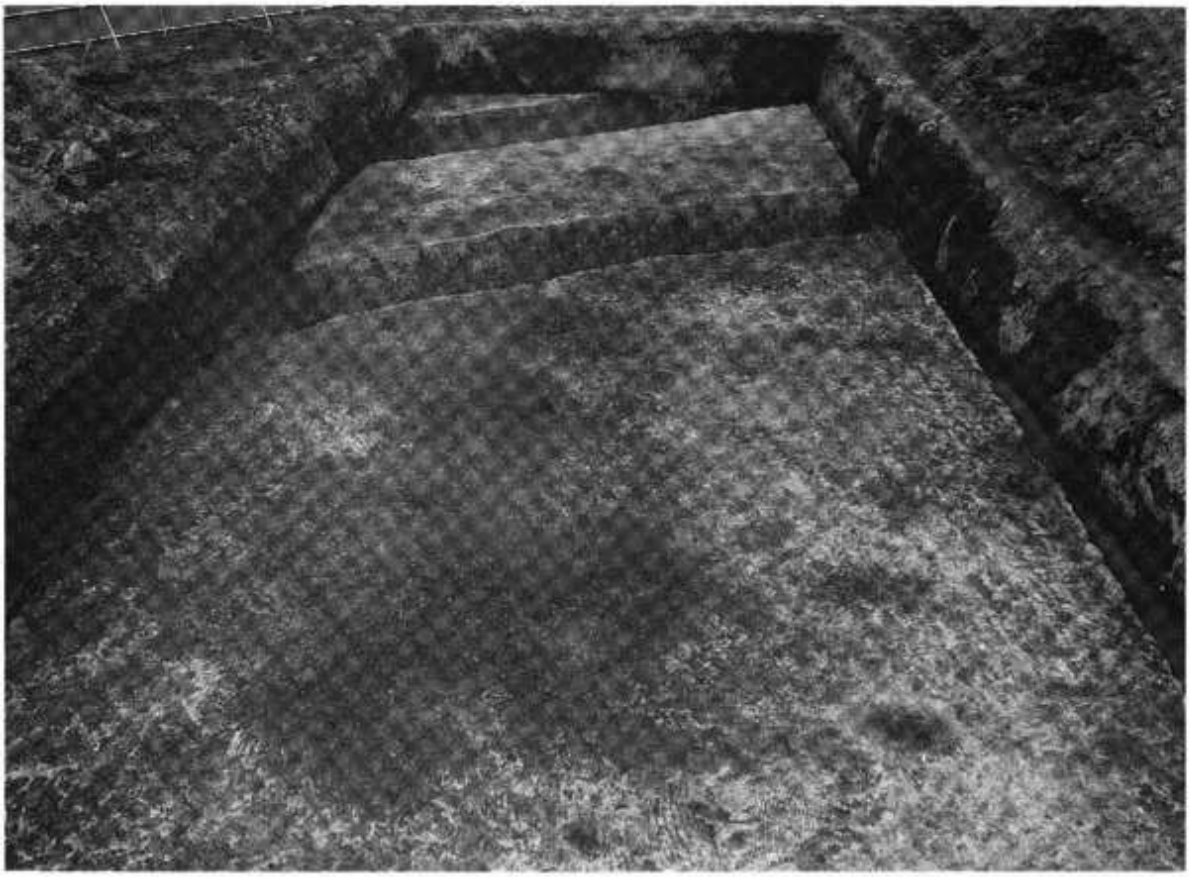


Hトレンチ全景（空中写真）

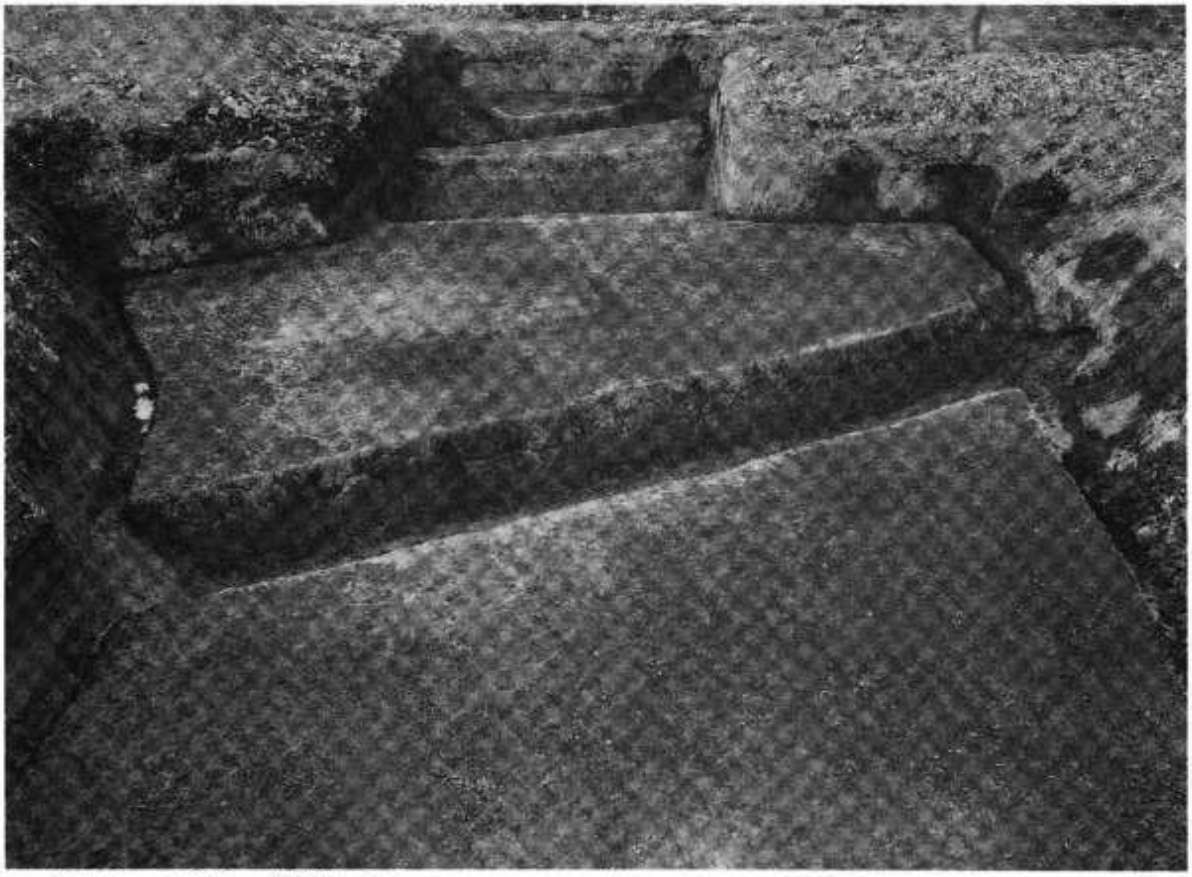
PLATE 6



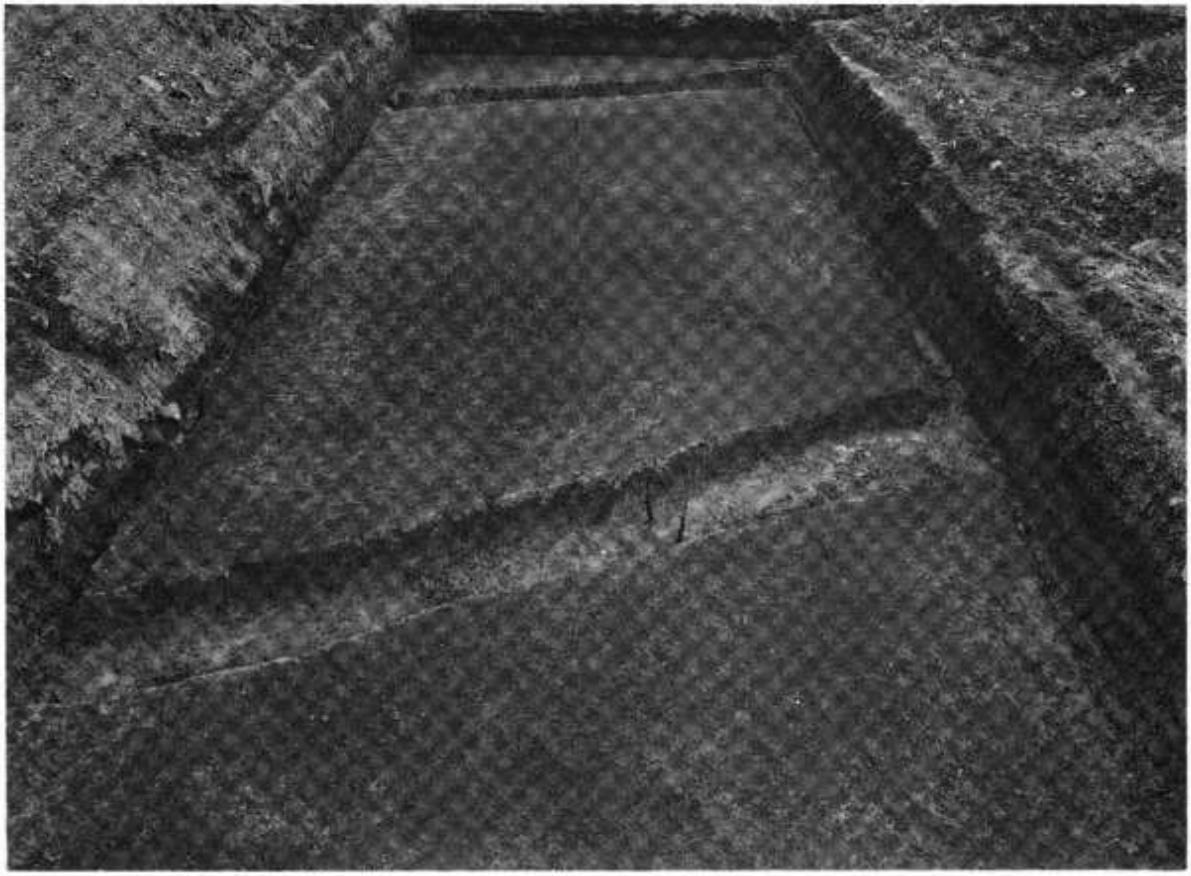
a. Aトレンチ全景（南側から）



b. Bトレンチ全景（東側から）

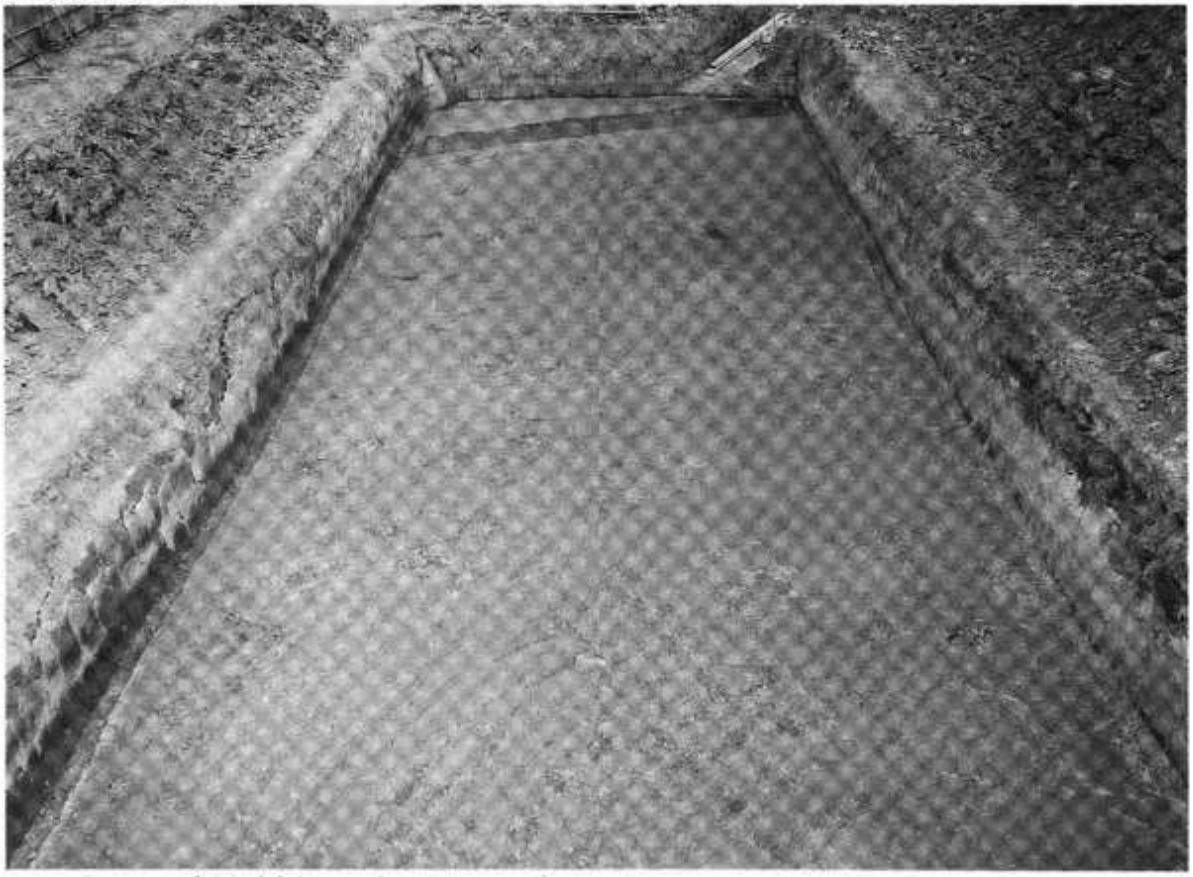


a. Cトレンチ全景 （東側から）

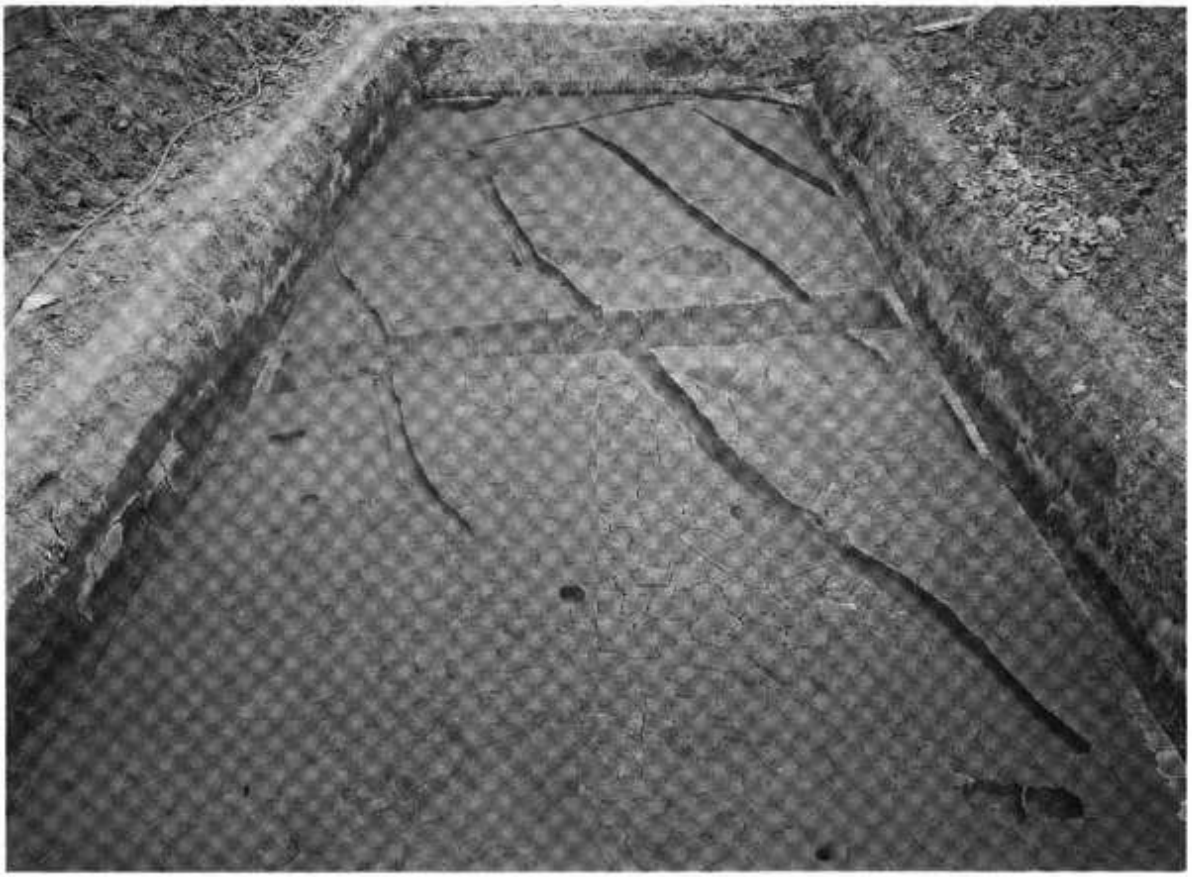


b. Dトレンチ全景（東側から）

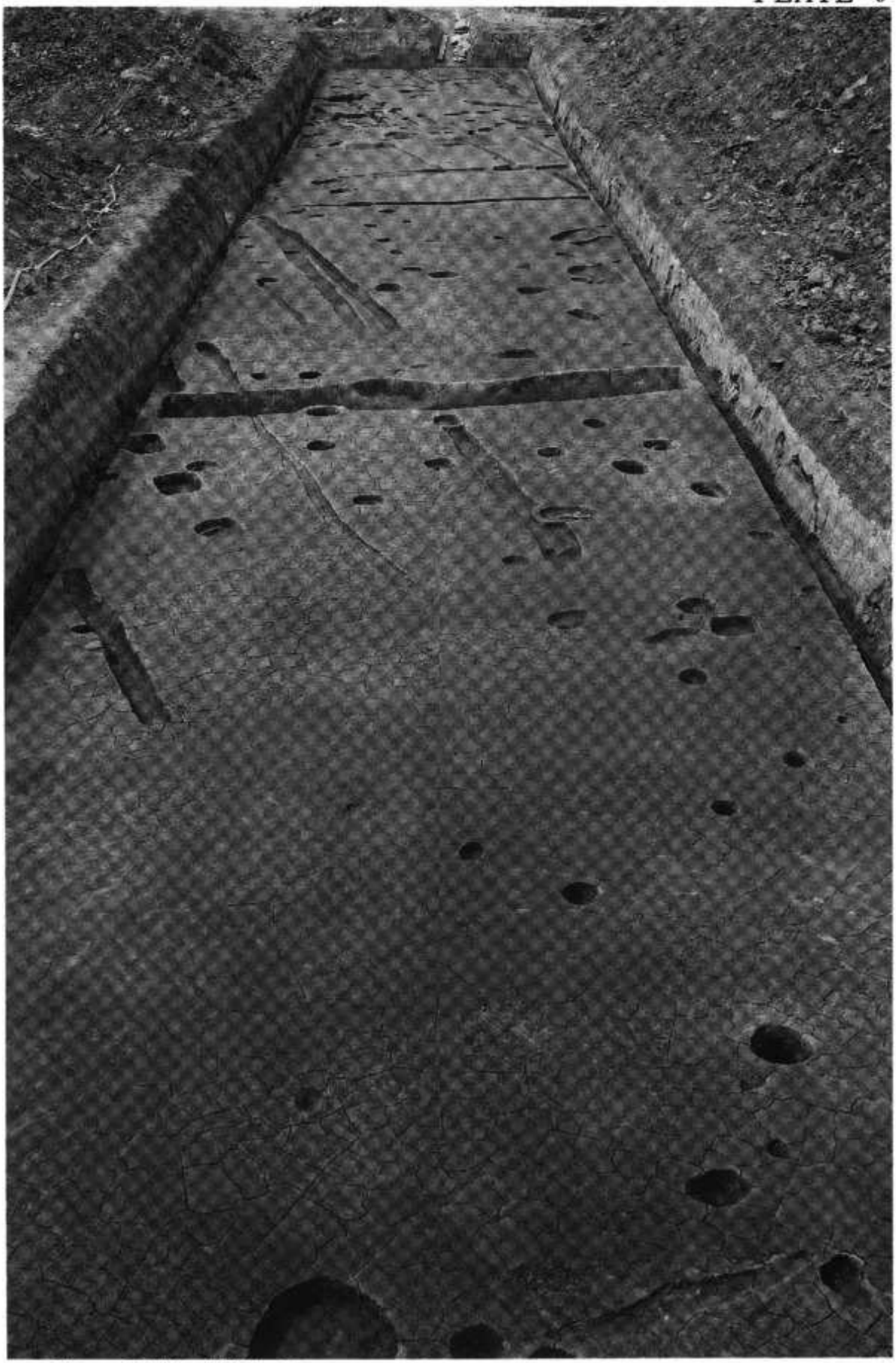
PLATE 8



a. Eトレンチ全景（東側から）

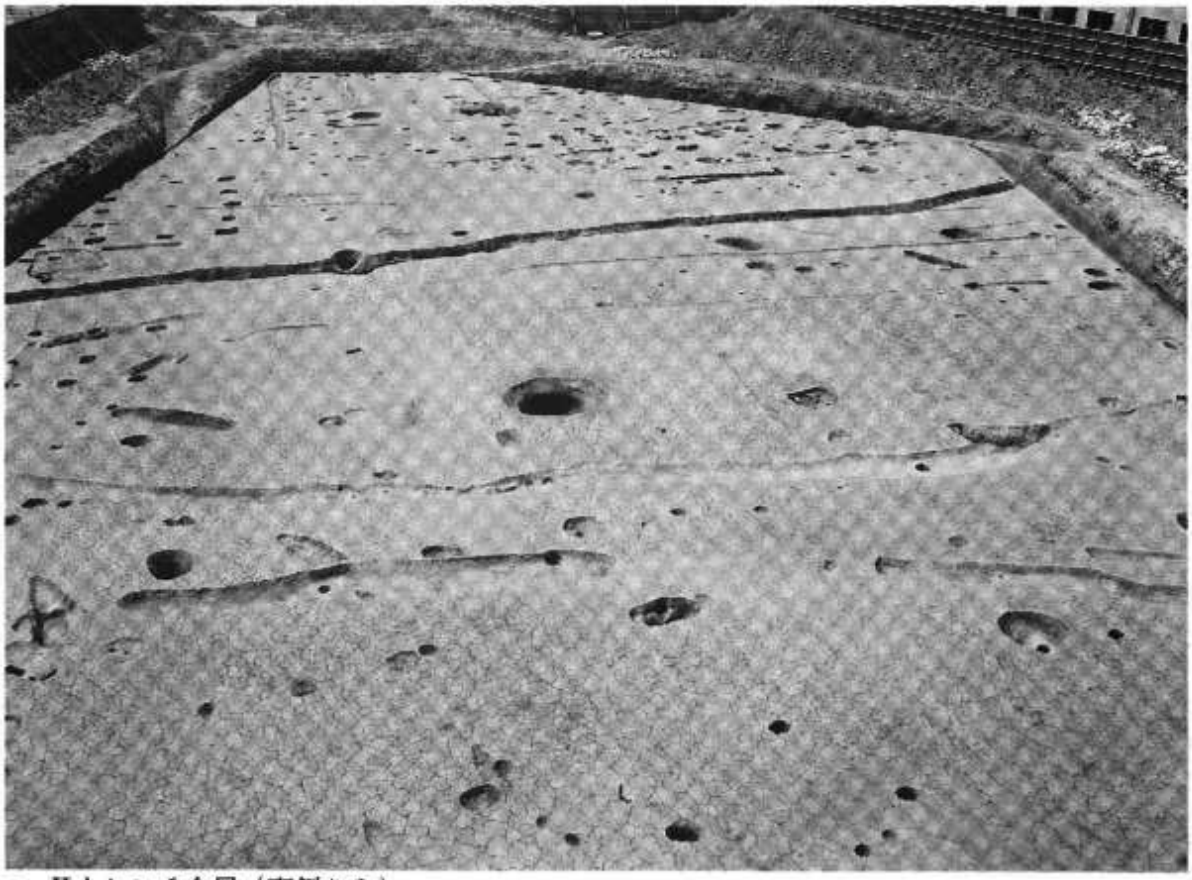


b. Fトレンチ全景（東側から）

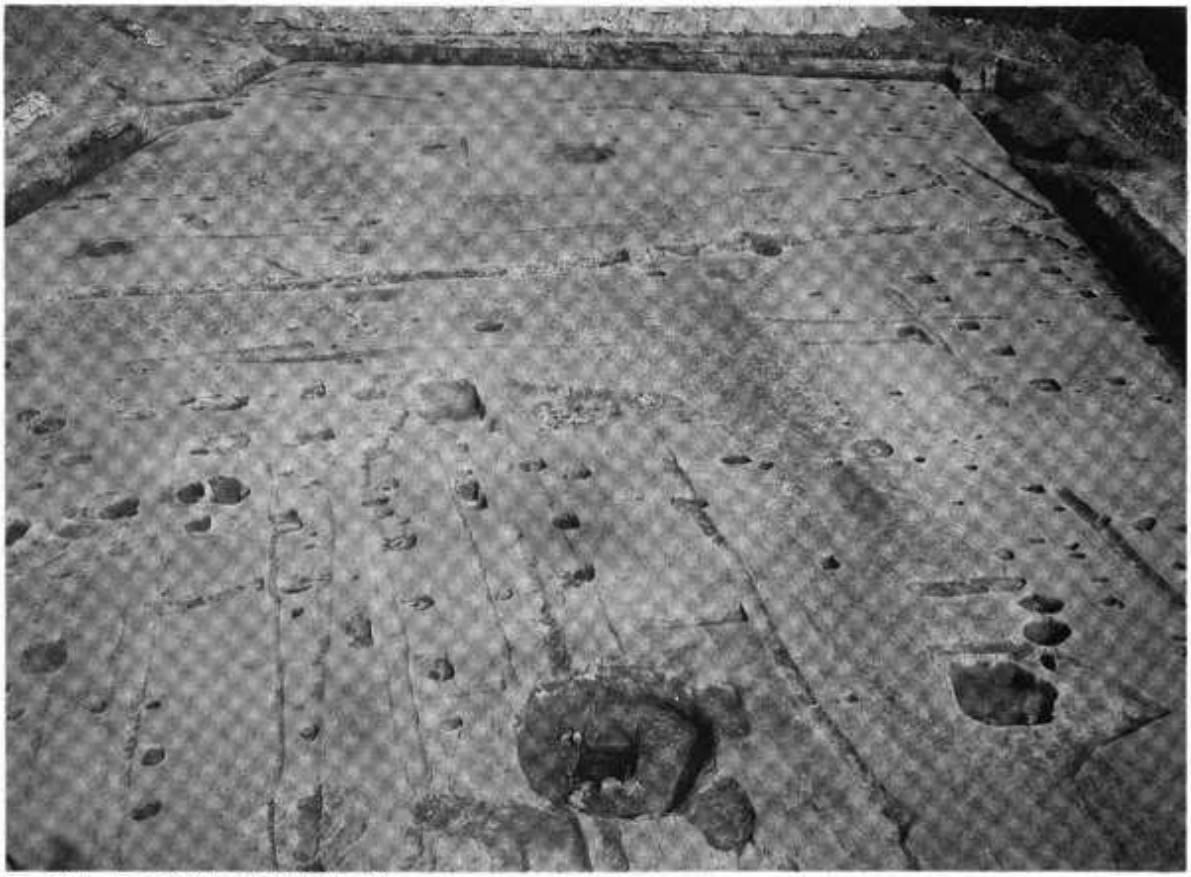


a. Gトレンチ全景 （東側から）

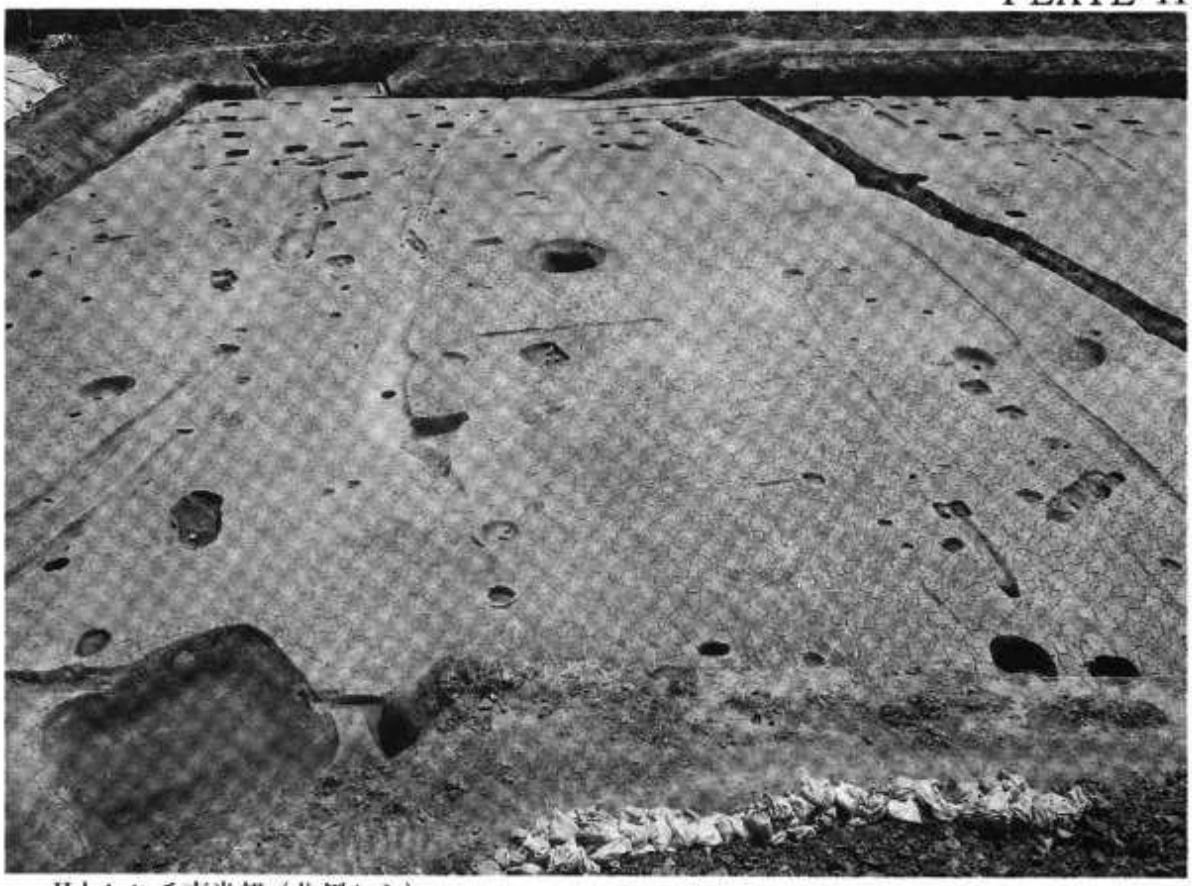
PLATE 10



a. Hトレンチ全景（東側から）



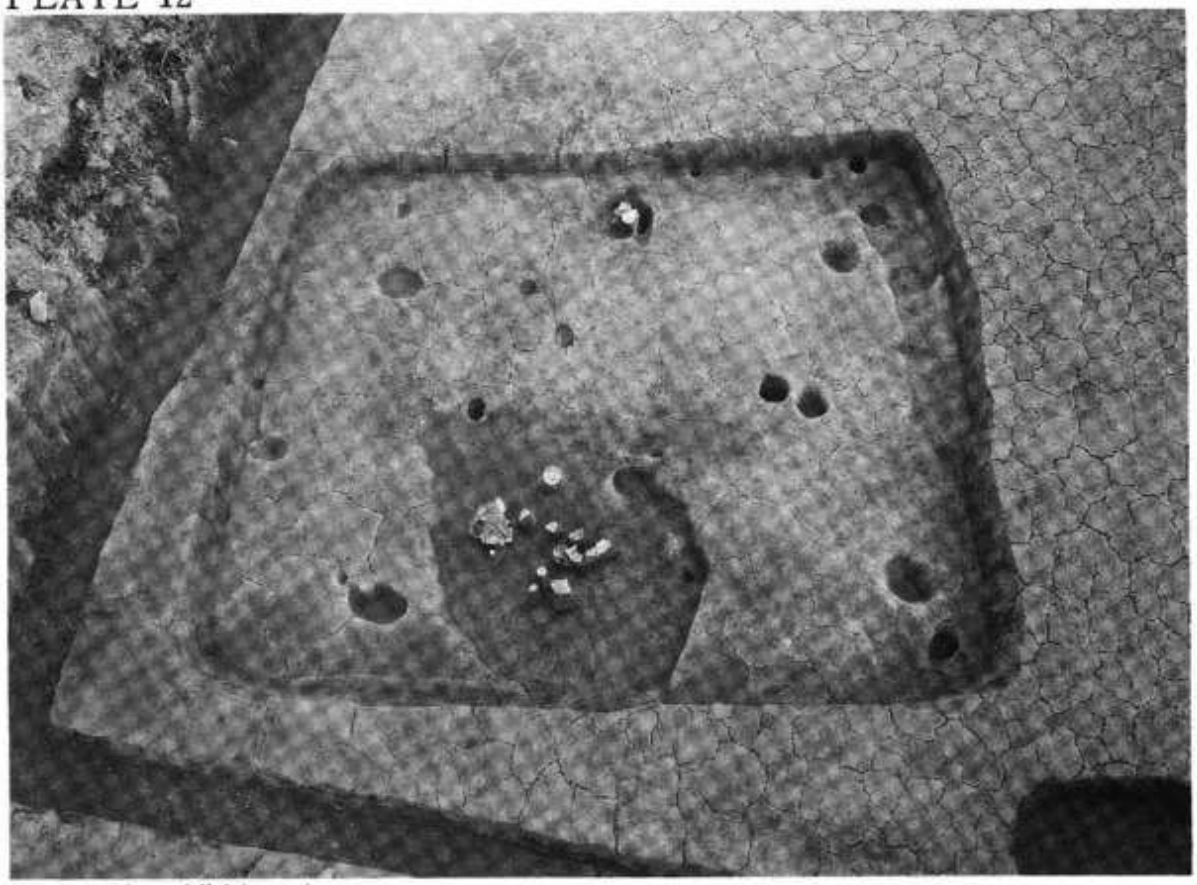
b. Hトレンチ全景（西側から）



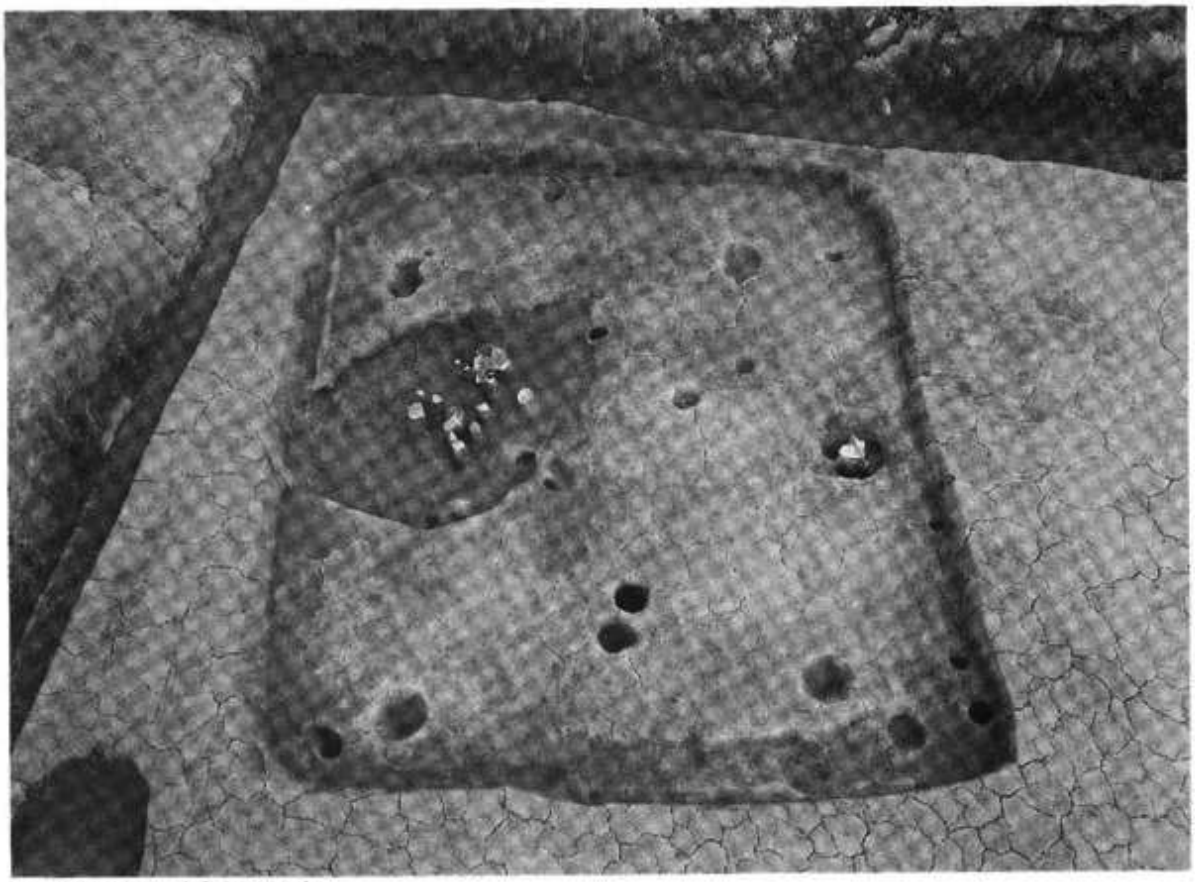
a. Hトレンチ東半部（北側から）

b. Hトレンチ西半部（北側から）

PLATE 12

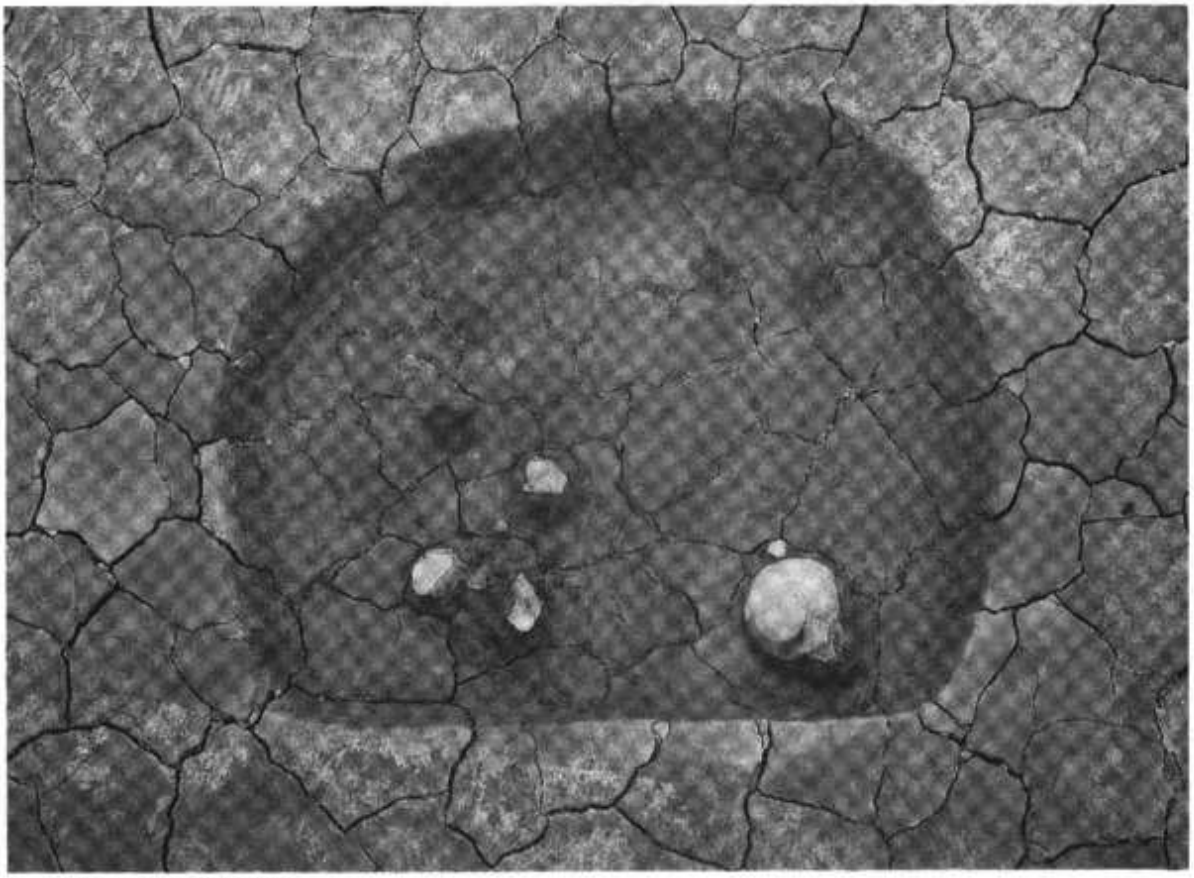


a. 住居跡 1 （北側から）



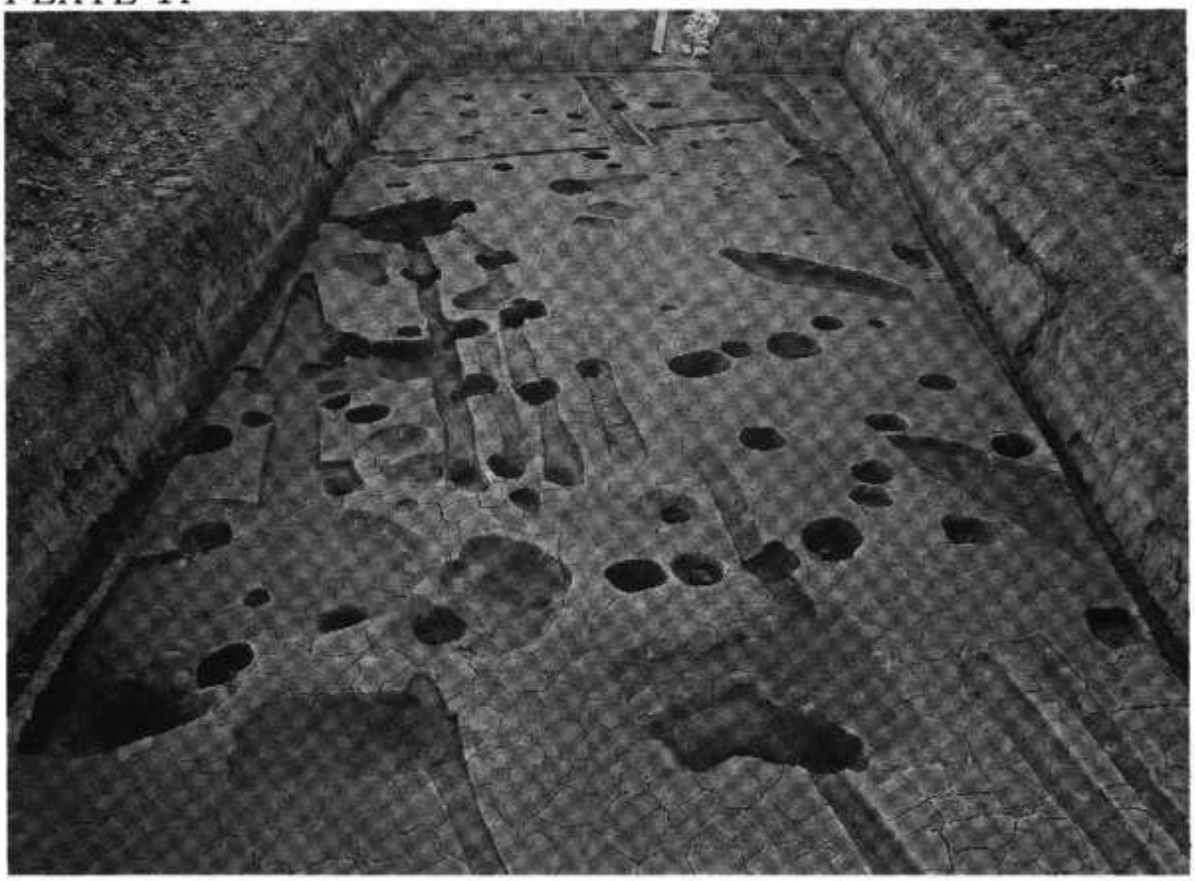
b. 住居跡 1 （南側から）

a. 土壙1（南側から）



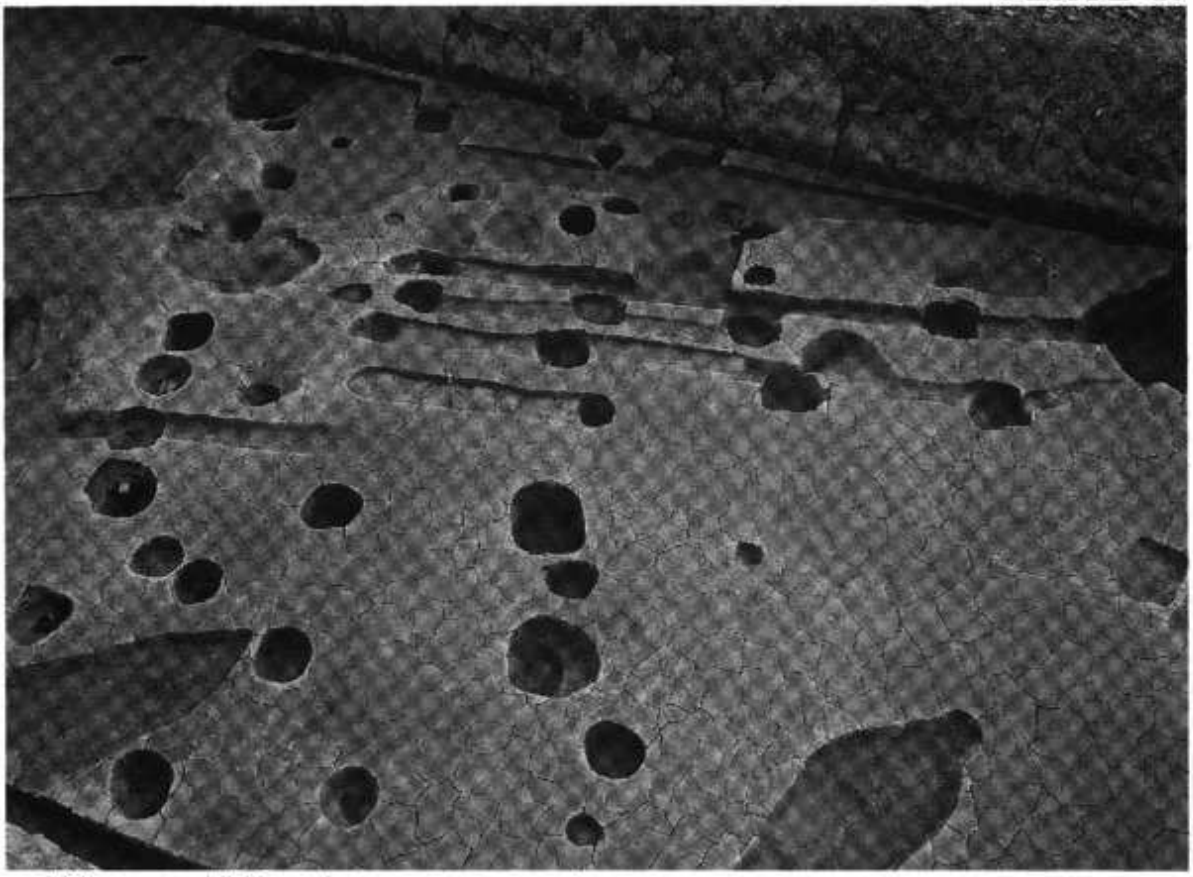
b. 土壙1（西側から）

PLATE 14

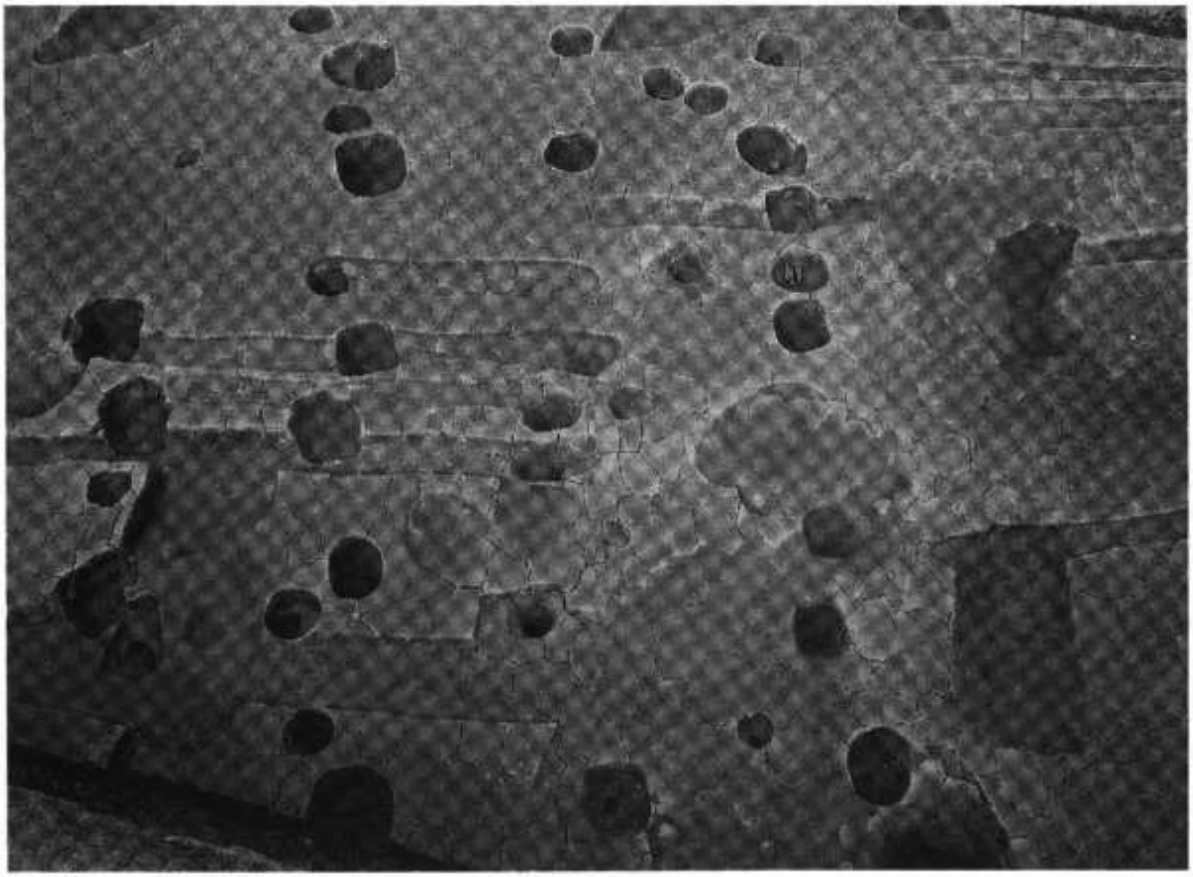


a. 建物1～3、柵1（東側から）

b. 建物1～3、柵1・2（南西側から）



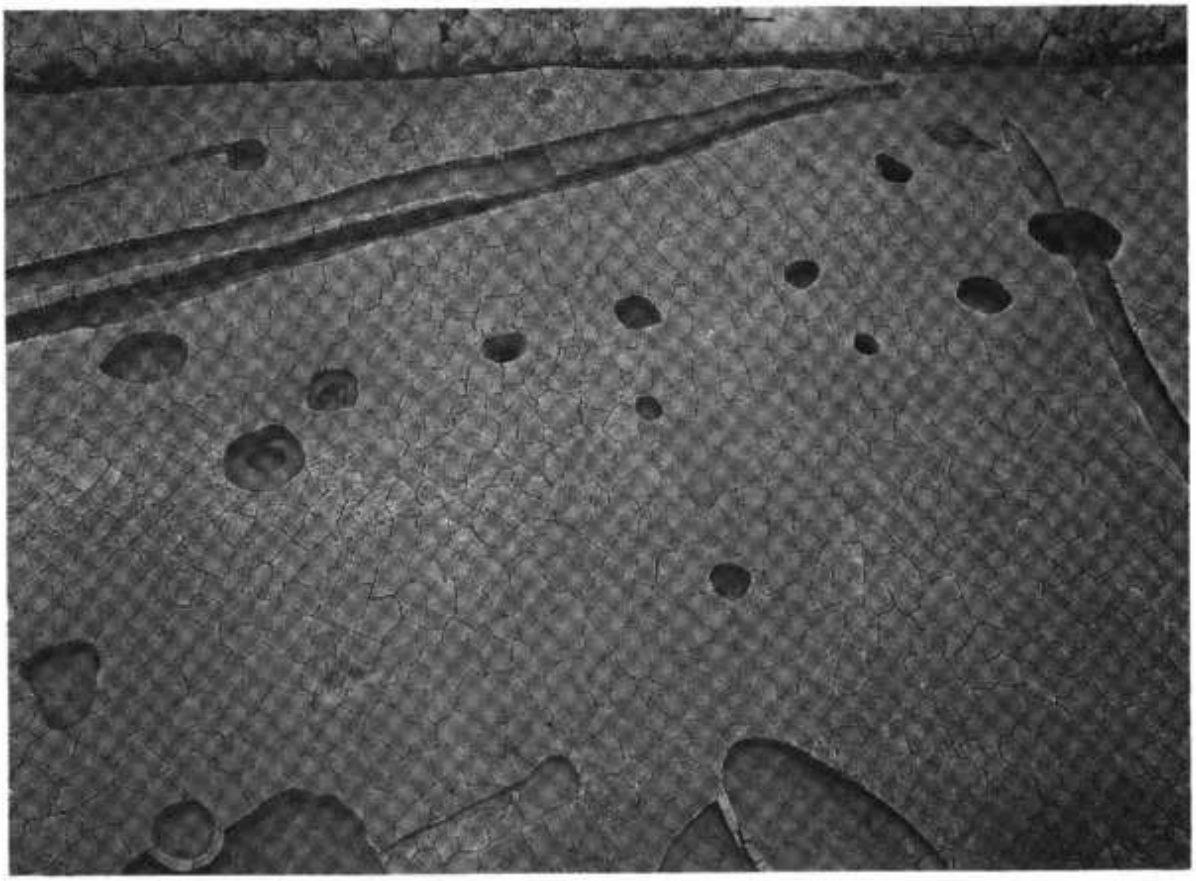
a. 建物１～３（北側から）



b. 建物３、柵１（南側から）

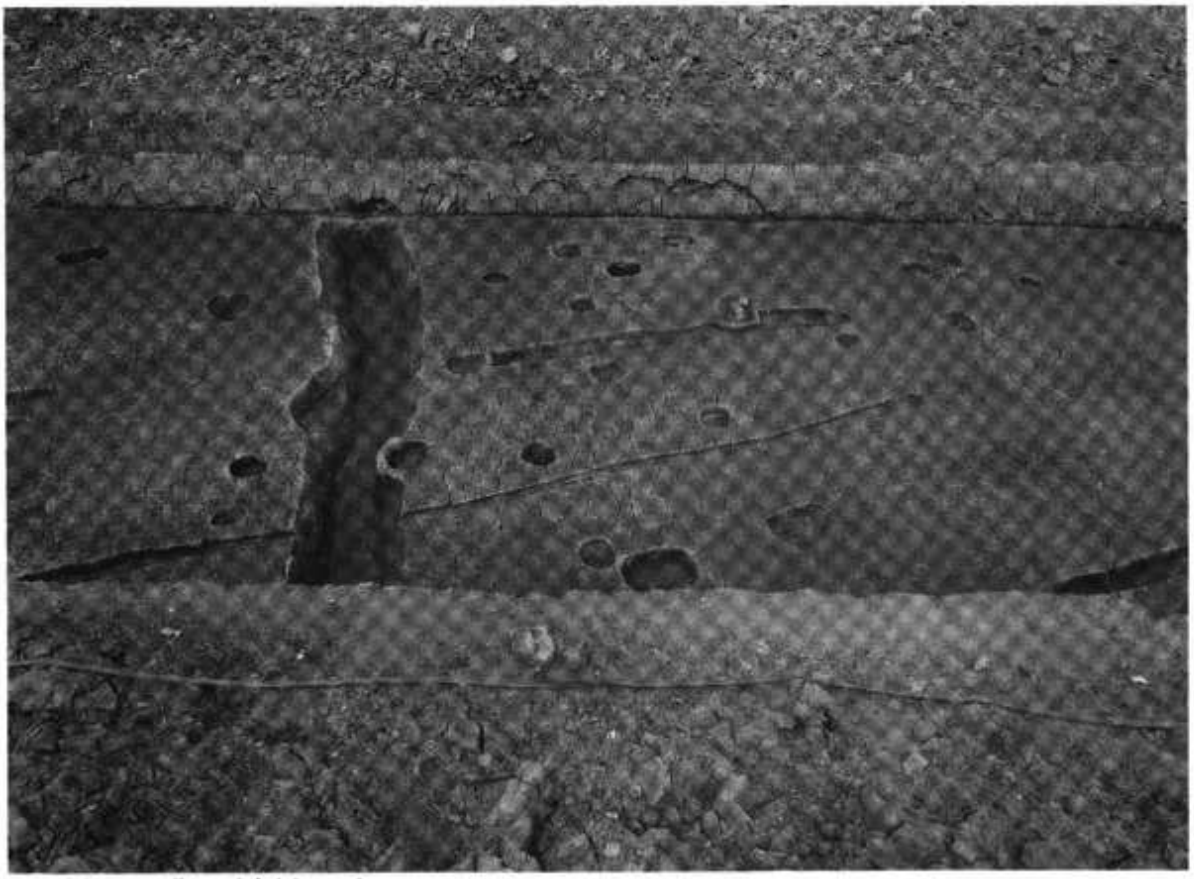
PLATE 16

a. 建物4～6（南西側から）



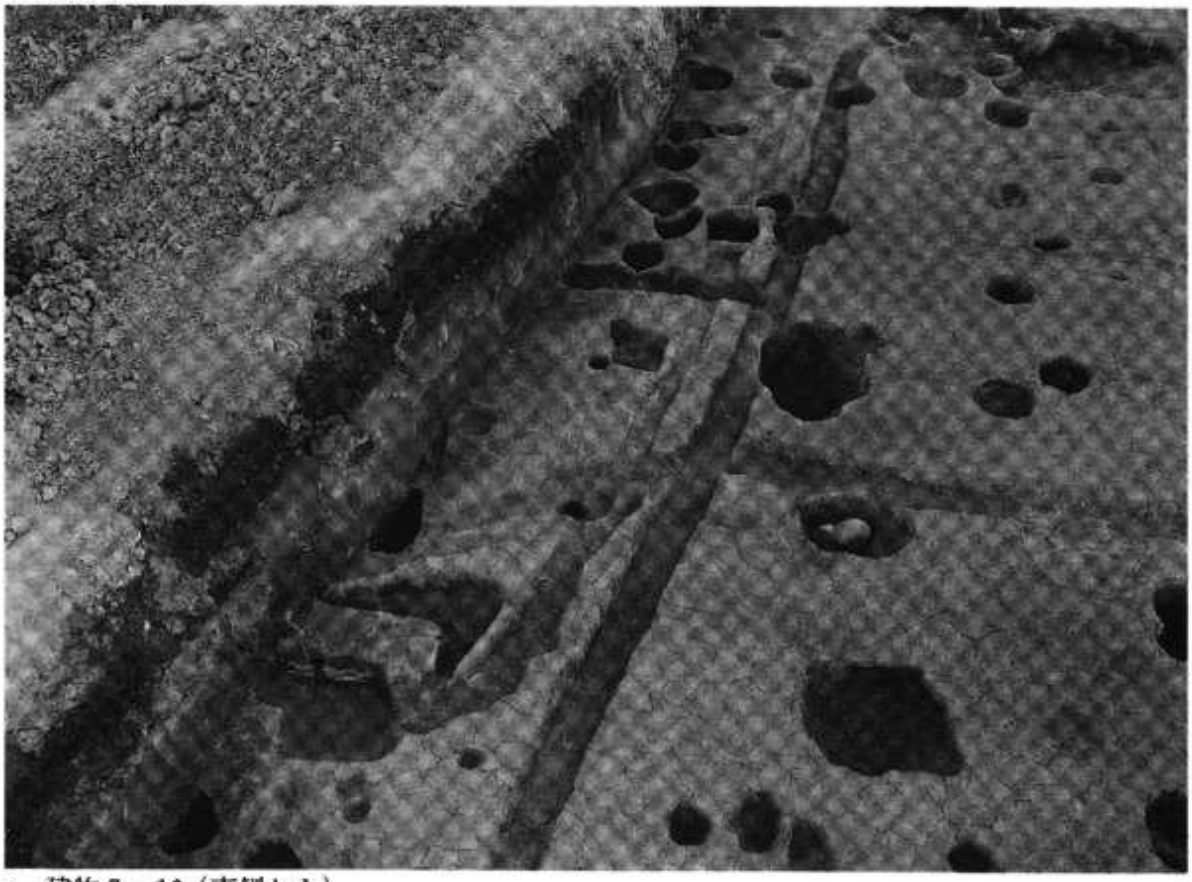
b. 建物5（北側から）

a. 建物6、溝5（北西側から）

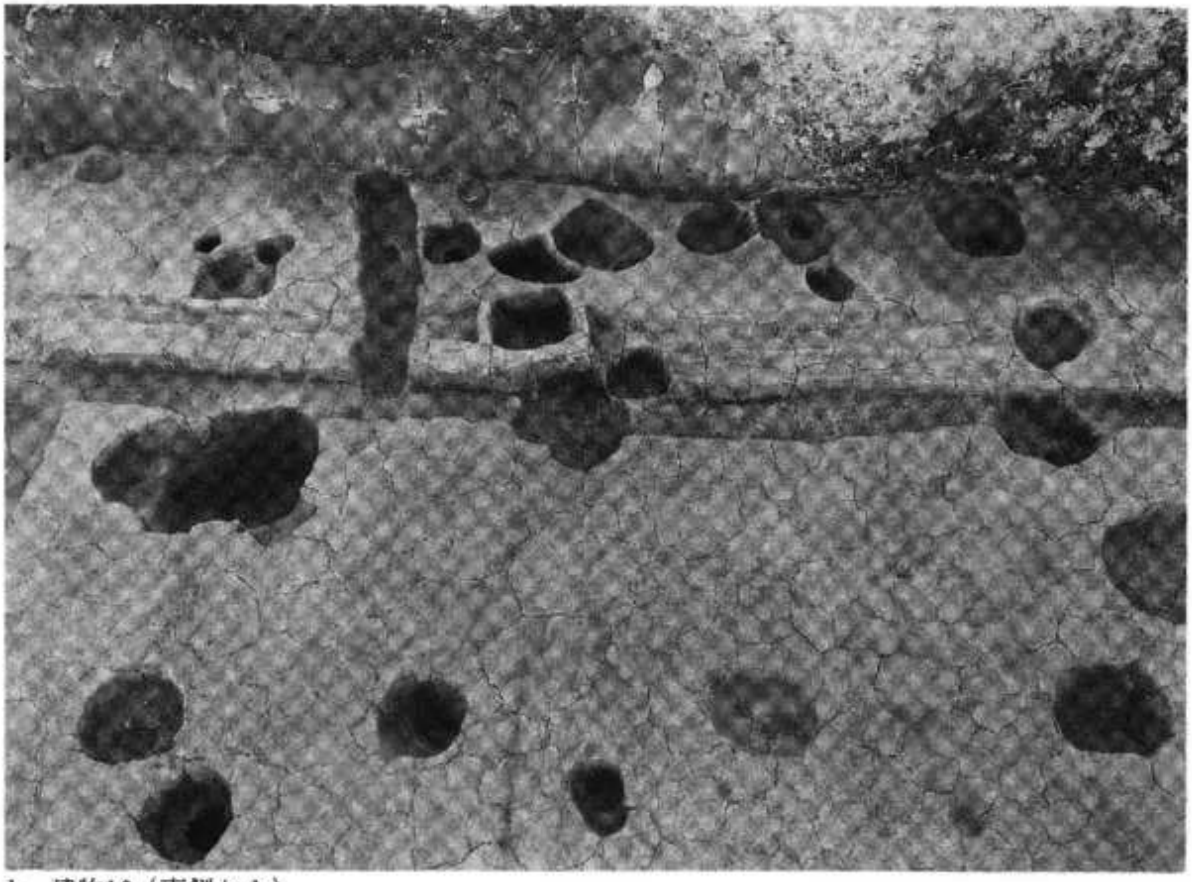


b. 建物6、溝5（南側から）

PLATE 18



a. 建物7・16（南側から）



b. 建物16（東側から）